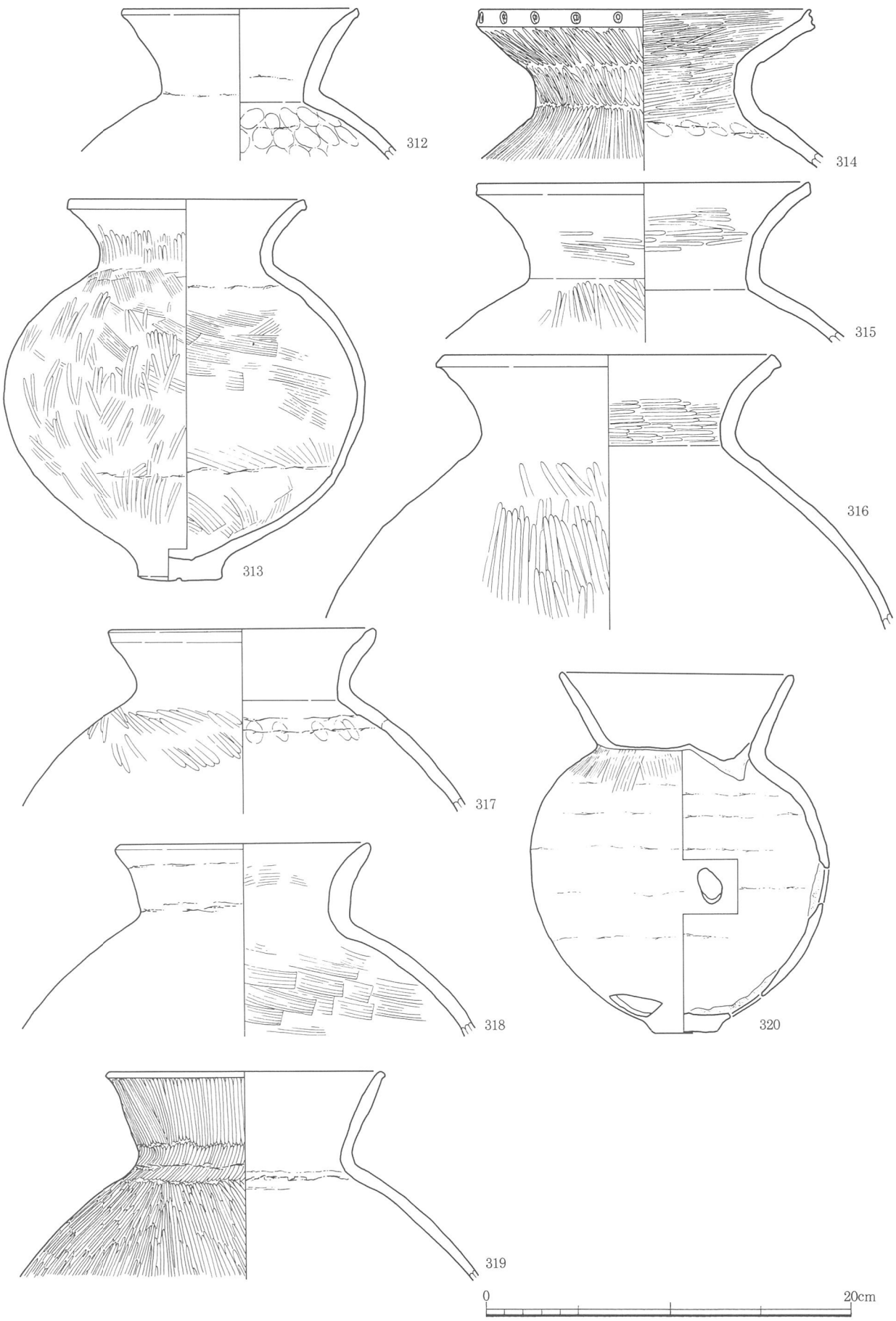


Fig.67　ＳＤ1305出土遺物実測図（８）

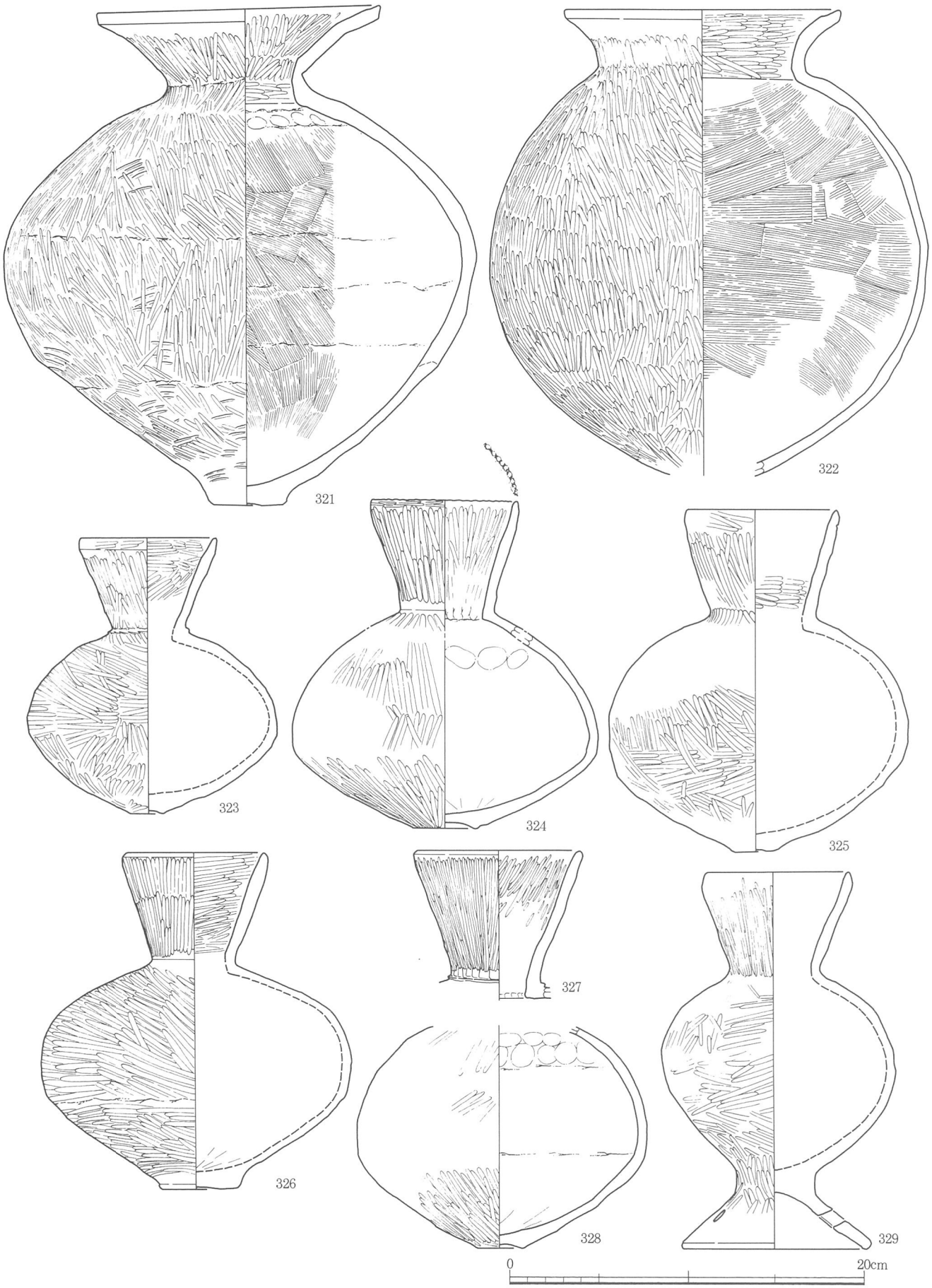


Fig. 68　ＳＤ1305出土遺物実測図（９）

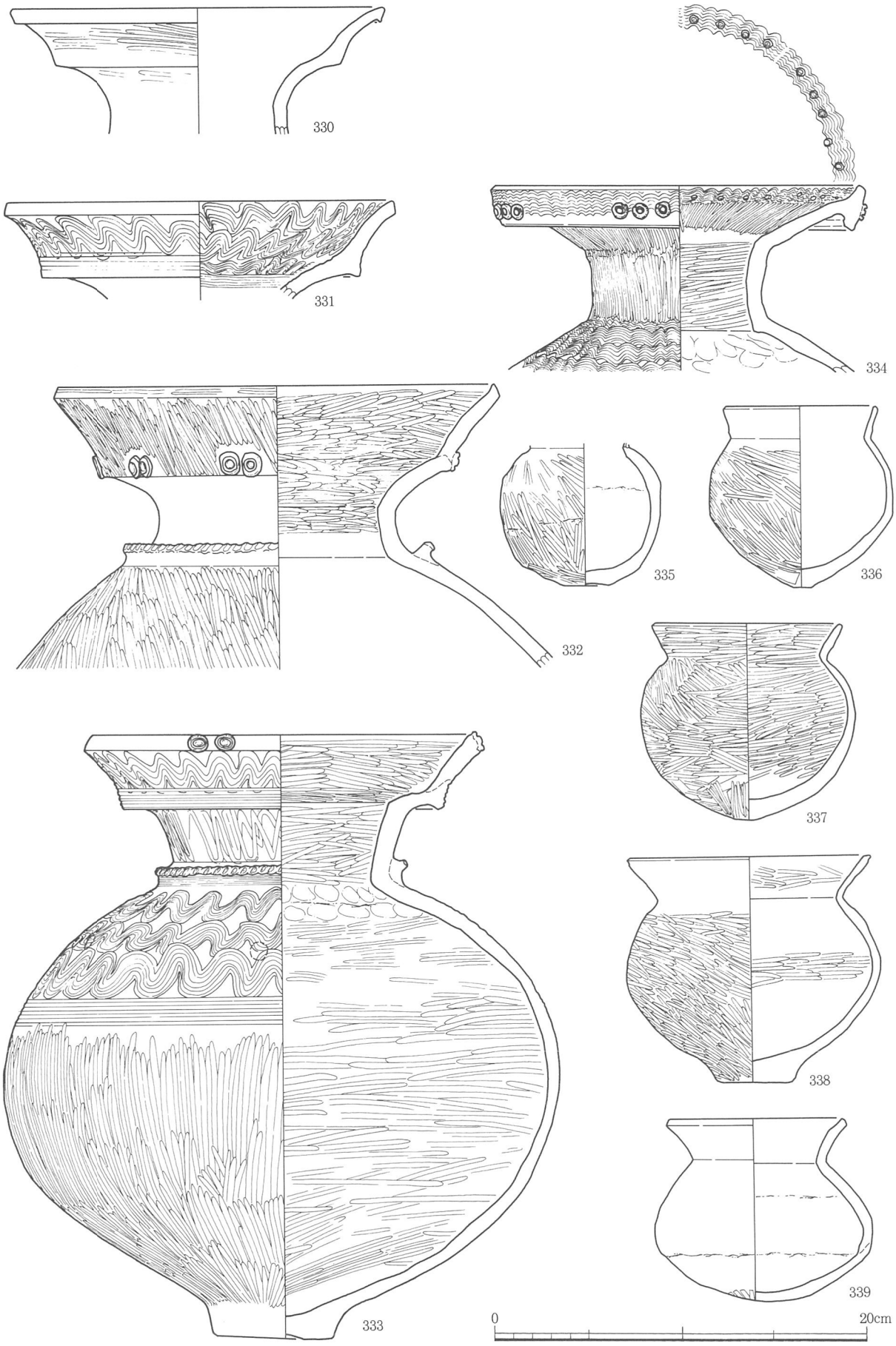


Fig. 69　ＳＤ1305出土遺物実測図(10)

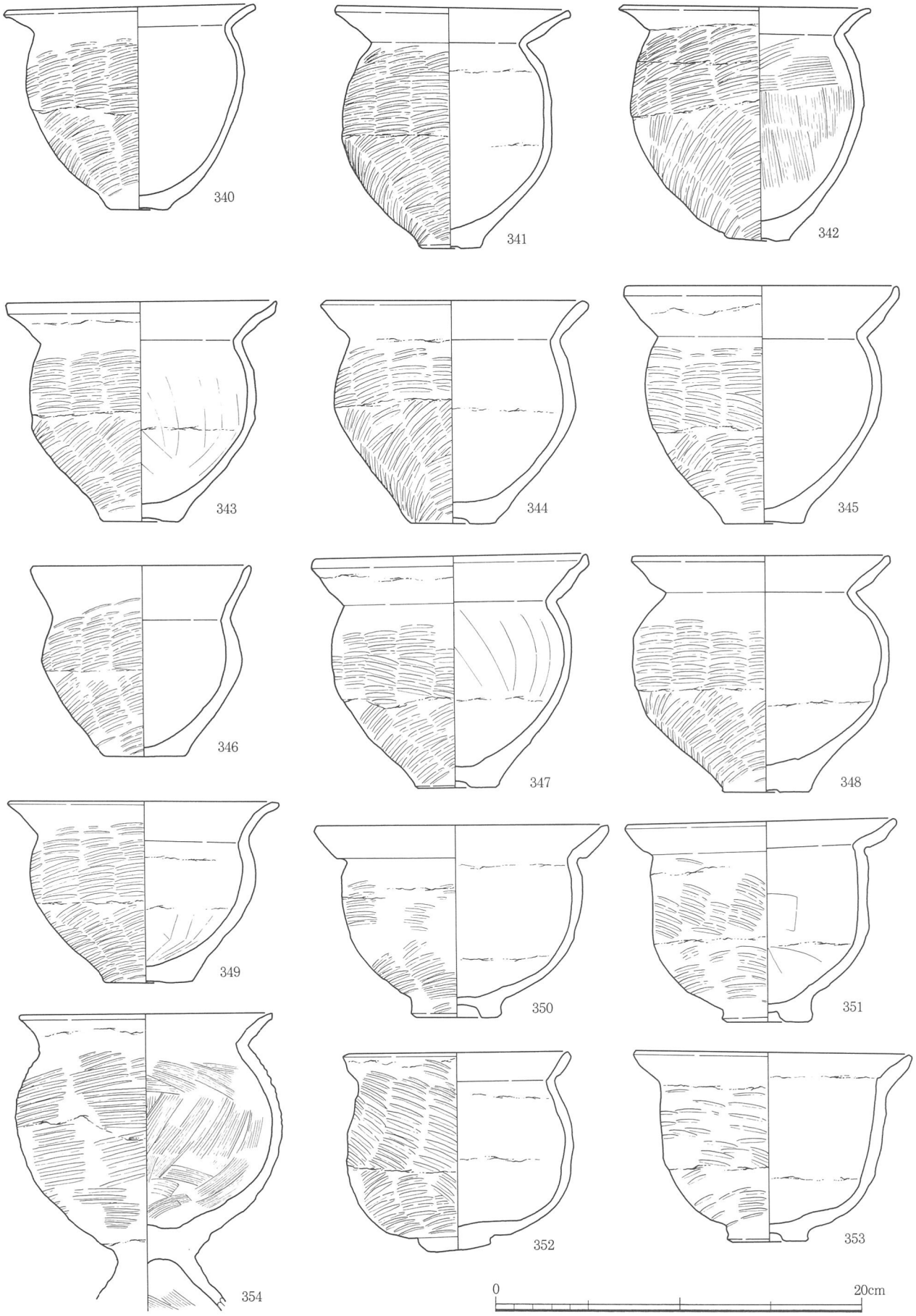


Fig. 70　ＳＤ1305出土遺物実測図（11）

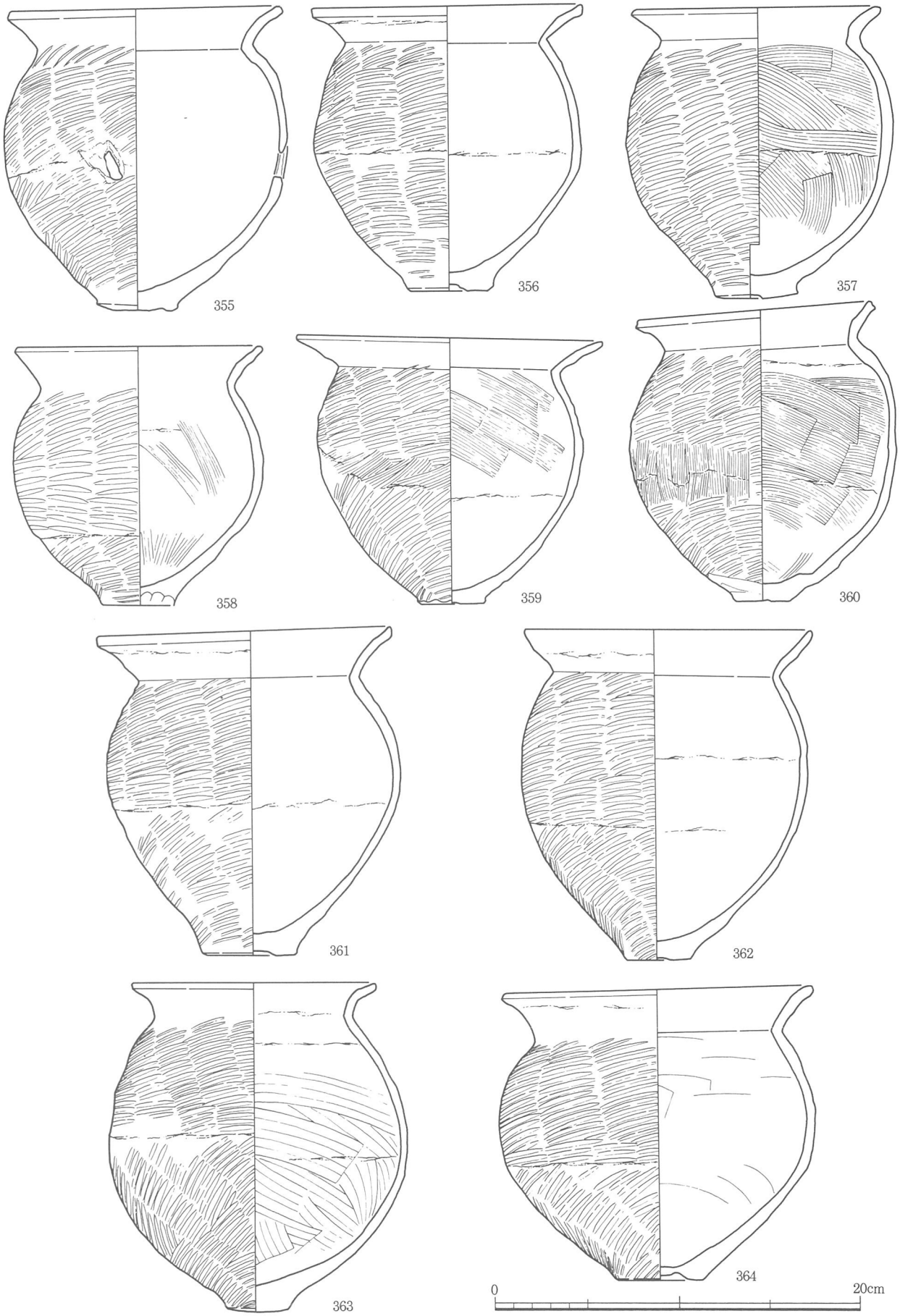


Fig. 71　ＳＤ1305出土遺物実測図(12)

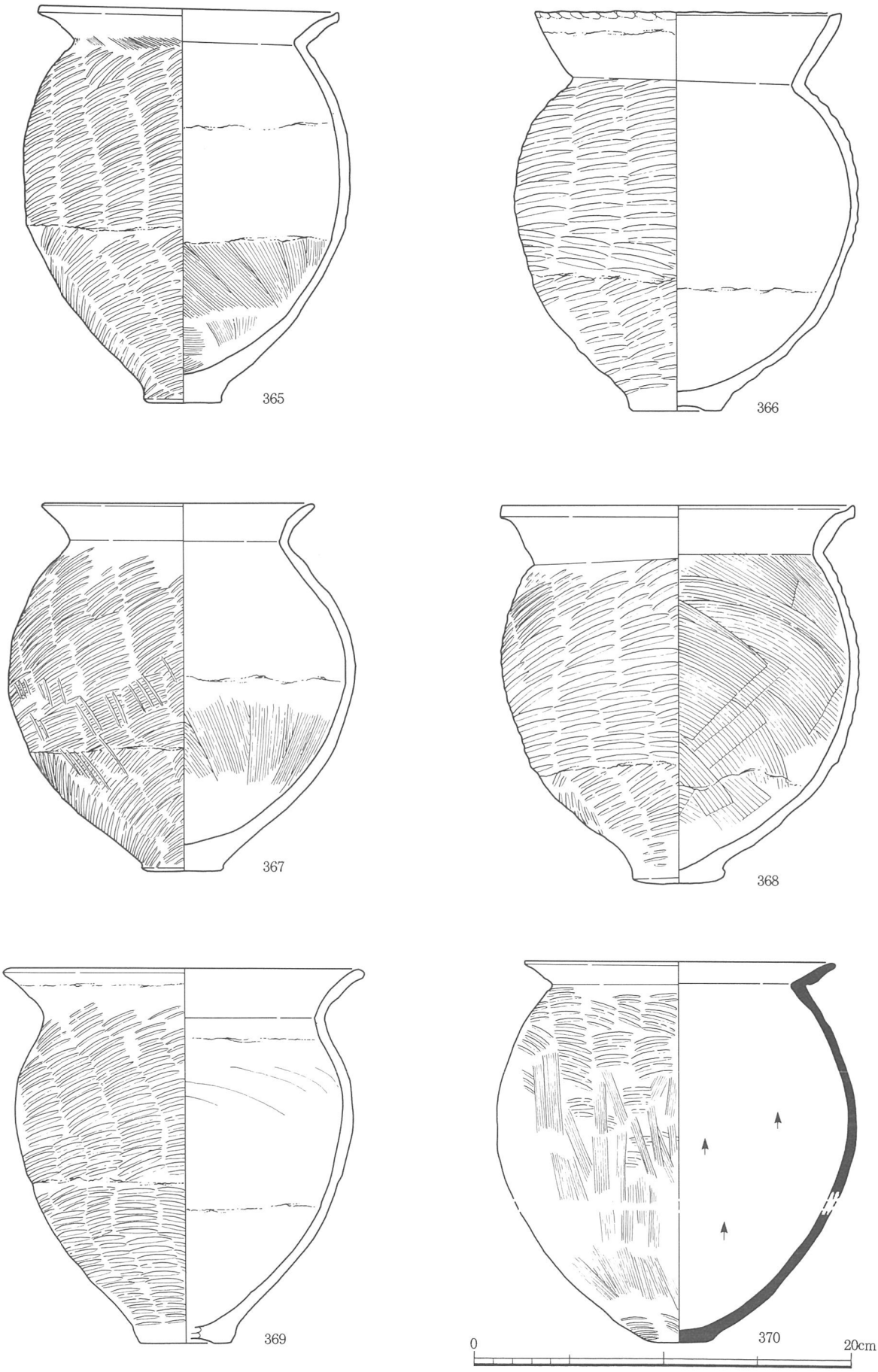


Fig. 72　ＳＤ1305出土遺物実測図(13)

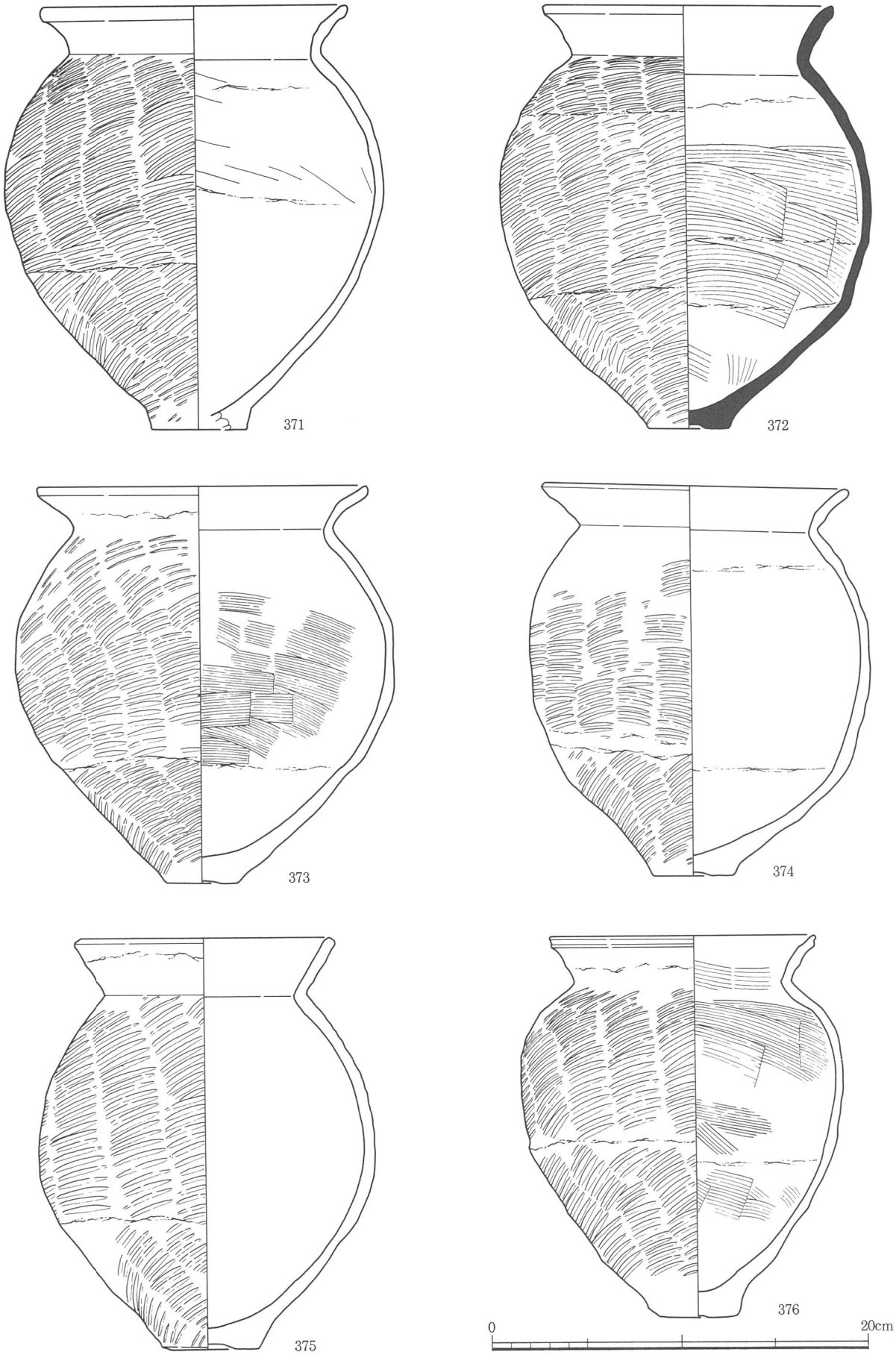


Fig. 73　ＳＤ1305出土遺物実測図(14)

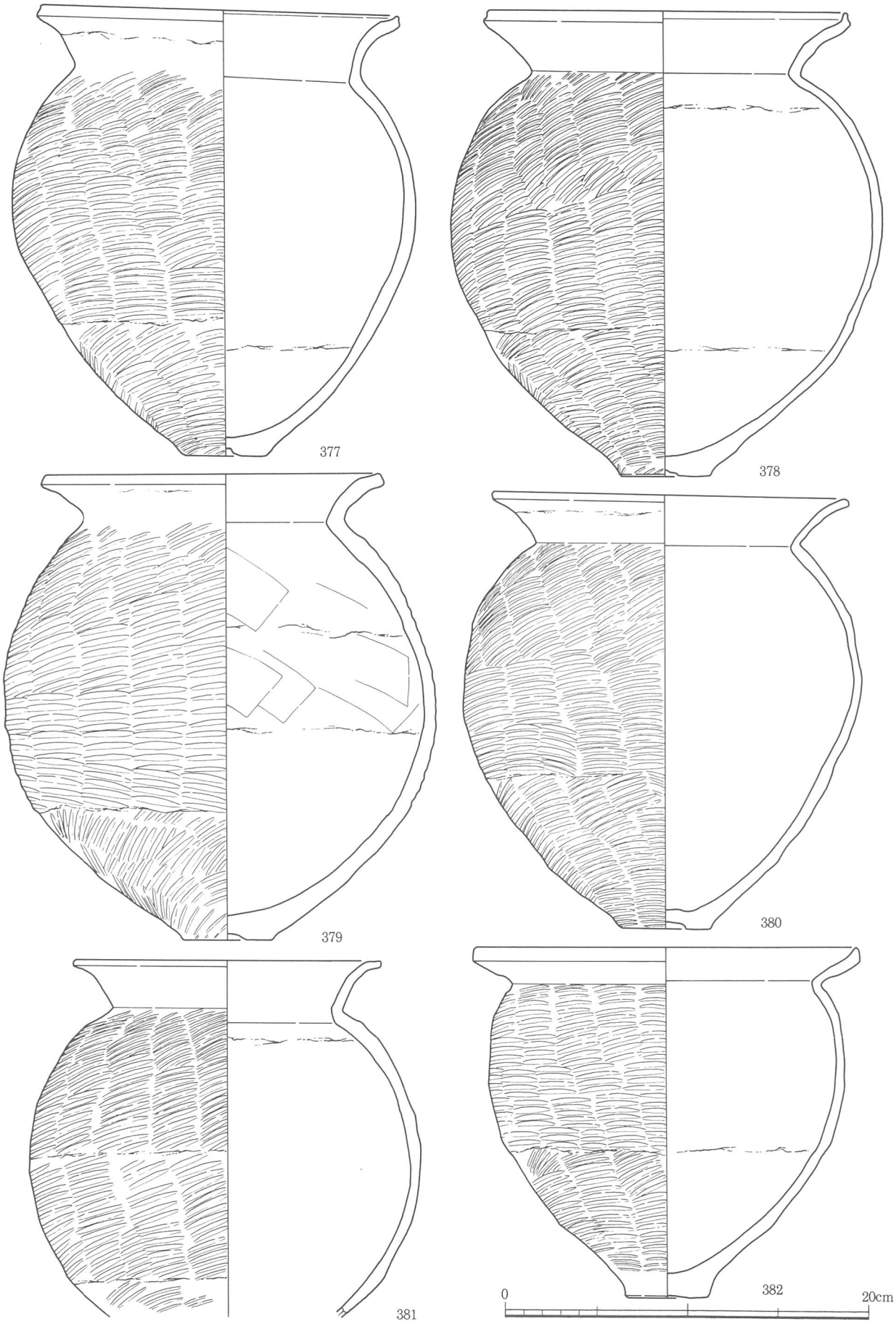


Fig. 74　ＳＤ1305出土遺物実測図(15)

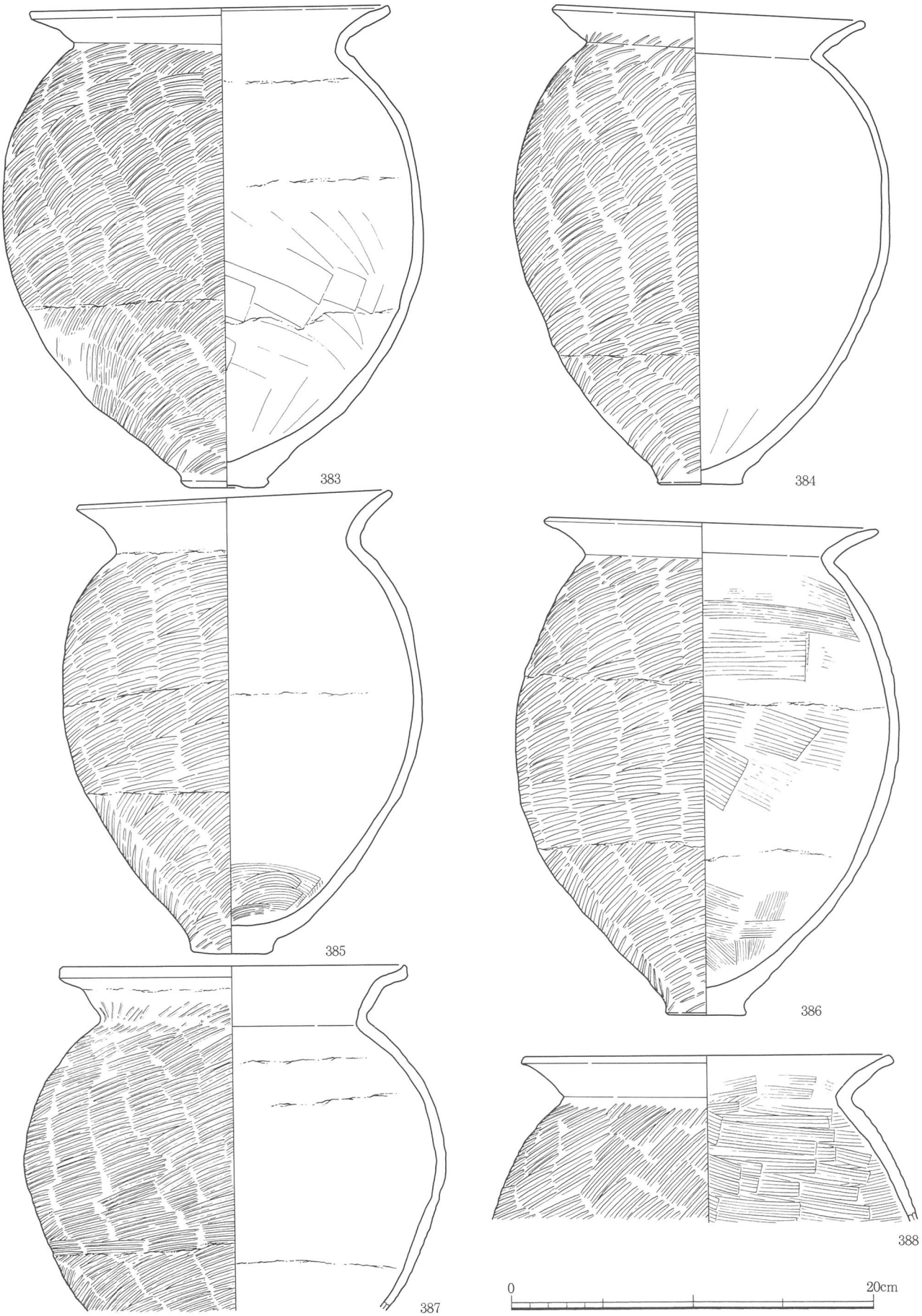
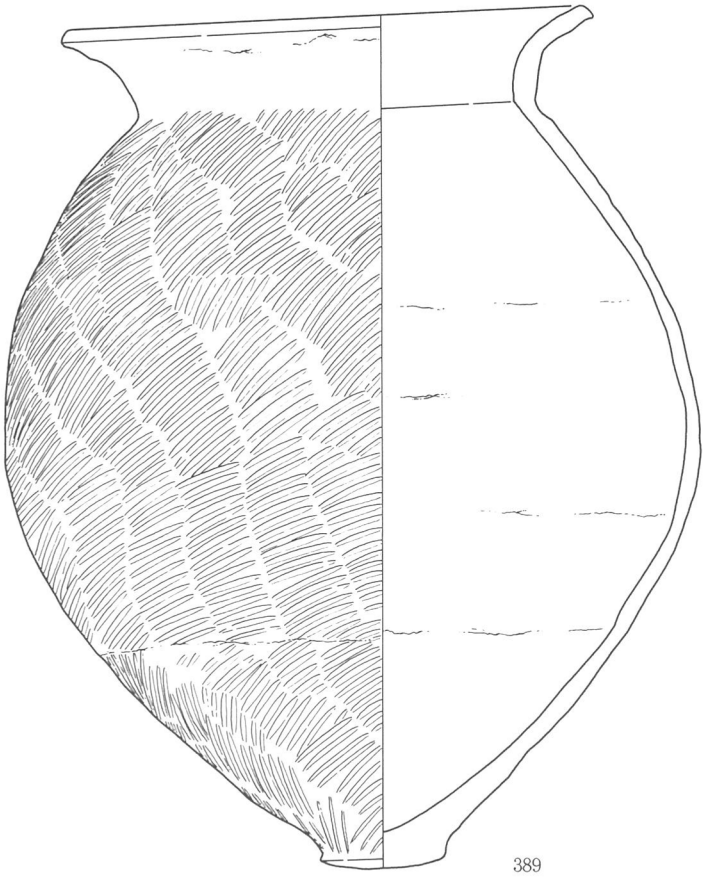
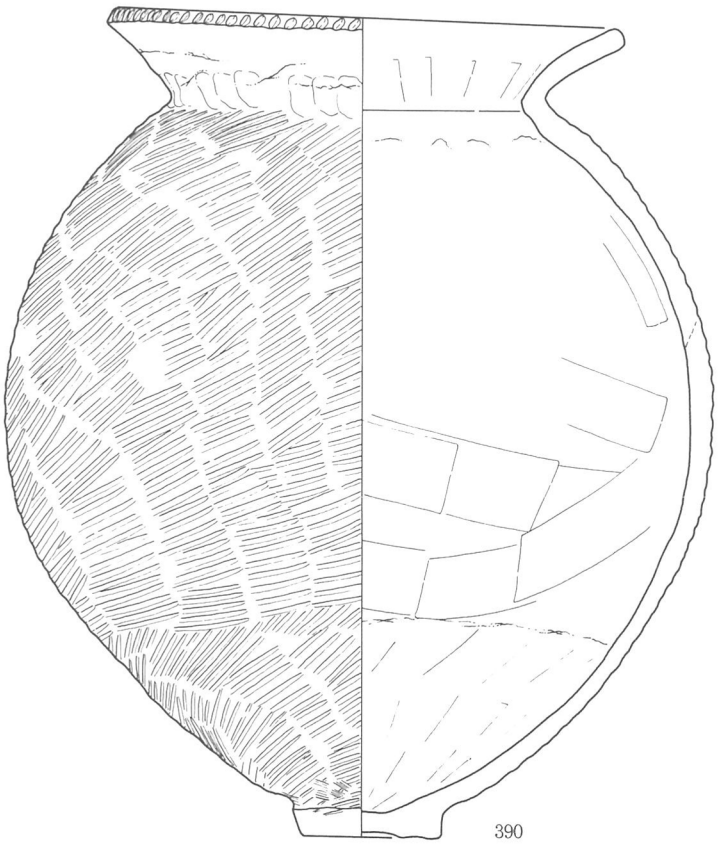


Fig. 75　ＳＤ1305出土遺物実測図(16)





0　20cm

Fig. 76　ＳＤ1305出土遺物実測図(17)

Fig. 77　ＳＤ1305出土遺物実測図（18）

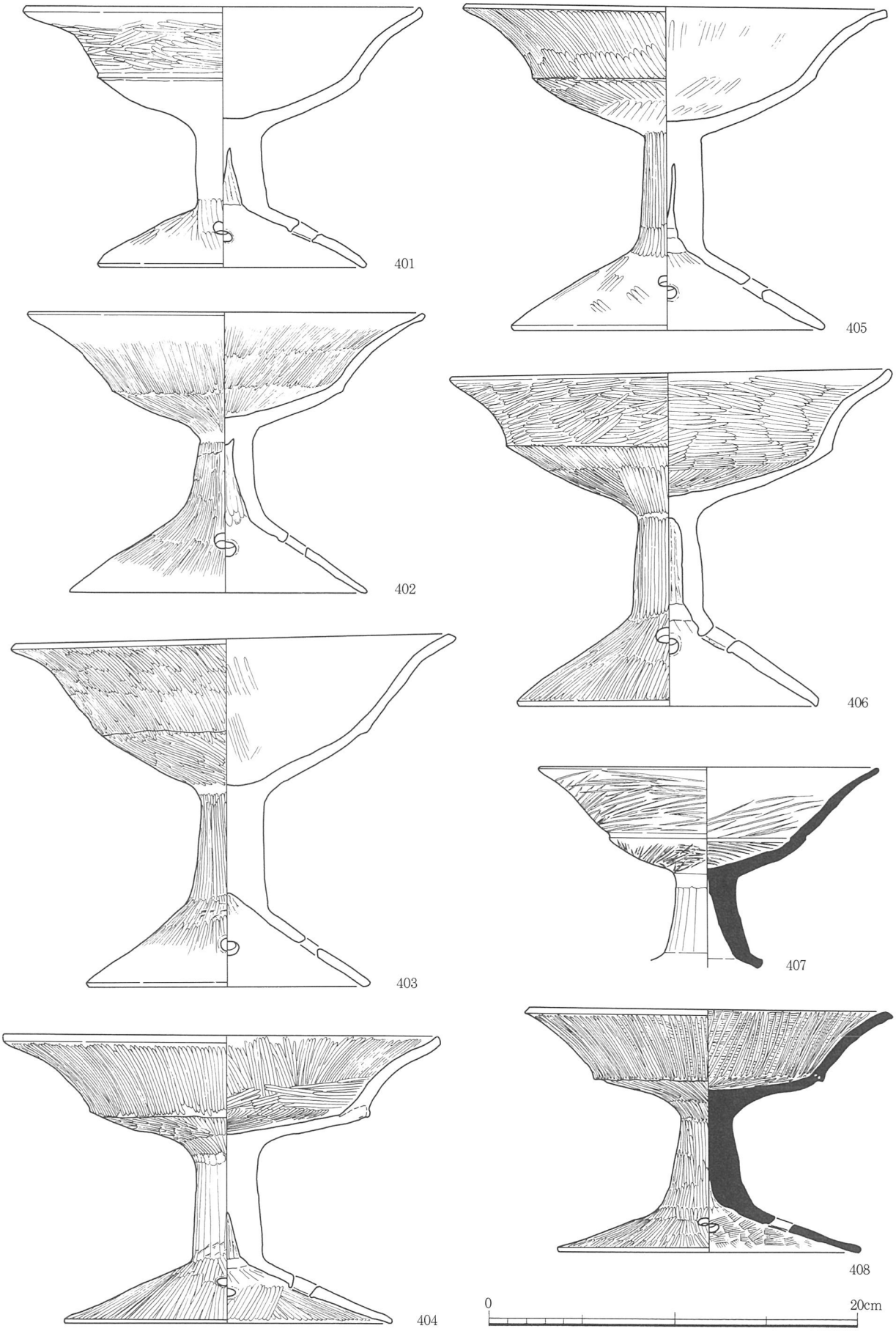


Fig. 78　ＳＤ1305出土遺物実測図(19)

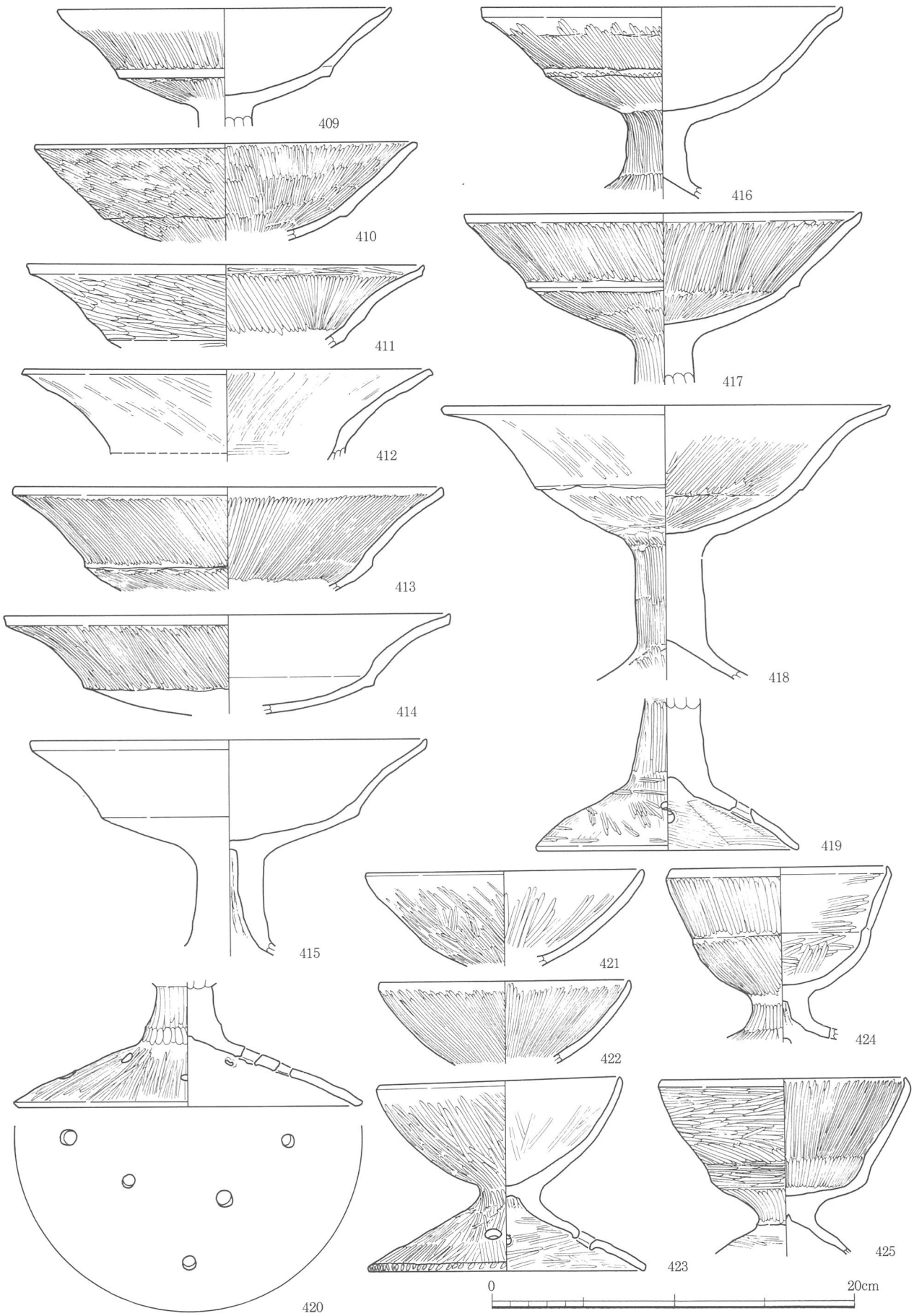


Fig. 79　ＳＤ1305出土遺物実測図（20）

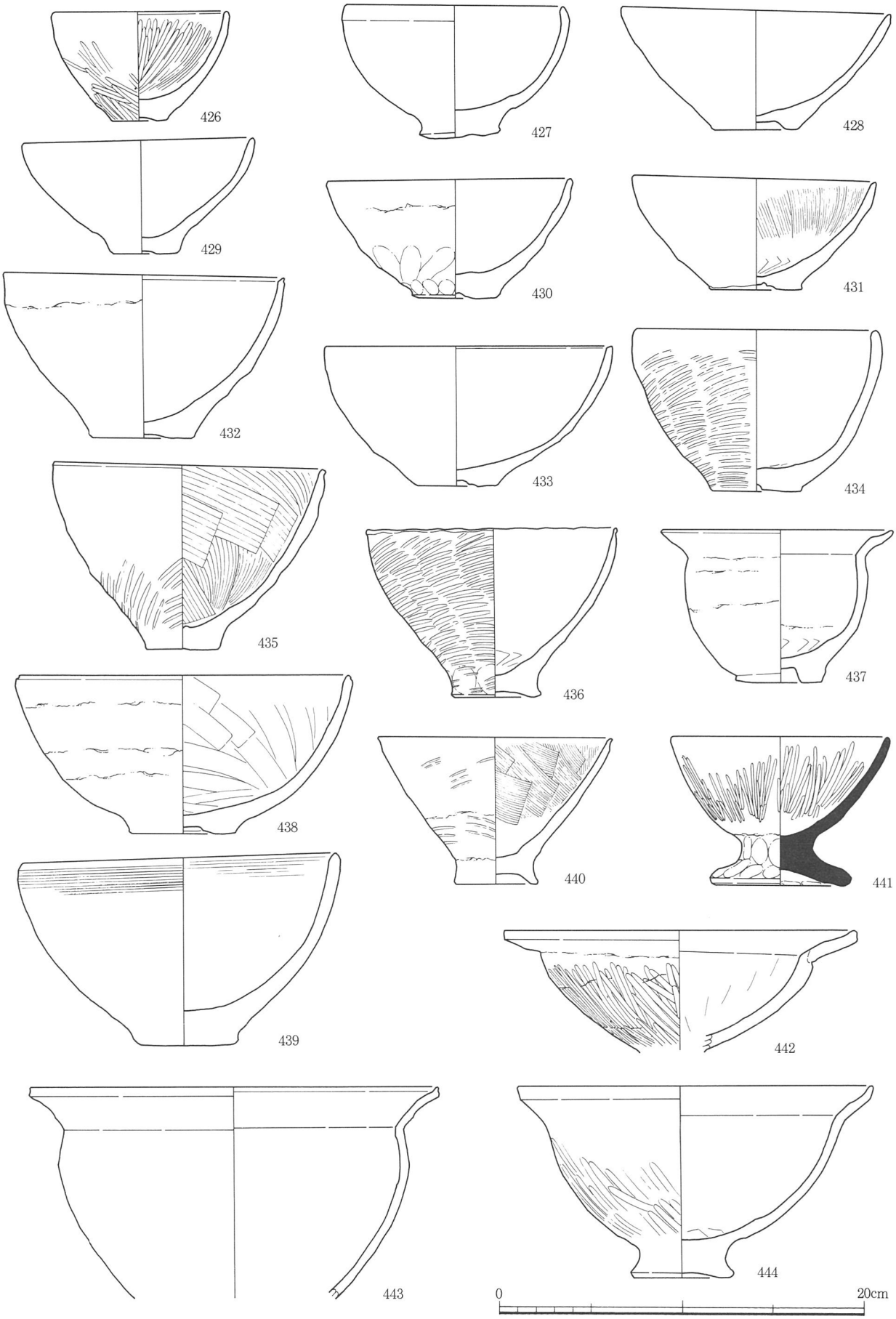


Fig. 80　ＳＤ1305出土遺物実測図(21)

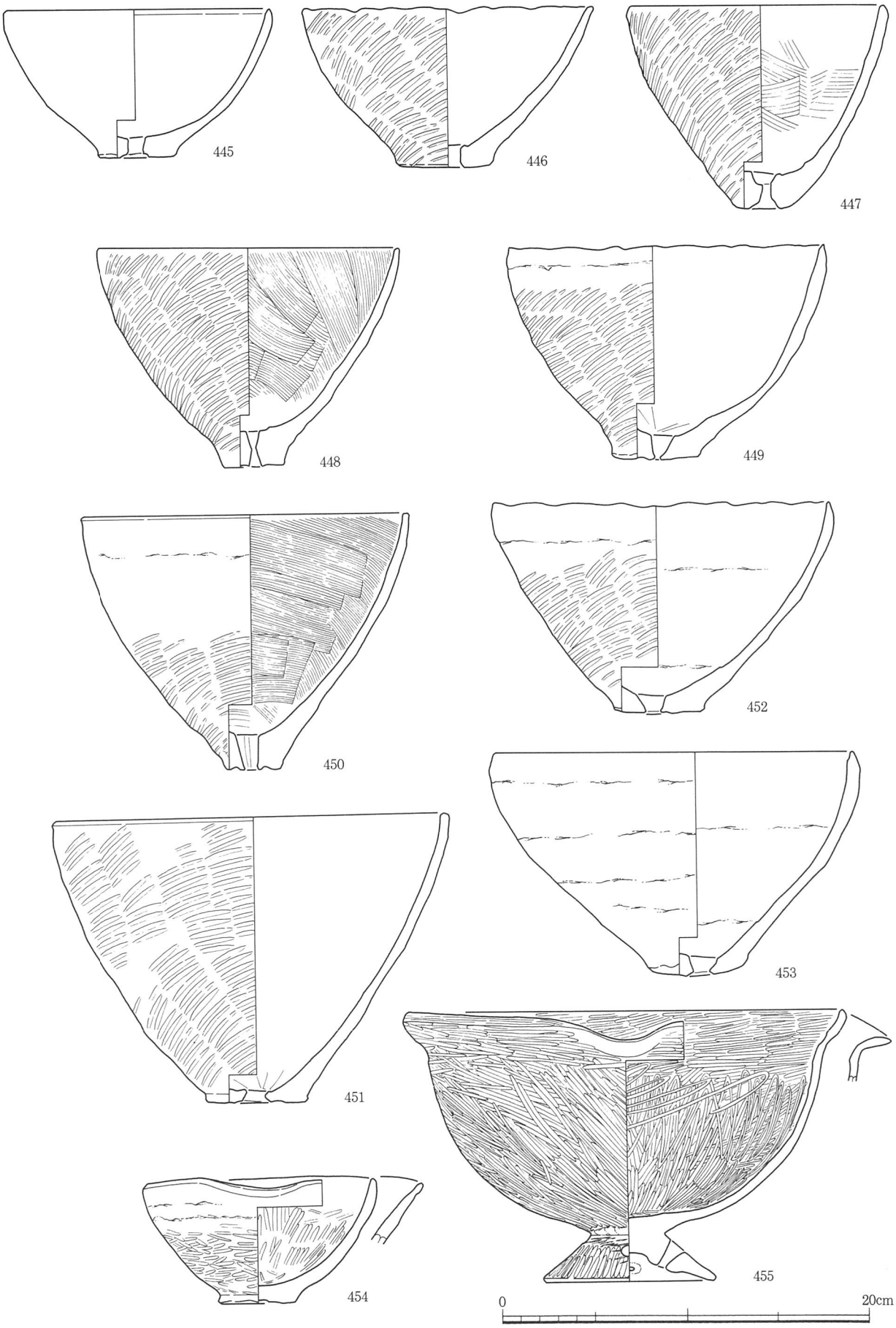


Fig. 81　ＳＤ1305出土遺物実測図（22）

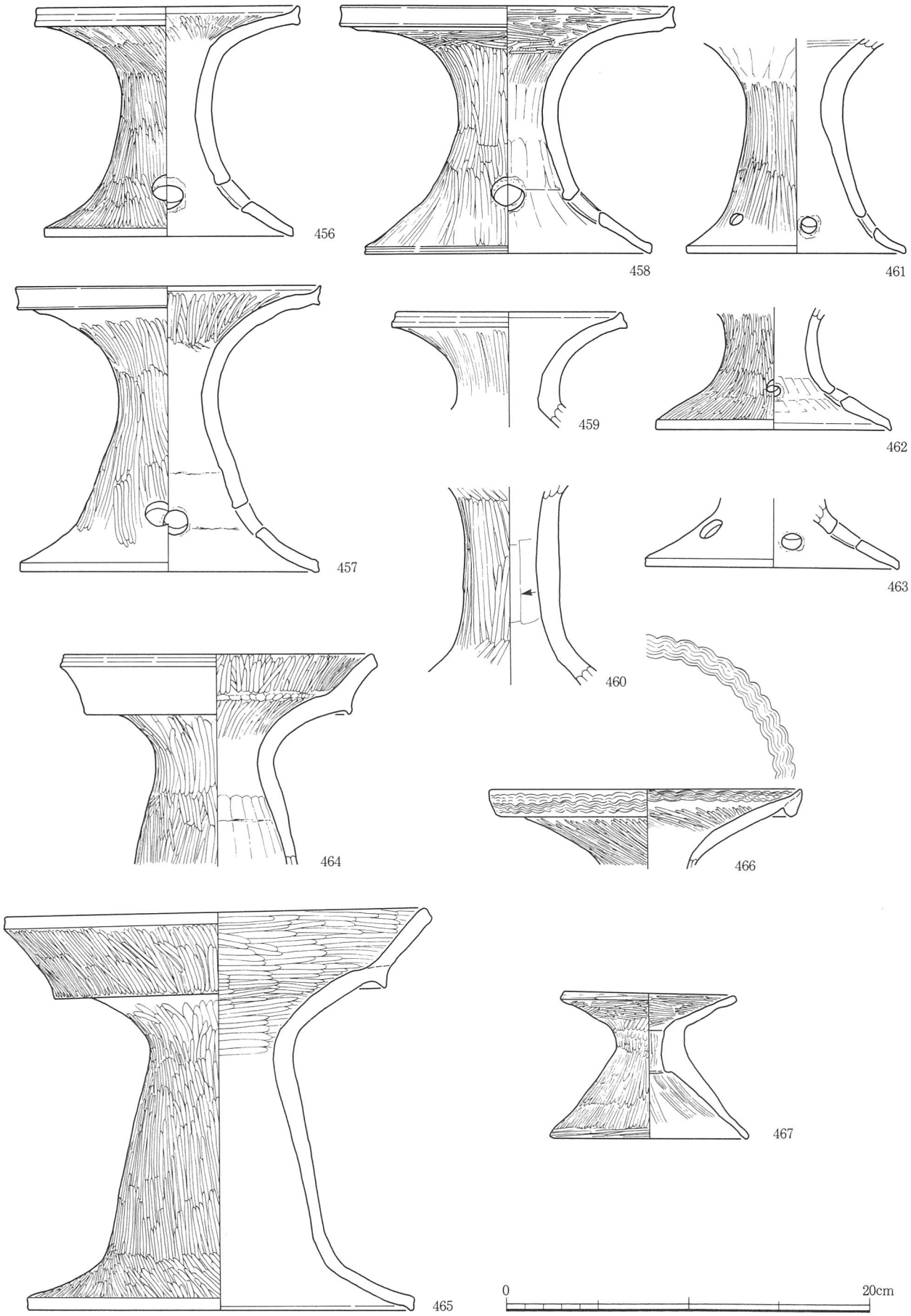


Fig. 82　ＳＤ1305出土遺物実測図(23)

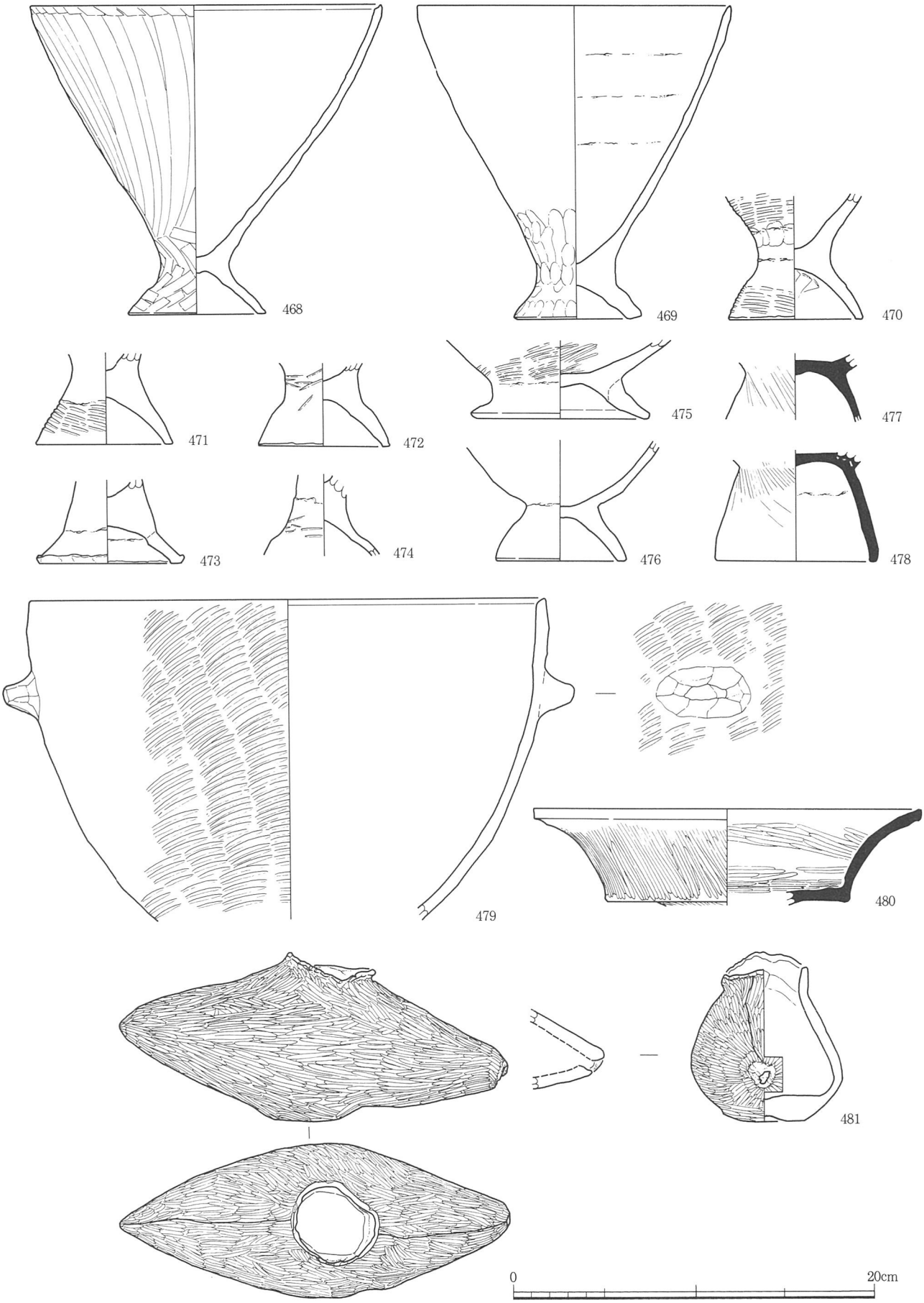


Fig. 83　ＳＤ1305出土遺物実測図（24）

を備える。２点。419は高杯脚部で，中実の脚柱部に内湾した脚裾を備える。420は中実の短い脚柱部と，大きく広がりをみせる脚裾をもつ高杯脚部で，４方透孔を２段に設けている。

鉢は34点出土した。426～435・438・439のように底部Ａ・Ｂ形態の小形鉢Ａが主体である。15点。口縁の内湾が緩い428・429や，内湾が強く半球状を呈する438などが認められる。また相対的に小形の426～431，やや大きい432～435・438・439がある。調整はナデをはじめとした平滑技法を主としているが，他にタタキ痕をもつ434・435，ミガキＡで仕上げた426がある。437は超小形の弥生形甕Ａeよりさらに小さく，ナデ仕上げされた甕類似形態の小形鉢Ｄである。１点。436・440は口縁が直線的あるいは弱く内湾して開く底部Ｃ形態の小形鉢Ｂである。２点。442～444は半球状の体部に緩やかに屈曲した口縁を付加した小形鉢Ｃである。３点。441は生駒西麓産の胎土をもち，在地にみられない形態のため，外来系土器Ｉ類に含める。445～453は有孔鉢である。９点。半球状の体部をもつ有孔鉢Ａ445・446・449・452・453，やや立ち上がりの強い体部をもつ有孔鉢Ｂ447・448・450・451がある。体部の調整は445・453がナデ，他の個体はタタキ成形痕を残す。454・455は片口をもつ鉢である。454は小形鉢Ａを基本形とし，半球状の体部をもつ。１点。455は台付の中形鉢で，半球状の体部に内湾気味に広がる口縁を付加する。他に口縁部の破片が１点あり，計２点が出土している。内外面に密なミガキＡを認める。

器台は大形器台11点と小形器台１点，合計12点が出土した。大形器台にはＡ・Ｃ・Ｄの３形態が認められる。大形器台Ａは口縁を残す456～459の４点，461の体部１点，及び461～463の脚部３点がこれに含まれると思われ，合計８点を数える。456～458から共通する特徴を抽出すると，口縁部は大きく外反し，端部は上方に拡張されて幅の広い端面を作る。胴部から上方，口縁部寄りは大きく拡張されて外反するのに対し，脚部寄りの外反度は緩い。裾部付近に円孔を穿って透孔とする。466は大形器台Ｃである。口縁端部に粘土帯を付加して端面を作り，これを装飾帯として波状紋を巡らせている。１点。464・465は大形器台Ｄで，口縁部が複合口縁となった異形の器台である。大きく開く口縁に対して，脚部はあまり広がりをみせず，また透孔をもたない。２点。467は小形器台Ａで，１点が認められた。

468～474は製塩土器Ｂである。468・469は体部が内湾気味に広がり，上げ底の小さな脚台をもつ。いずれもナデで仕上げている。470は脚台，体部下半ともにタタキ痕を明瞭に残す。台付甕の可能性もある。471～474はタタキ，あるいはナデ仕上げの製塩土器脚台である。

475～480は器種不明の土器である。475・476は脚台。479は大形の鉢状を呈するタタキ成形の土器で，口縁部直下に把手を設ける。480は外来系土器Ｉ類の土器で，器台かも知れない。

481は注口土器で，紡錘形の体部の一方に穿孔を設け，円形の小さな口縁と低い底部形態Ｂをもつ。全面に緻密なミガキＡが認められる。

２-ｄ．１～３層遺物(Fig.84～86，PL.93・94)

３層以上から出土した遺物は量的にも多い。しかし取り上げ方法にも左右されるが，遺存状態が不良であったことなどから，土器溜などの土器集積を除けば層位ごとに分別した厳密な分層発掘が行えたとは言い難い状況であった。従って必然的に一括性への信頼度の低下した資料で，ある程度の時期幅を考慮する余地が多分にある。しかし４層検出土器よりは明らかに後出のものを主体とする。

482～498は３層から出土した。壷(482～485)，甕(486～491)，高杯(492～494)，小形器台(495)，蛸壺(496)，鉢(497・498)などの器種がある。

壷には広口壷482，受口状に口縁を拡張した壷Ｘ483，広口直口壷484のほか，東海系の瓢形壷485がある。485は口縁部直下，頸部直上，肩部にハケ原体類似工具木口を水平に押捺し装飾としている。甕は

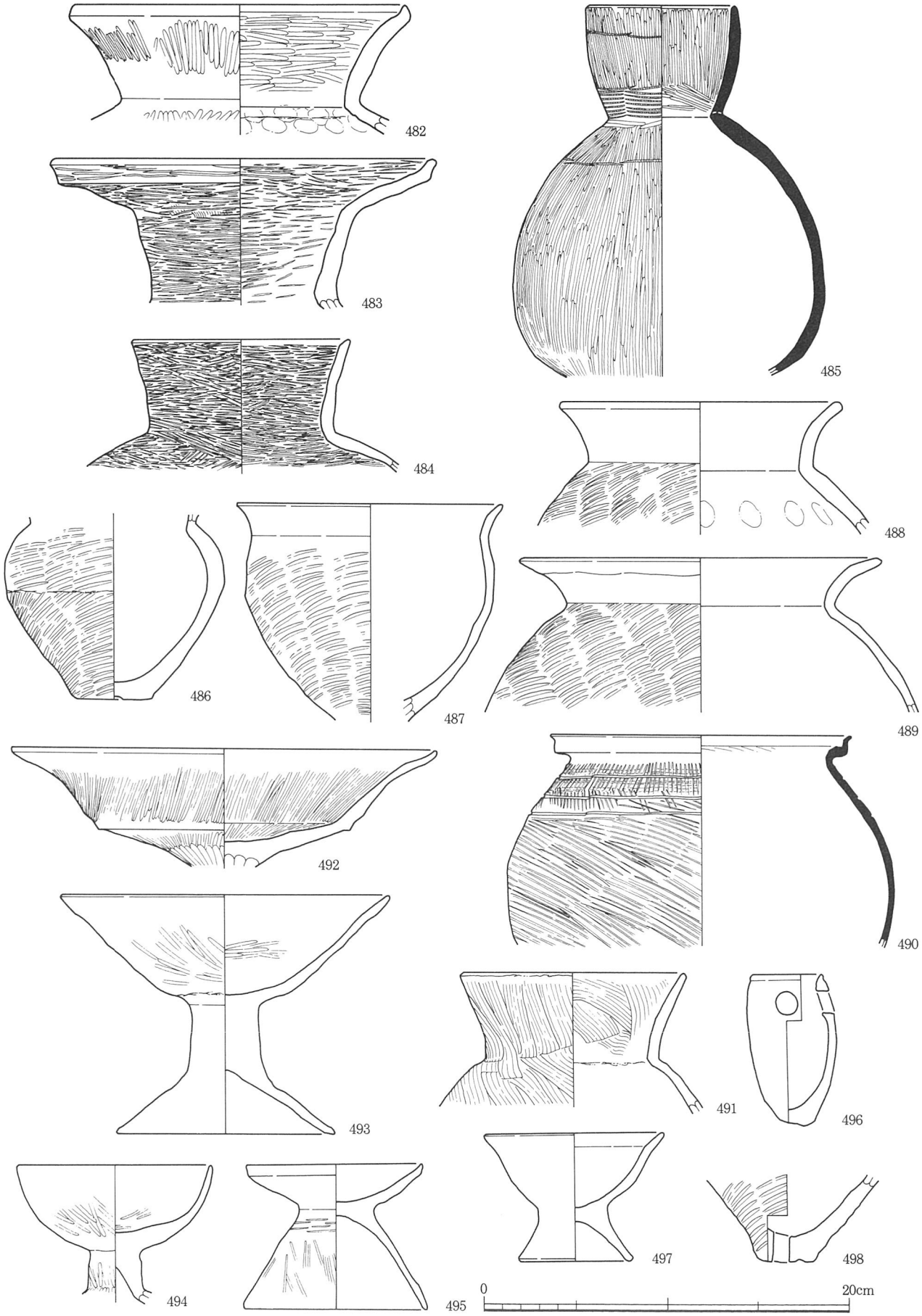


Fig. 84　ＳＤ1305出土遺物実測図(25)

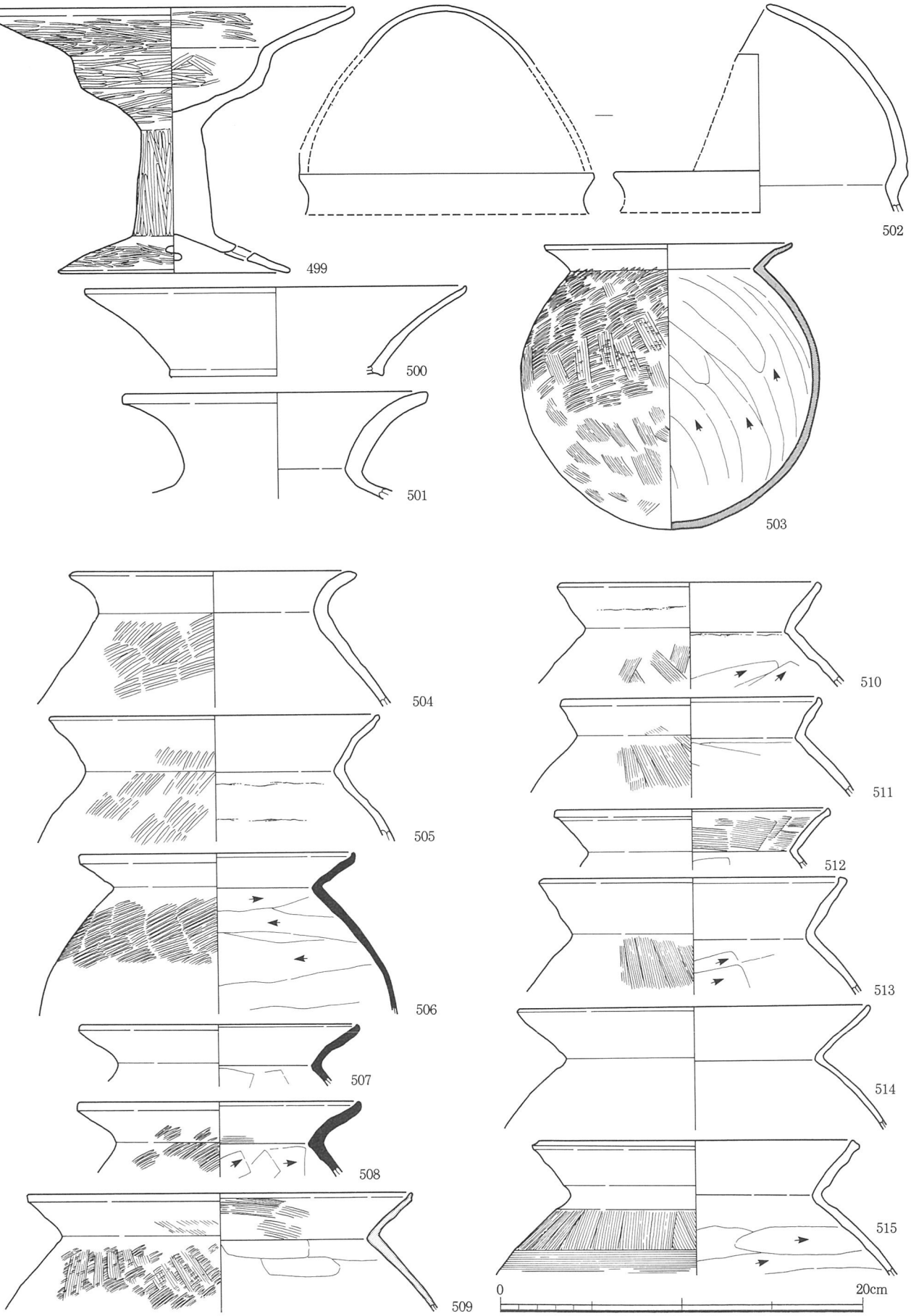


Fig. 85　ＳＤ1305出土遺物実測図（26）

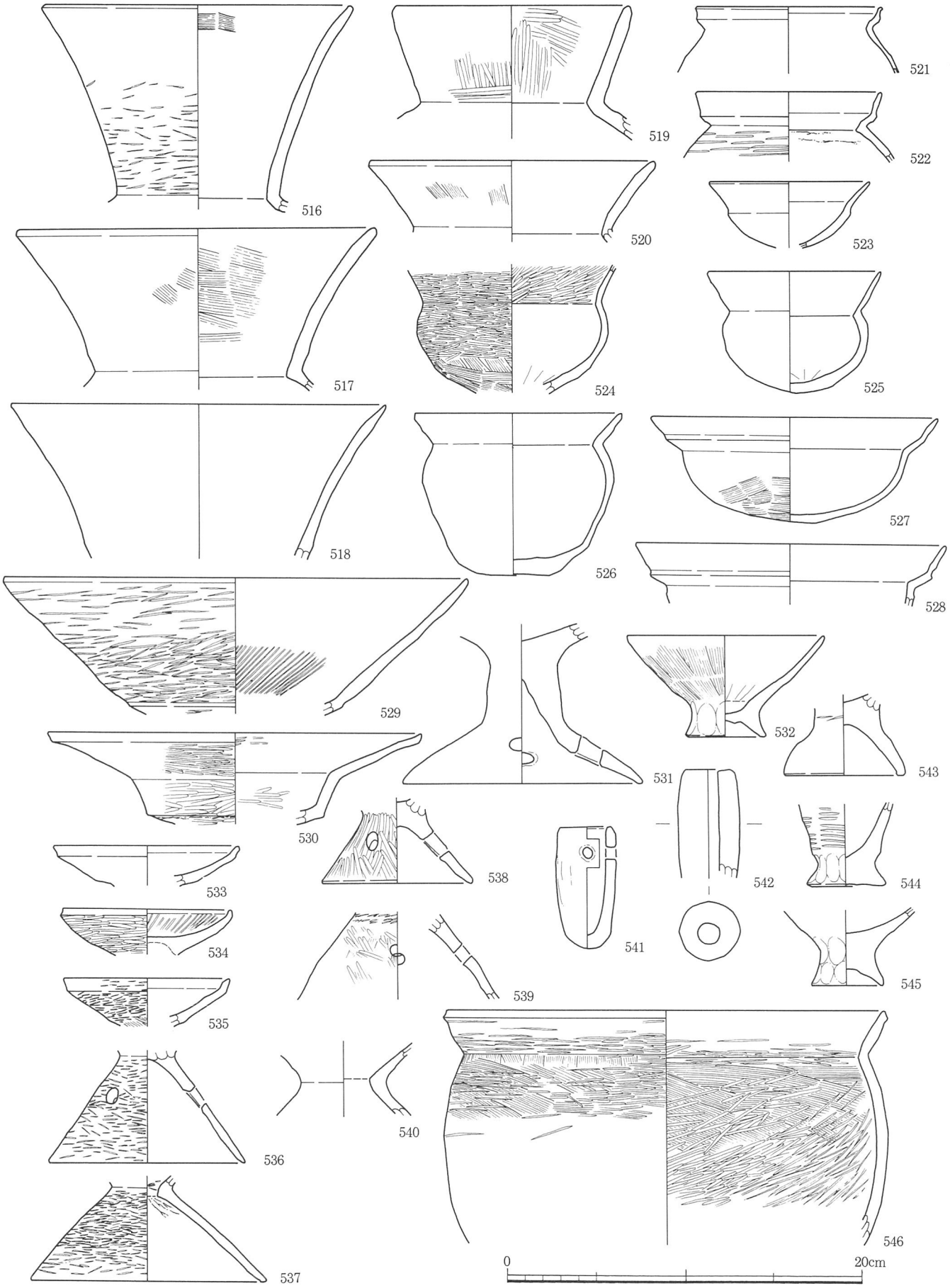


Fig. 86　ＳＤ1305出土遺物実測図（27）

486～489が弥生形甕Ａ，490が近江系の受口状口縁甕，491がハケを多用した甕Ｘである。490は体部を粗い斜方向ハケで調整し，肩部に３条の沈線を巡らせる。外来系土器Ｉ類。492・493は有稜高杯Ａであるが，口縁の形態的特徴がそれぞれ異なる。椀形高杯Ｂの494は脚柱部が短い。495は小形器台Ｂ，496は砲弾状の蛸壷Ｃである。鉢には台付の小形鉢Ｘ497，有孔鉢498が認められる。

２層出土遺物として499～503を掲げる。高杯(499・500)，壷(501)，手焙(502)，甕(503)などがある。499はミガキＡを横方向に用いた有段高杯，500は口縁がやや外反する有稜高杯である。501は口縁が大きく広がる広口壷である。502は手焙の覆部を残す破片から図化している。磨耗により表面の調整は不明。503は庄内式甕Ｂである。

504～546は１層から出土した。甕は504・505が弥生形甕Ａ，506～508が庄内式甕Ａ，509が庄内式甕Ｂ，510～514が布留式祖形甕，515が布留式甕である。516～522は壷で，直口壷516～518，複合口縁壷Ｘ521・522などがある。鉢には小形で丸底の鉢523，小形鉢Ｂ532がある。小形丸底土器の524・525は口縁が発達していない。526は粗製の小形甕であろう。527・528は有段口縁鉢である。529は有稜高杯Ｃ，530は有段高杯，531は高杯脚部である。533～536・538・539は小形器台Ｂ，537・540は小形器台Ｃである。その他，蛸壷541，土錘542，製塩土器543～545，大形鉢546などが検出された。

ＳＷ1159

１．遺構(Fig.87・88，PL.８)

Ａ－１区，Ｃ11ＨＷ付近のＳＤ1305堆積土中から検出された土器溜である。４層中で検出されており，２～３層検出の他の土器溜ＳＷ1360～1366より層位的に下層に位置する。土器検出面の標高は6.2m前後で，各土器ともほぼ安定して面的に出土している。大溝の方向に沿うように南北に長く土器が分布し，その範囲は南北3.8m，東西0.4mであった。土器は大きく３群に分かれて検出されている。最も南には壷562・高杯551，最も北には複合口縁壷572があり，他の個体はその中間に集積された状況を示す。複合口縁壷572は体部の上半と下半が分離しており，原位置から若干の移動を伴う可能性がある。甕の個体数が多く，出土土器の器種の中で主要な位置を占めているが，その配置に特に規則性を認めることはできなかった。

２．遺物(Fig.89～91，PL.95・96)

器種には甕(547～561)，壷(562・572)，高杯(563～566)，製塩土器(567～571)が認められた。

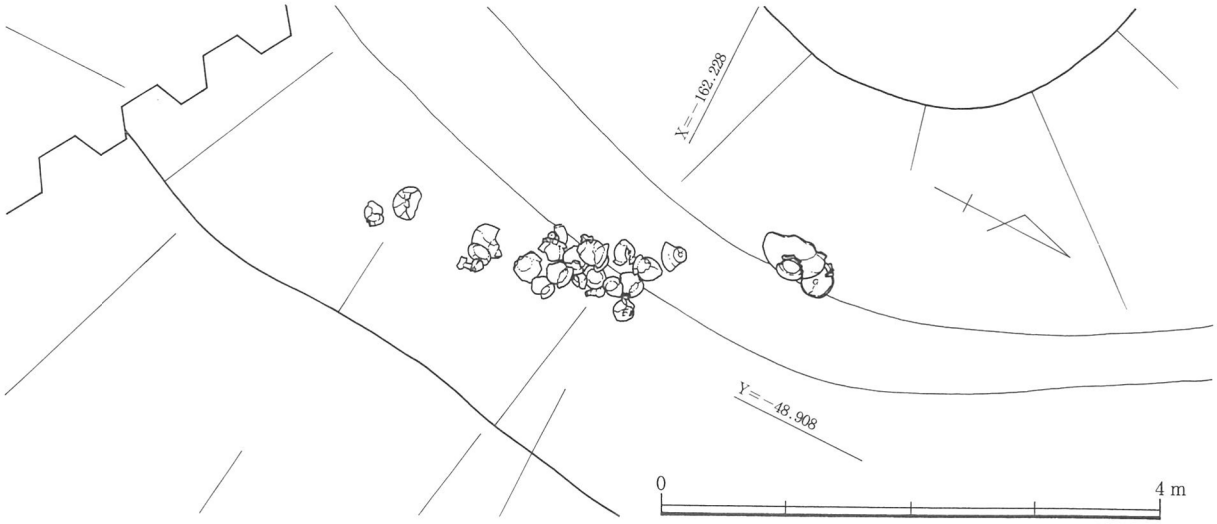


Fig.87　ＳＷ1159平面図

甕はすべて弥生形甕Ａである。遺存状態が不良で図化不能であった大形の弥生形甕１点を含めて，合計16点が出土した。いずれも右上がりを主としたタタキ成形が行われている。口縁端部の形態は，口縁ｆ・ｈが主体的である。547・548は超小形のＡe，549～553は小形のＡd，555～560は中形のＡc，561はおそらく大形のＡbに分類される。

壷562は肩部以上を失っている。体部は倒卵形を呈し，外面を全面的にミガキＡで仕上げる。複合口縁壷Ｘの572は平底と思われる底部を欠く他は完存している。玉葱形の扁平な体部を有し，頸部は肩部から広口壷口縁状に大きく広がり，さらにやや内湾気味に広がる口縁を付加している。頸部に突帯を貼付けて刻目を巡らせるが，全体的に鈍重な作りで装飾性に乏しい。

563は比較的短い脚部をもつ有稜高杯Ａである。脚柱部は半中実となっており，脚部566はやや長めの脚柱部をもつが，ほぼ同形態である。この他，脚部565はほぼ中実，566は中空部分が多い。いずれも脚柱部，脚裾部が明瞭に区別される。

製塩土器はいずれもＢで脚台のみが出土した。タタキ痕を残す567～570，ナデによる571がある。

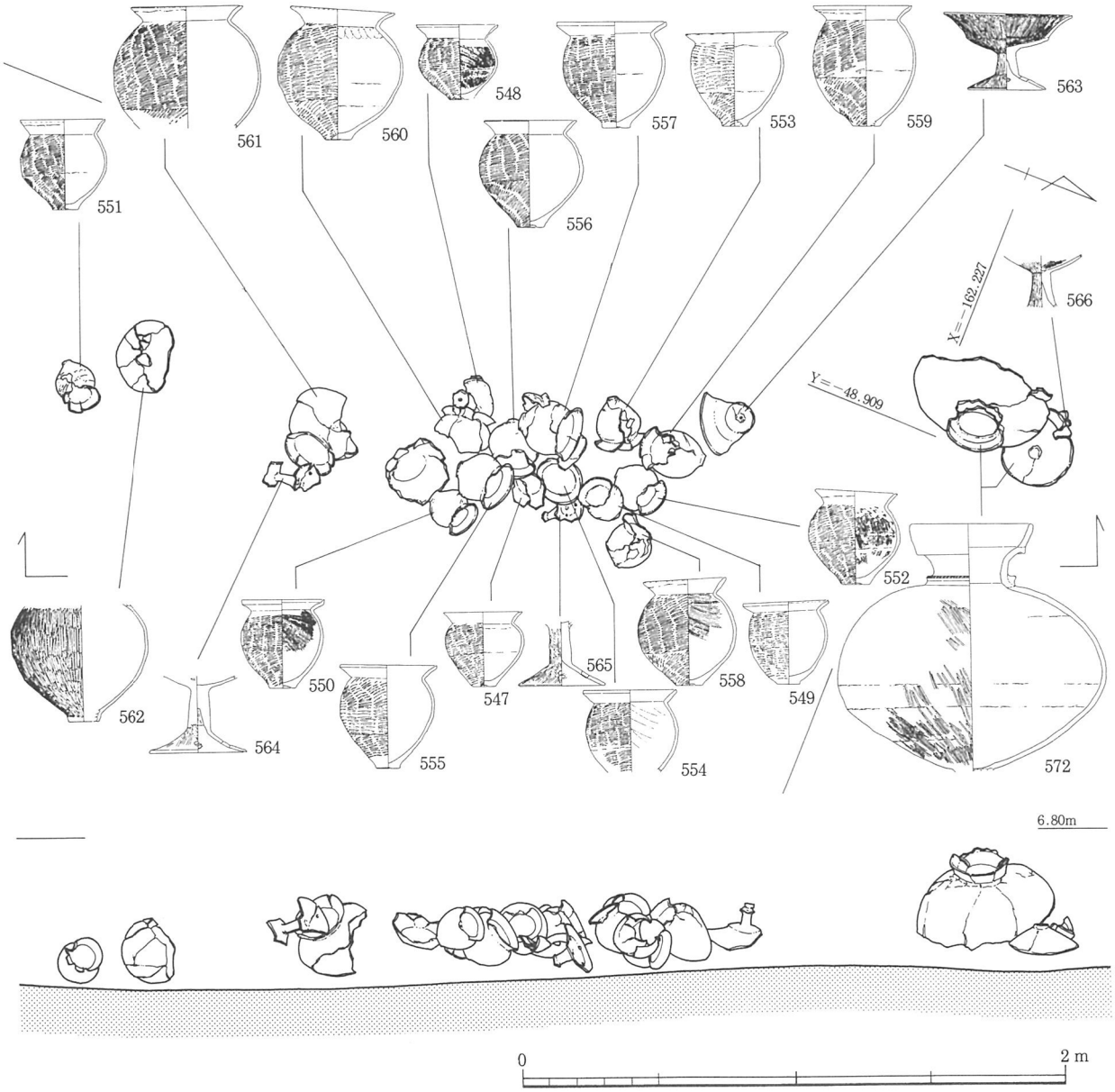


Fig. 88　ＳＷ1159遺物出土状況図

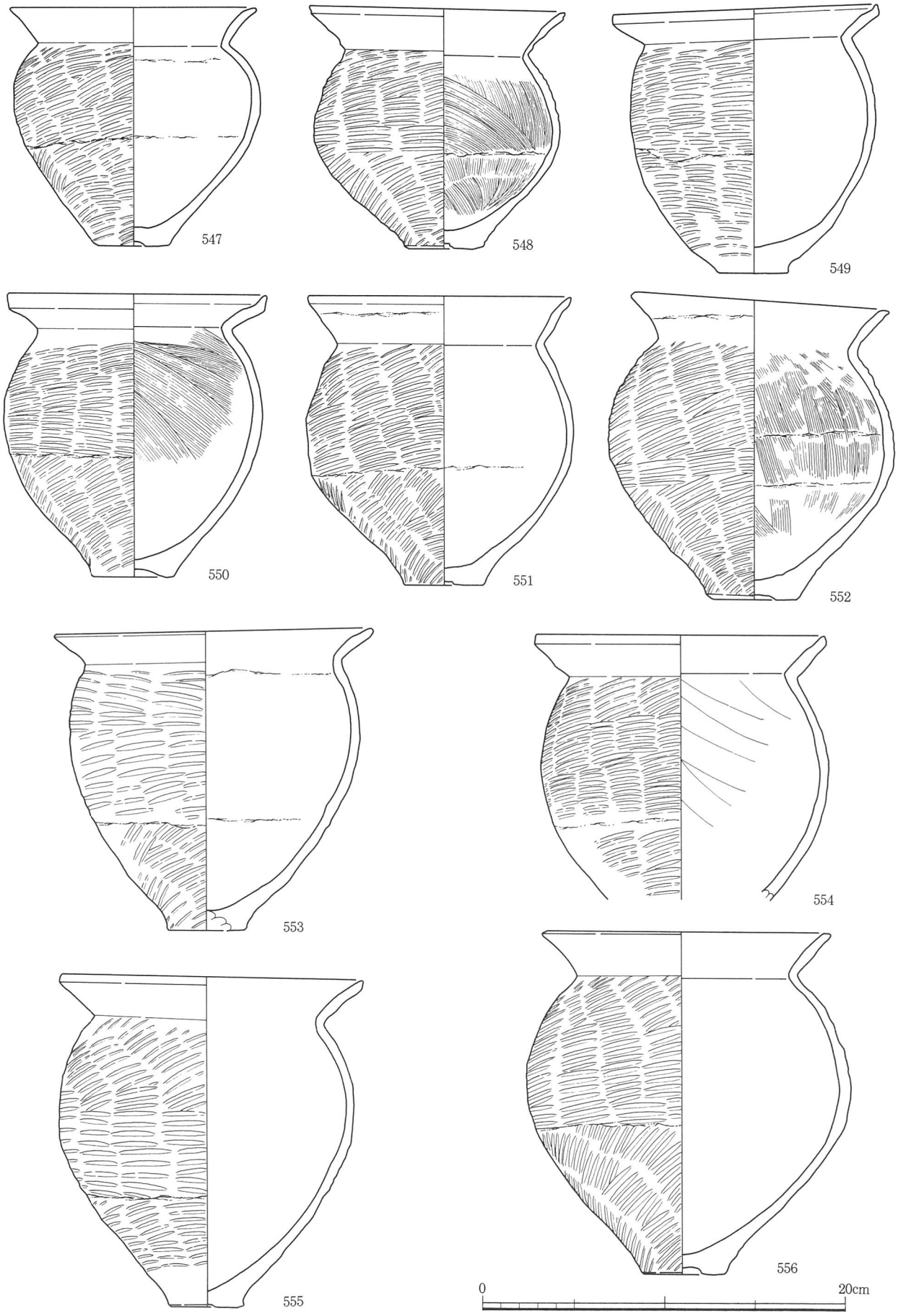


Fig. 89　ＳＷ1159出土遺物実測図（１）

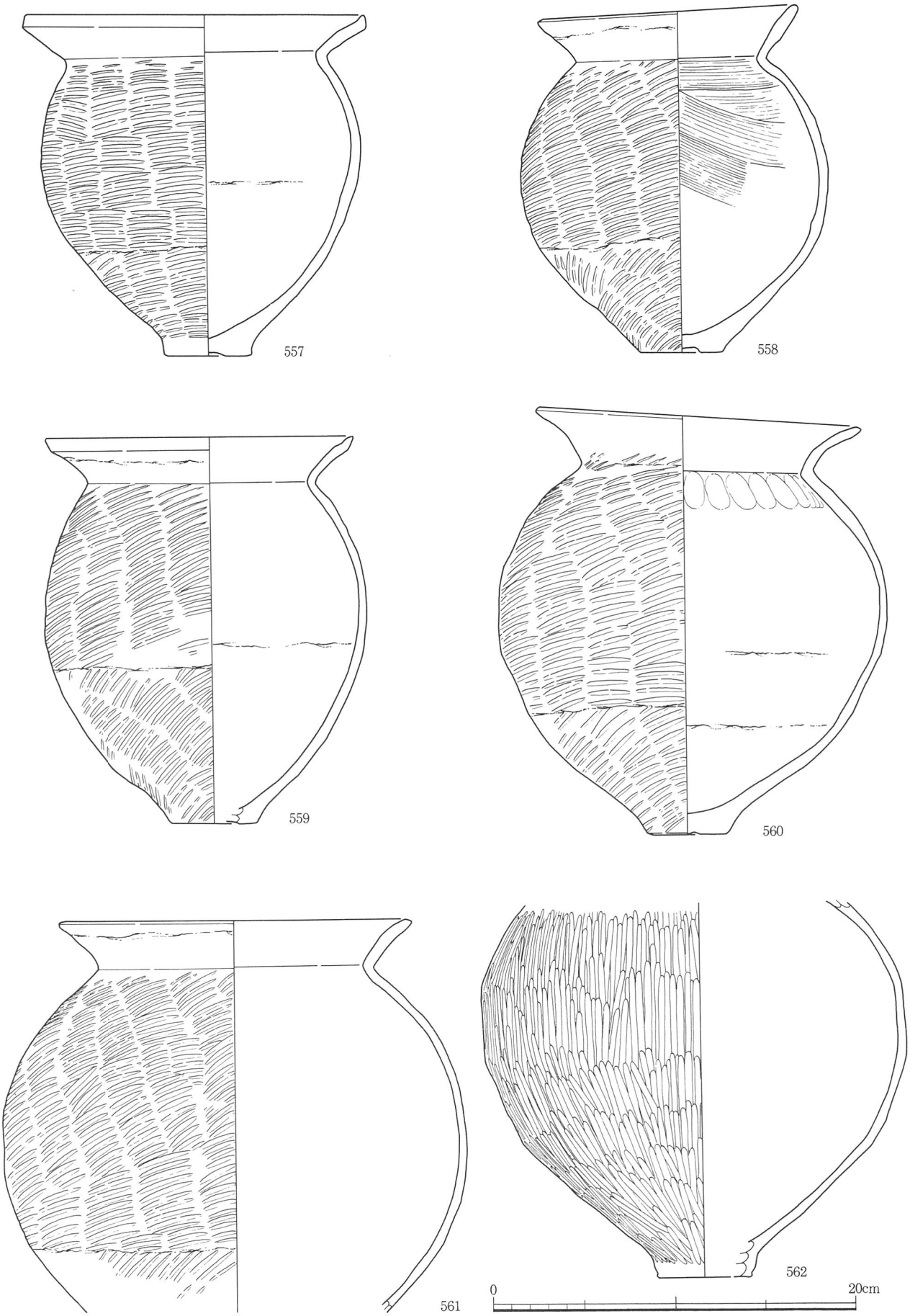


Fig. 90　ＳＷ1159出土遺物実測図（２）

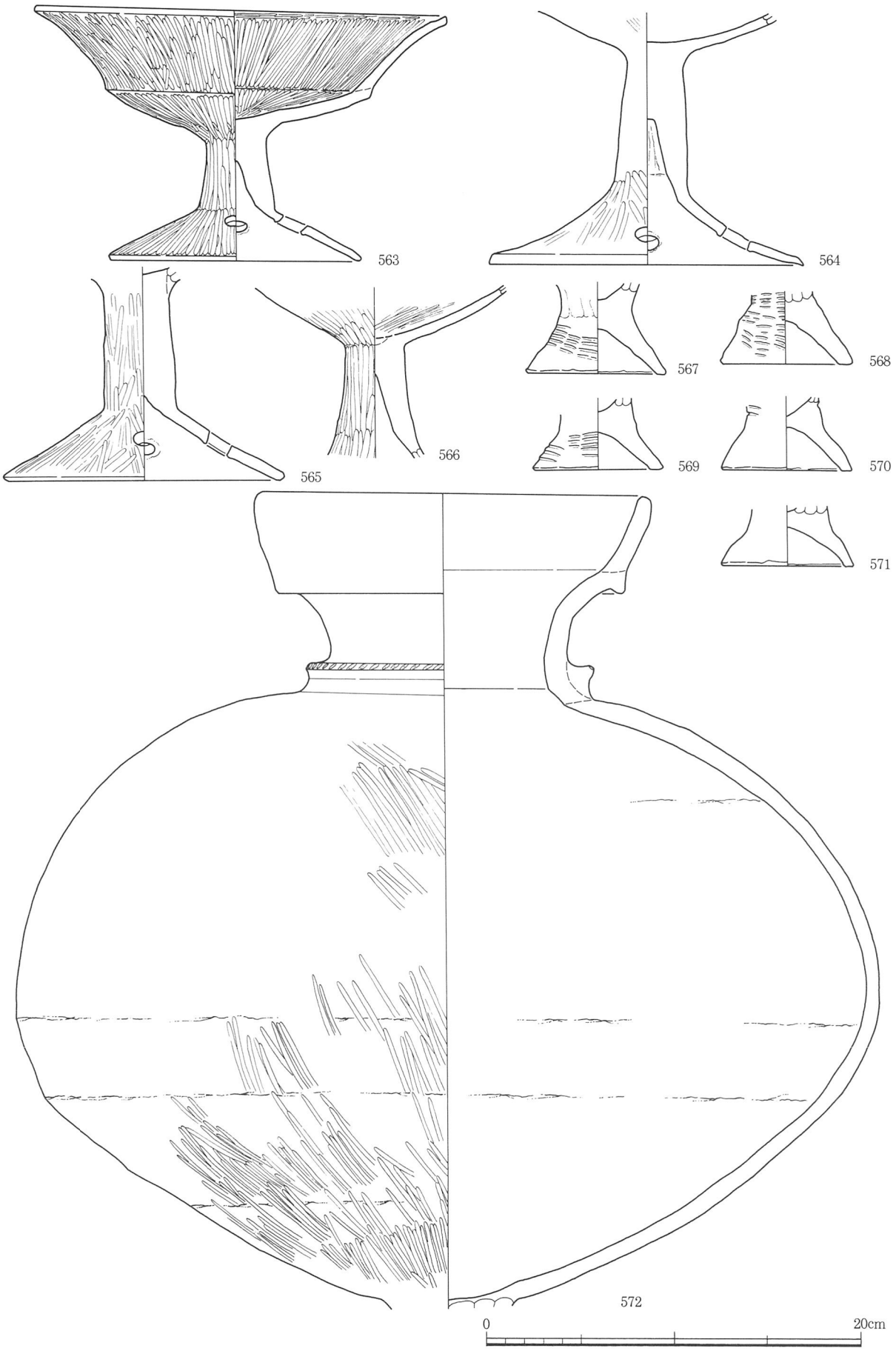


Fig. 91　ＳＷ1159出土遺物実測図（３）

Fig. 92　ＳＷ1360～1366平面図

ＳＷ1360～1366

１．遺構(Fig.92, PL.９)

ＳＤ1305の堆積層，２～３層には古式土師器を主体とする土器，土器片が多量に包含されていた。これは大溝が廃棄遺構と化し，周辺から土器の連続投棄が行われたことによる結果と思われる。調査時においては，堆積土中の土器分布密度が比較的高いため，かえって分層発掘が困難な状況に陥った。このため特に土器が密着し，あるいは連続して検出された箇所を保存して土器集積を確認し，比較的一括性の高いと思われる土器群の抽出に努めた。その結果，大溝の底，及び西側斜面から細別７群の土器溜が確認された。土器溜の認識は一括性を重視するため慎重を期し，土器の集中度の高い部分を目安として便宜的に区画しており，実際には一部が統合されることもあり得る。これらの土器群は２～３層のいずれかの層位に帰属する。以下，各土器溜ごとの土器組成をみる。

２-ａ．ＳＷ1360～1362(Fig.93)

いずれもＣ11ＥＳに位置する土器溜である。ＳＤ1305の西斜面にあり，検出標高は6.7m前後で3.9m

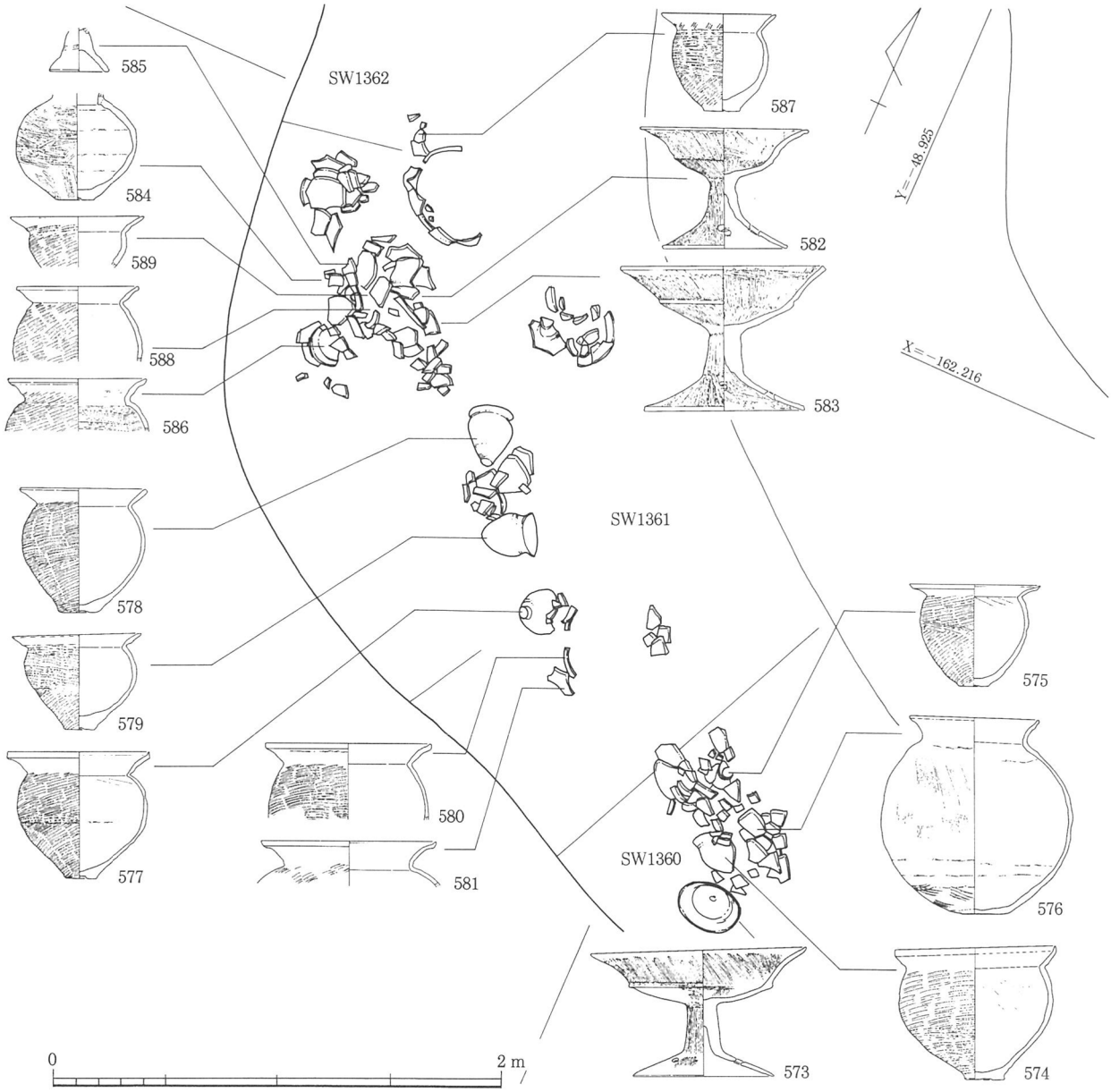


Fig.93　ＳＷ1360～1362遺物出土状況図

の範囲で帯状に分布しているが，土器が連続せず途切れる部分があるため三分した。しかし土器様相からみて同時期，あるいは近接した時期に形成された可能性が高いといえよう。

2-b．遺物(Fig.94～96，PL.97)

ＳＷ1360は高杯，甕，壷で構成される。573は有稜高杯Ａで，体部と口縁部の接合部を強調する。574・575は弥生形甕Ａで，口縁端部の拡張の強い口縁ｄ(574)，拡張の弱い口縁ｆ(575)がある。タタキ成形痕をよく残し，体部は平底をもつ扁球形，あるいは倒卵形である。576は口縁が「く」の字状に外反し，丸底に近い平底をもつ球形体部の広口壷で，タタキ成形のち縦方向ハケを加える。やや粗製。

ＳＷ1361は甕のみで構成される。いずれも弥生形甕Ａで，口縁部拡張の強い口縁ｅ(577)，拡張の弱い口縁ｆ(580・581)，丸くおさめた口縁ｈ(578・579)がある。体部の成形はすべてタタキによっており，圧縮された倒卵形を呈する。

ＳＷ1362は高杯，壷，甕，製塩土器で構成される。582・583は有稜高杯Ａである。脚柱部内面は中空に近い582，円錐形に窪む583がある。584は口縁を失っているが器種は壷と思われ，ほぼ球形の体部に突出しない平底を備えている。製塩土器Ｂ585は脚台のみが出土しており，タタキ成形痕を残している。586～589は弥生形甕Ａである。口縁端部を上方に拡張した586，外面に端面をもつ588，丸くおさめた587・589がある。いずれもタタキ成形されている。589はかなり扁平な体部となろう。

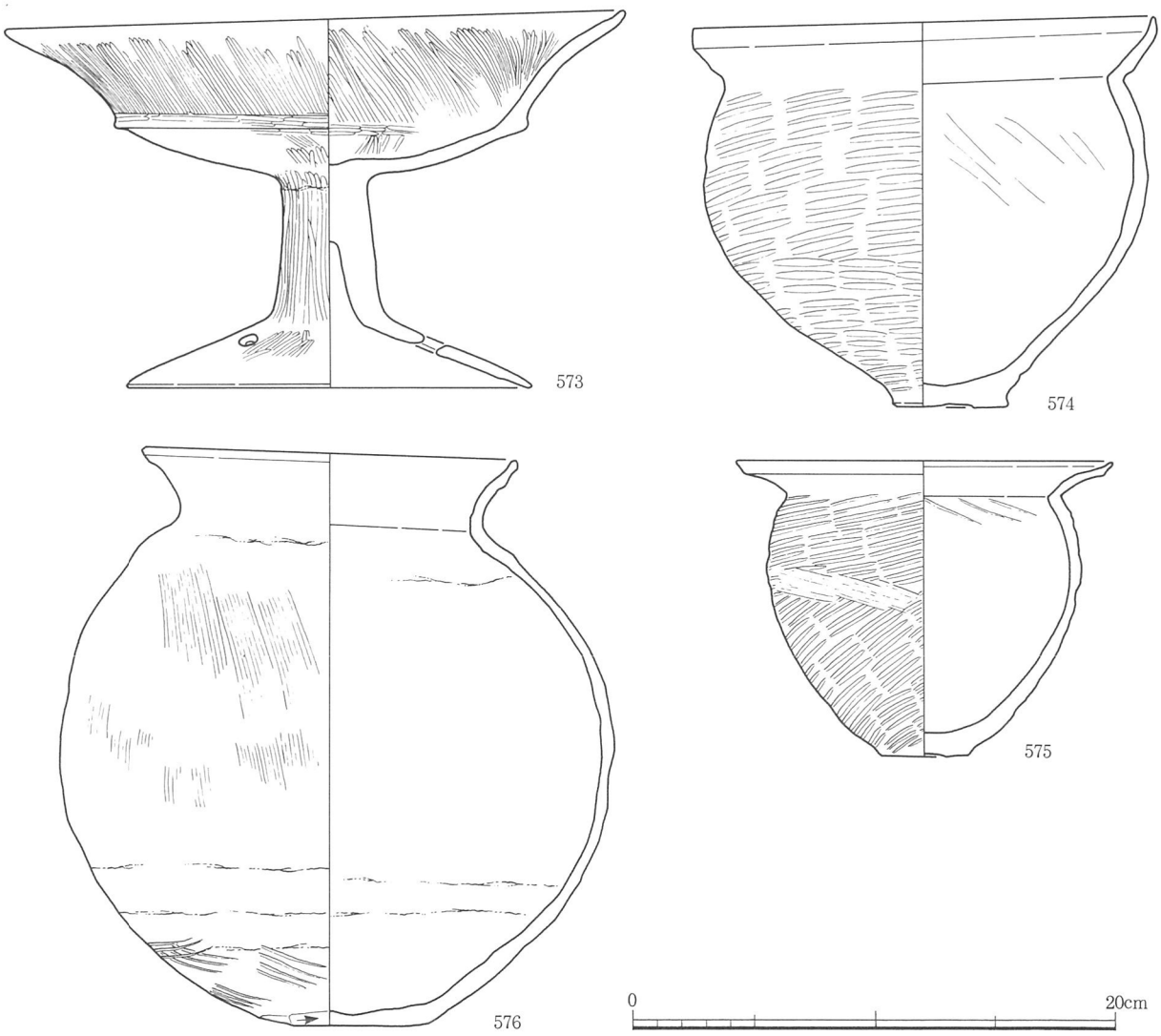


Fig.94　ＳＷ1360出土遺物実測図

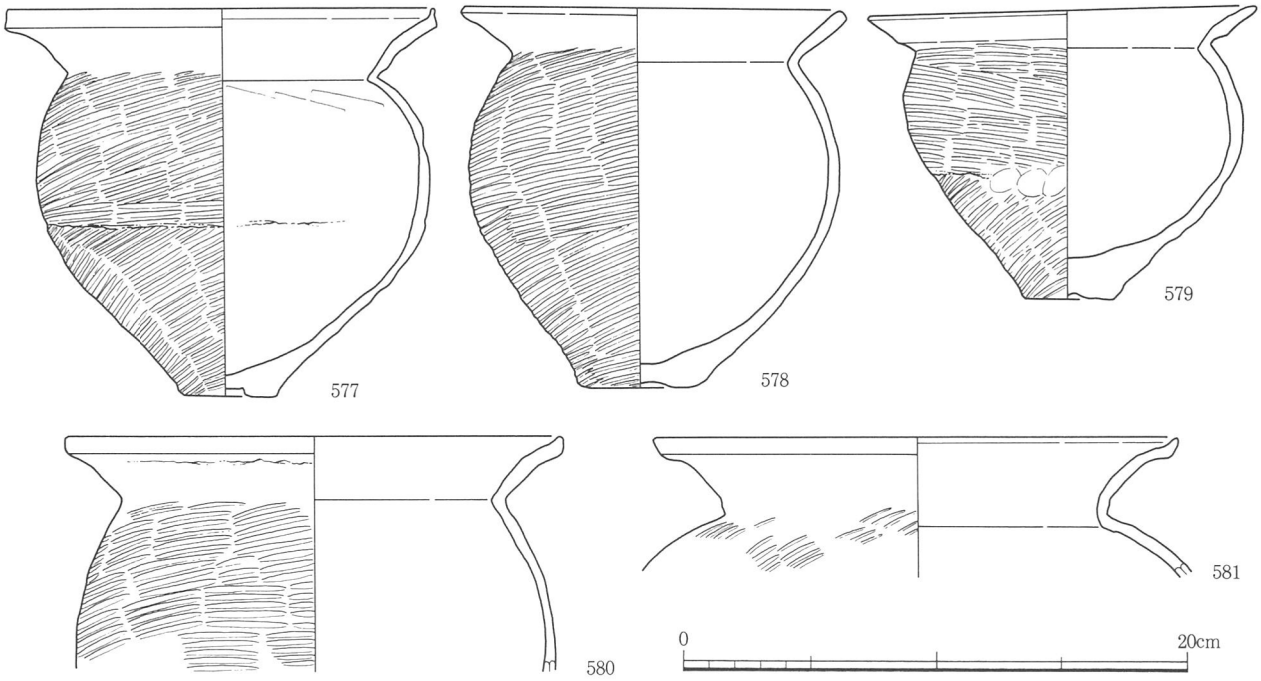


Fig. 95　ＳＷ1361出土遺物実測図

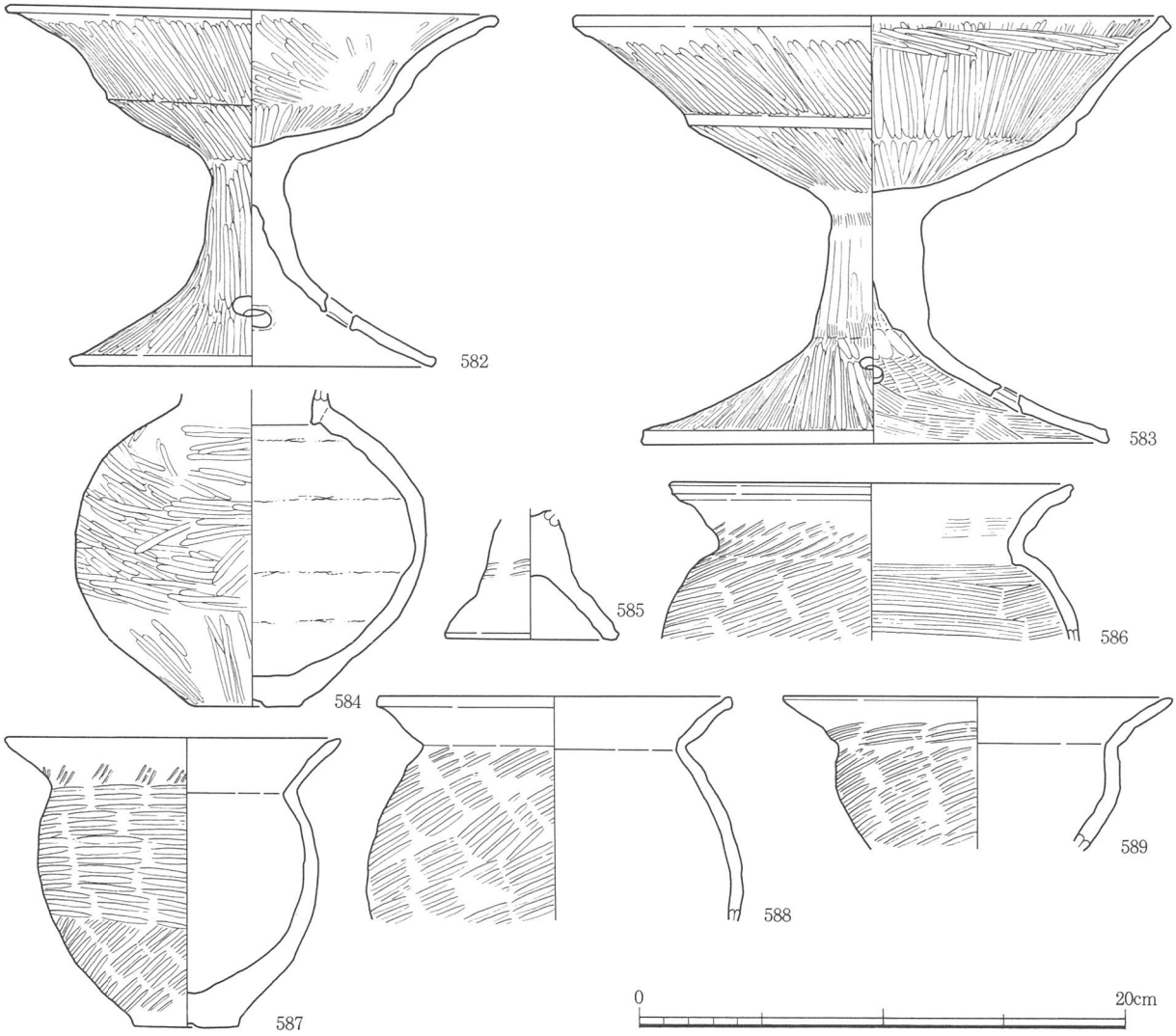


Fig. 96　ＳＷ1362出土遺物実測図

3-a.　ＳＷ1363(Fig.97)

Ｃ11ＤＳ付近に位置する土器溜である。ＳＤ1305のある時点での溝底に相当すると思われる。検出標高6.4m前後，南北2.5m，東西1.3mの範囲で面的に分布する。

3-b.　遺物(Fig.98・99，PL.98・99)

甕(590～606)，壷(607)，高杯(608～612)，鉢(613～616)，小形丸底土器(617・618)，器台(619～625)などから構成されている。

590～599は弥生形甕Ａである。タタキ成形を基本としているが，体部や口縁部の調整にハケを併用する595・598がある。592・598など，頸部のくびれがかなり緩やかな個体がある。口縁端部は明瞭に上方に拡張され，外面に端面をもつ口縁ｅ(592・595)などがある。600～602は庄内式甕Ａである。完形に近い601では，極細の平行タタキの後，肩部直下までハケが及ぶ球形の体部を有する。603～606は布留式祖形甕である。口縁端部は内外面共にやや拡張され，外傾する端面をもつ口縁ｏで，604・605はやや内湾の傾向がある。体部は603・606ではタタキ成形により，603はハケ，606はナデで仕上げられ，また606は分割成形痕が明瞭である。

607は広口壷Ａである。やや扁球状の体部に突出した底部を備える。

608はミガキＢ・Ｃを用いた有稜高杯Ｃである。609は有稜高杯Ａで，直線的な口縁をもつ。脚柱部は中実で，脚柱部と脚裾部の輪郭はシャープである。610・611は有段高杯であるが，外面の調整は610がミガキＡ，611がミガキＢと異なっている。いずれも口縁が強く屈曲し，有段部が強調されている。612

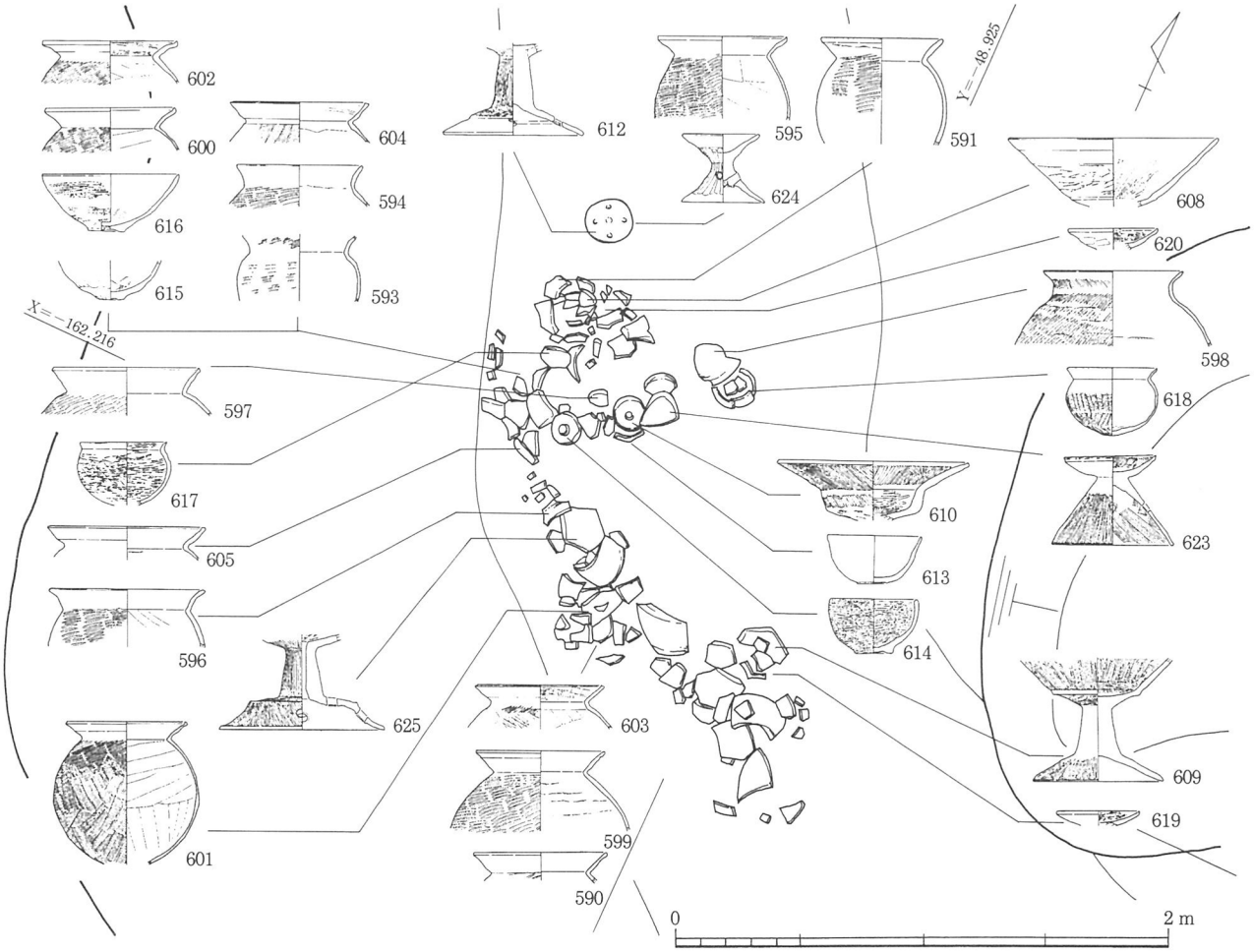


Fig.97　ＳＷ1363遺物出土状況図

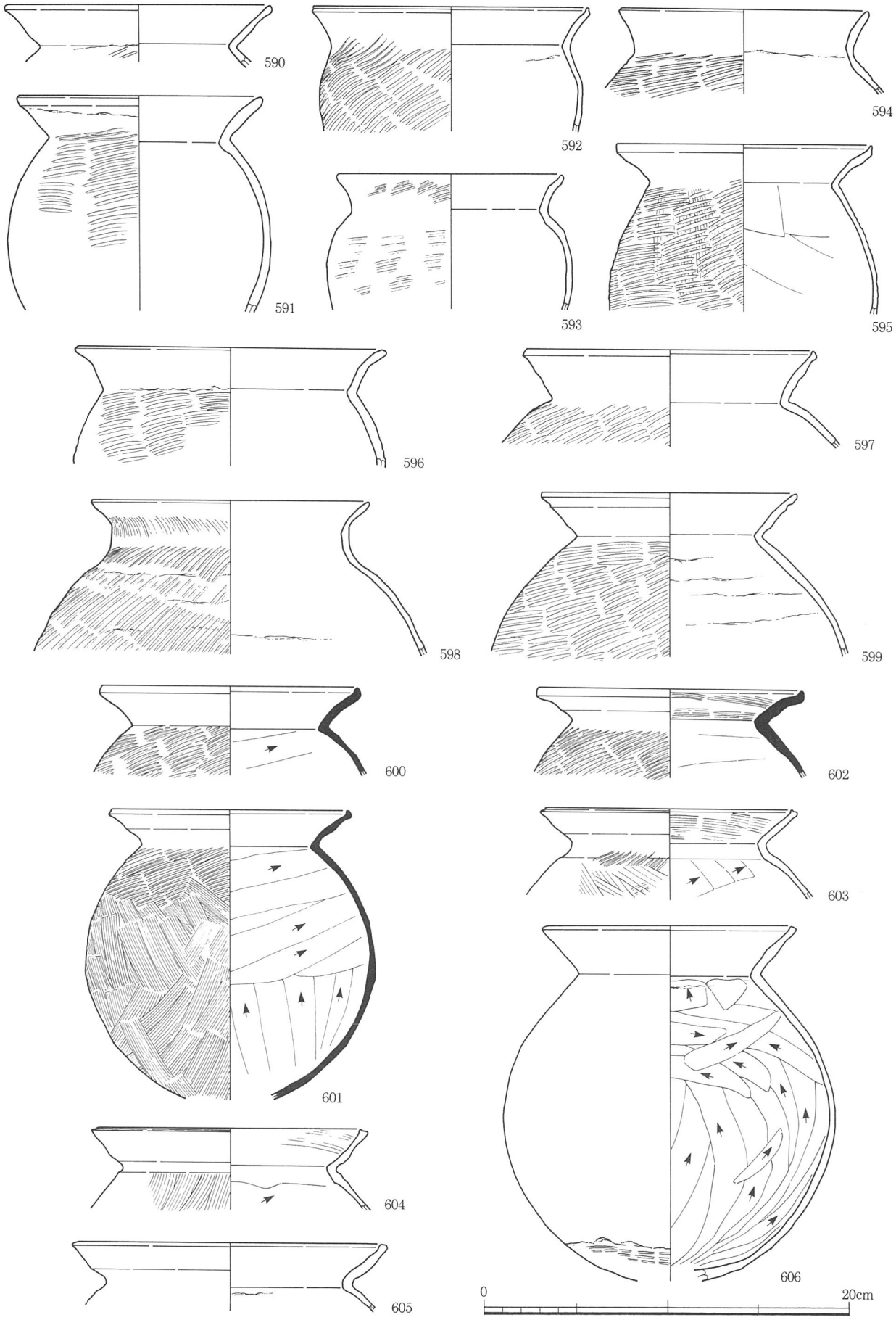


Fig. 98　ＳＷ1363出土遺物実測図（１）

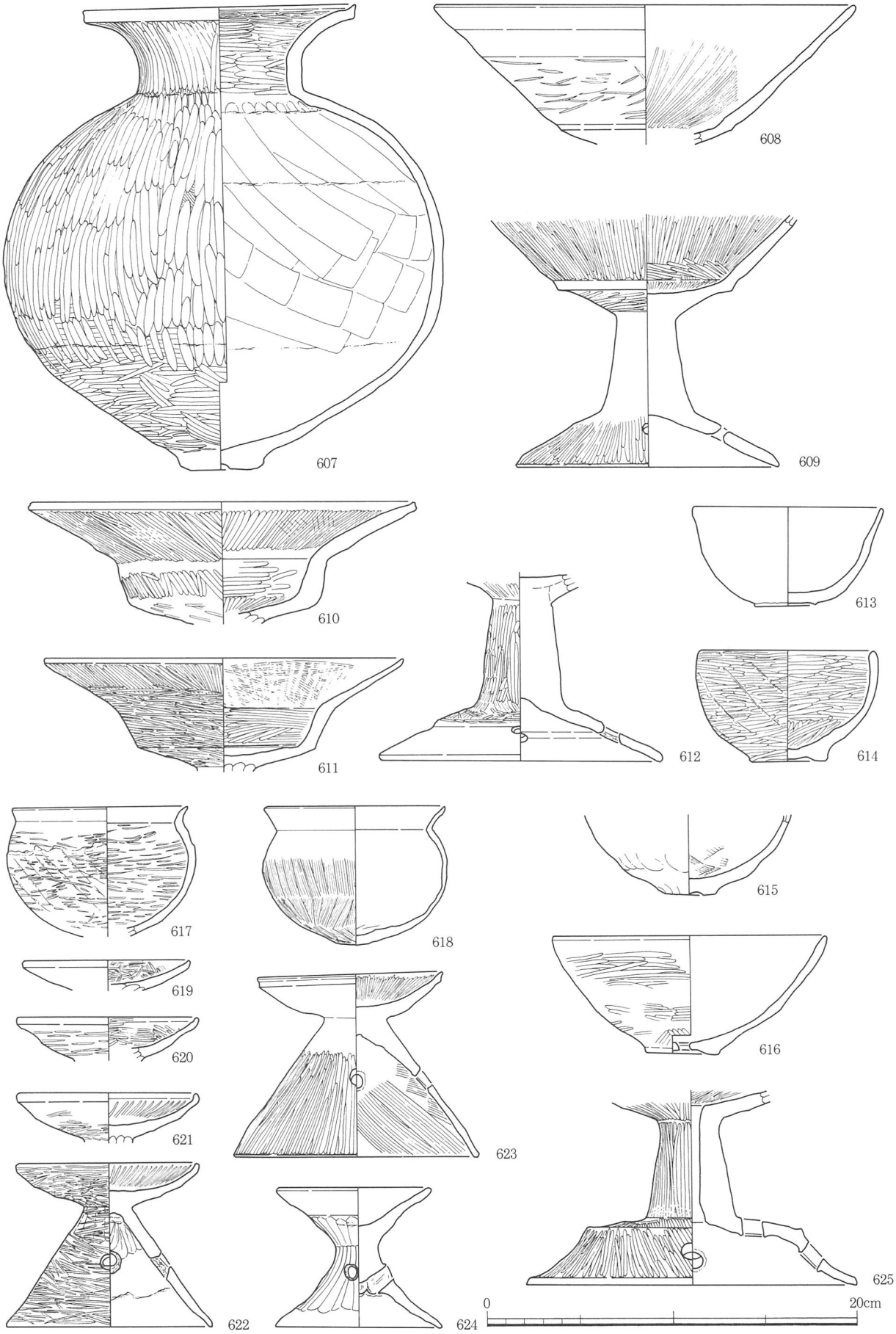


Fig. 99　ＳＷ1363出土遺物実測図（２）

は有段高杯の脚部と考えられ，脚裾部に低い段を設けている。ミガキＡで調整される。

613～615は小形鉢Ａである。体部は半球形の椀状を呈し，また底部の突出は僅かであり，底部自体が痕跡的である。614は内外面共に横方向ミガキＡ，他はナデ仕上げによる。616は有孔鉢Ａである。

617・618は小形丸底土器である。いずれも扁球状の体部に短く外反する口縁部を備える。器径は口径を凌駕している。618はほとんど痕跡的な狭い平底を僅かに突出させている。617は内外面ともにミガキＢを密に加えるが，618は外面ハケ調整とナデによっている。

619～624は小形器台Ｂで，口縁端部の形状から分類すると622がB_1，619・623がB_2，620・621がB_3となる。最終器面調整は外面ナデによる619，ミガキＢによる620～622，ミガキＡを用いた623がある。624は極めて粗製の小形器台Ｘで，３方透孔が内面で切り合っている。625は脚裾部に強い屈曲をもつ有段部を設けた有段器台で，脚柱部の中心を貫通する孔を設ける。４方透孔を有段部の上下に45°ずらして配置する。外面と受部内面にはミガキＡが施されている。

４-ａ．ＳＷ1364(Fig.100)

Ｃ11ＤＳ付近に位置する土器溜である。ＳＤ1305の西斜面に認められ，検出標高は6.5m前後で，南北2.4m，東西1.2mの範囲で面的に集合して分布していた。

４-ｂ．遺物(Fig.101～103，PL.100・101)

甕(626～648)，壷(649～653)，小形器台(654)，鉢(655～658)，高杯(659～667)などを組成とする。

甕はすべて弥生形甕Ａである。超小形の626・627・635，中形の638・639，大形の645などがある。中形以下の甕では体部形状が上下にやや圧縮された倒卵形，もしくは球形に近い形であるが，底部は基本的にやや突出させている。口縁部形状では632・635・637などが口縁端部をやや拡張させて明瞭な端面を作っている。また629～631などのように，口縁の屈曲が緩い個体も散見される。大形の弥生形甕Ａａの645は，出土状況から他の個体との一括性を認め得るが，口縁部外面に弱い稜線を有すること，長胴傾向が強いことなど，型式学的には古い特徴を残している。

649は広口壷Ａである。頸部から大きく開く口縁をもち，端面を有する。650は広口直口壷で，頸部から緩やかに広がる短い口縁部を付加する。651・652は球形体部をもつ小形の壷で，僅かに突出する平底をもつ。口縁部形態は不明であるが，内湾して広がるようである。複合口縁壷Ｘの653は，頸部と口縁部の接合部分では屈曲がかなり緩い。

654の小形器台ＸはＳＷ1363の組成中にみられた624とほぼ同形態の粗製品で，口縁部はナデ，くびれ部以下はヘラナデで調整されている。

655～657は小形鉢Ｃで，浅い椀状か半球状の体部に，外側に短く広がる口縁を付加する。いずれもやや突出した平底をもつ。655は口径に対して体部が浅く，口縁部に内湾の傾向がある。658の有孔鉢Ｂはタタキ成形痕を残し，平底と僅かに内湾して立ち上がる体部・口縁部をもつ。

659～662は有稜高杯Ａ，663はＸである。いずれも口縁部の屈曲が弱く稜径が比較的大きい。ミガキＡによってほぼ全面を調整されている。脚部については，脚裾部が内湾する660，直線的かやや外反する661・662などの相違がある。また脚柱部内面はいずれも上半が中実で，下半に円錐状の窪みを有する。663は他の有稜高杯と比較して，口縁部の屈曲，ミガキ調整法において異質であり，搬入土器の可能性もある。664は体部から屈曲した口縁部を付加した有段高杯である。杯部外面にミガキＢ，内面は口縁部・体部にミガキＣを加える。665～667は椀形高杯Ｂで，いずれも半球状の杯部，短い脚柱部，大きく扁平に近い形で広がる脚裾部を備える。脚柱部内面中央は僅かな窪みを有する。

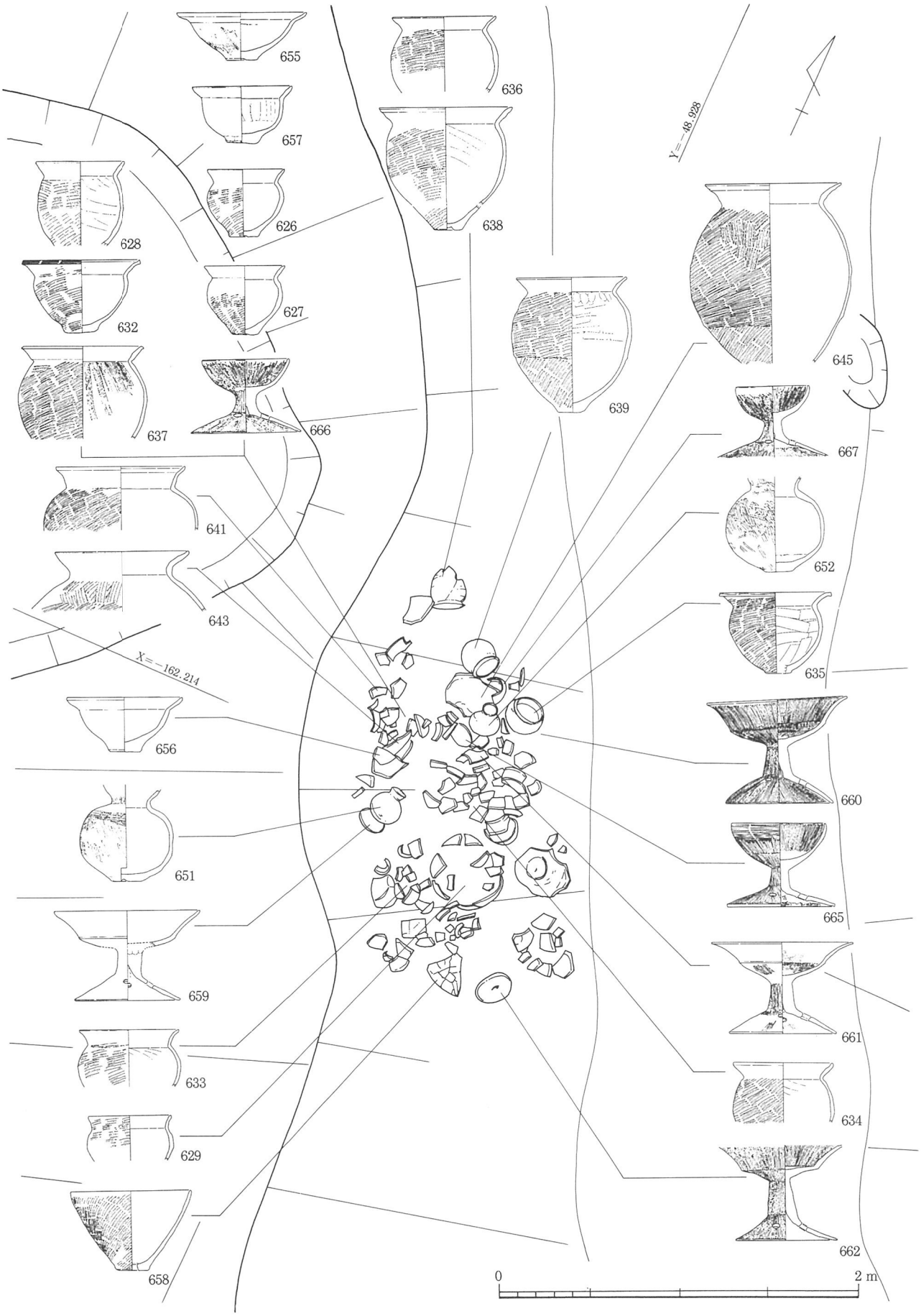


Fig. 100　ＳＷ1364遺物出土状況図

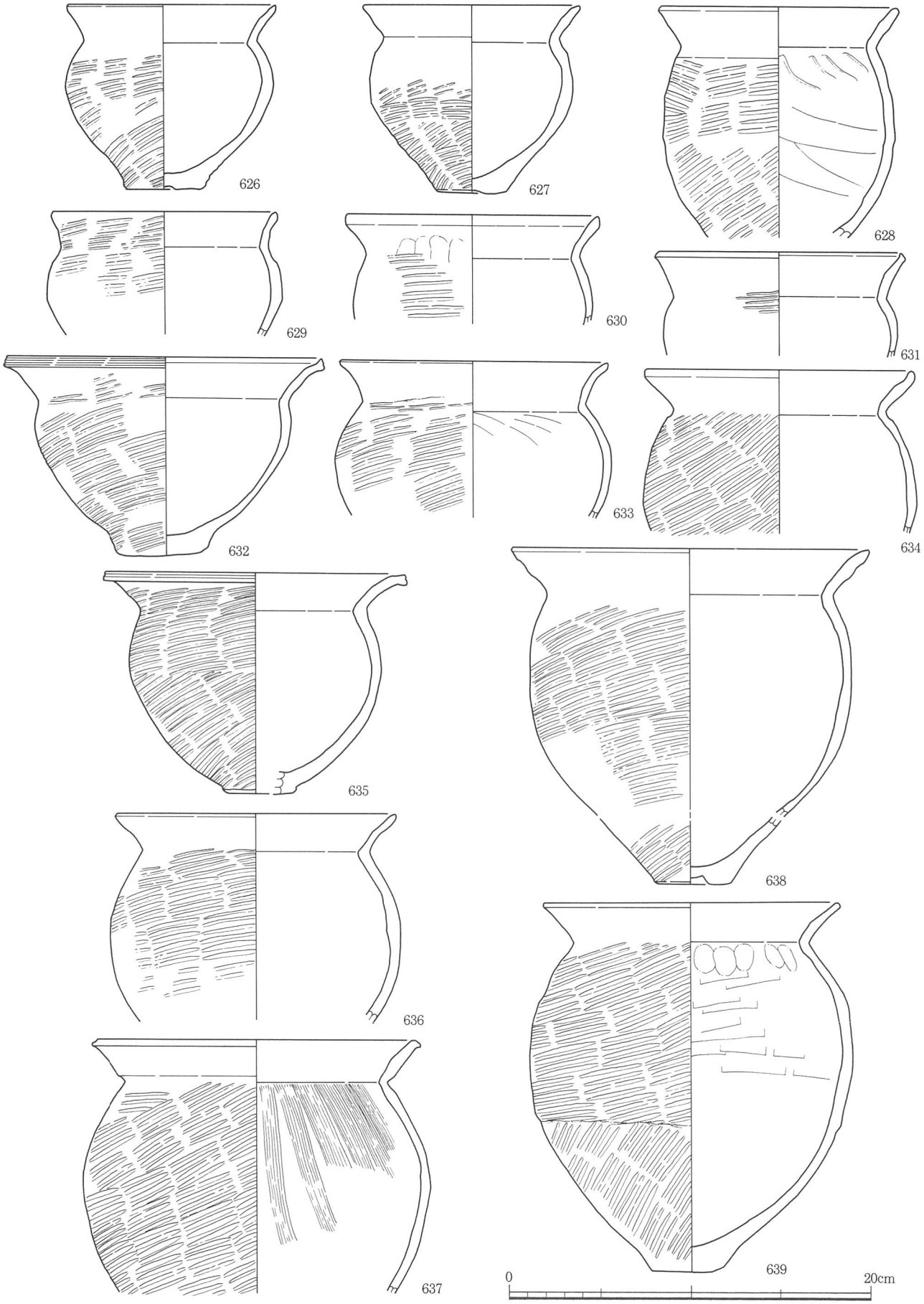


Fig. 101　ＳＷ1364出土遺物実測図（１）

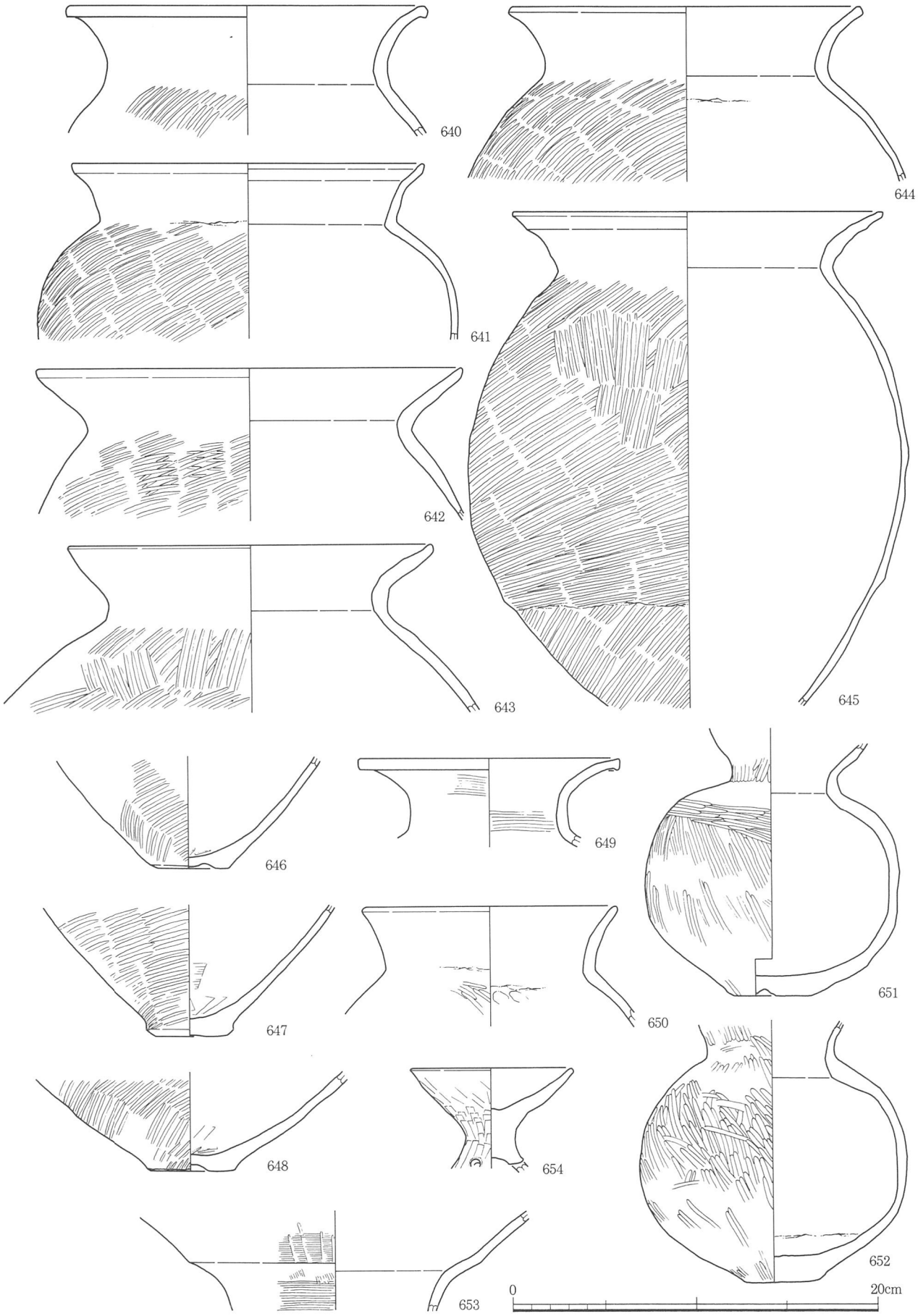


Fig. 102　ＳＷ1364出土遺物実測図（２）

Fig. 103　ＳＷ1364出土遺物実測図（３）

5-a.　ＳＷ1365(Fig.104)

Ｃ11ＣＲ付近に位置する土器溜で，ある時点での溝底に相当すると思われる。検出標高6.4m前後，南北2.9m，東西1.1mで面的に分布する。土器の集合が僅かに離れた部分があるが，同じ標高で近接して検出されたこと，また土器様相も矛盾しないことから一括性を認める。土器群中には直径25㎝前後の４個の円形粘土塊が存在し，同様の粘土塊は南側1.5～３mの溝底でも検出されている。

5-b.　遺物(Fig.105，PL.102)

甕(668～672・674)，壺(688)，高杯(675・676・678～680)，脚台(677)，小形丸底土器(681)，小形器台(682～687)，製塩土器(673)などで構成される。

668はナデ仕上げの小形の甕Ｘ，669～671は口縁部から肩部にハケをよく残した布留式祖形甕で，670・671は頸部直下までケズリを加える。布留式祖形甕672は斜方向にハケ調整した球形体部をもつ。674は庄内式甕Ｂで，やや尖底傾向のある球形体部とやや上方に拡張した口縁部を備える。体部成形は細筋タタキのち底部周辺に縦方向ハケを加えている。

688は直口壺で，球形の体部をミガキＡで調整後，口縁部から頸部にかけてミガキＢを加える。

高杯には低脚高杯の675・676，有稜高杯Ｃの678，椀形高杯Ｂの679・680がある。脚台677の器種は台付鉢もしくは底脚の高杯の可能性をもつが断定できない。

小形丸底土器Ｂ681は扁球状体部に内湾した短い口縁部を付加する。外面はミガキＢによる調整。

小形器台は684・685がB_2，683・686がB_3である。682～686では外面の調整はミガキＢによっている。687は脚部があまり広がらず外面調整もミガキＡによる点で，他と比べて異質な小形器台Ｘである。

673は縦方向のハケ調整を加えた製塩土器Ｄである。尖底気味で長胴の体部をもつ。

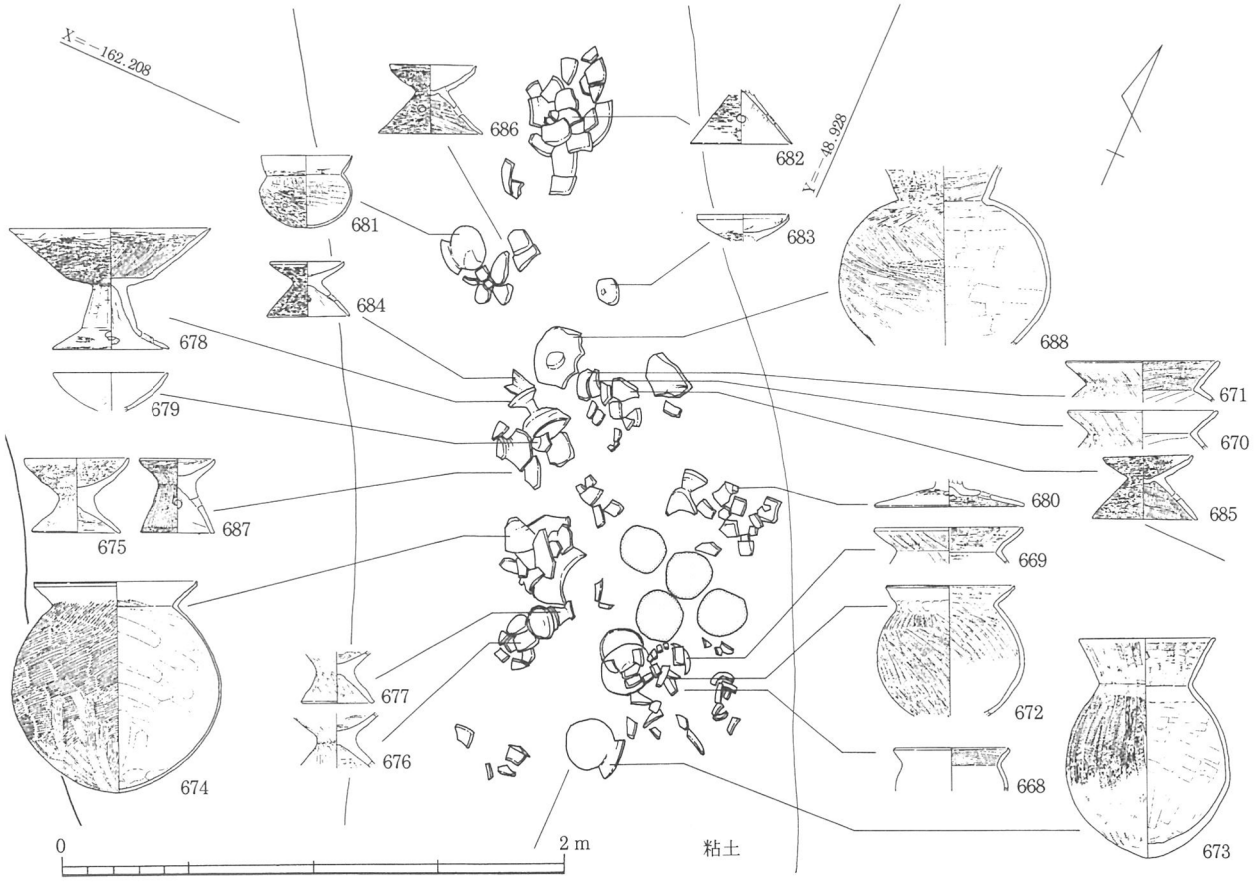


Fig.104　ＳＷ1365遺物出土状況図

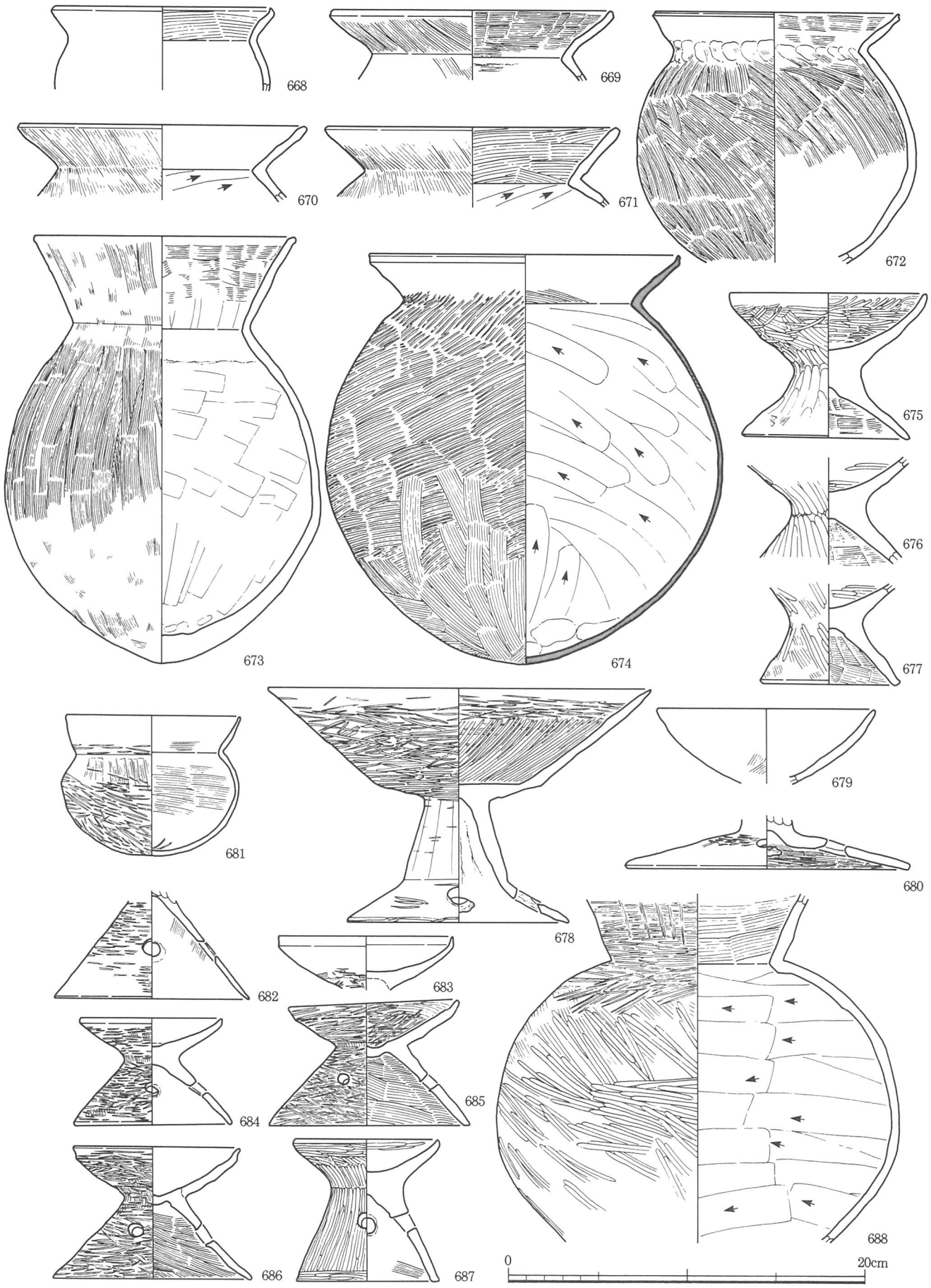


Fig. 105　ＳＷ1365出土遺物実測図

6-a.　ＳＷ1366(Fig.106)

Ｃ11ＣＲに位置し，ＳＤ1305の西斜面に認められる。検出標高は6.8m前後で面的に分布する。

6-b.　遺物(Fig.107)

器種には甕(689～693)，壷(694)，製塩土器(695)，鉢(696・697)がある。

甕はいずれも弥生形甕Ａで，689は口縁端部を上方に拡張し，690・693は口縁部の屈曲が緩いなどの特徴をもつ。

694はＳＷ1364出土の651などと同様，小形の壷の底部と思われる。

695は製塩土器Ｂの脚台部であろう。

696はタタキ成形の有孔鉢で底部の有孔部が突出する。697は大形鉢で，内外面共に密なミガキＡを施している。

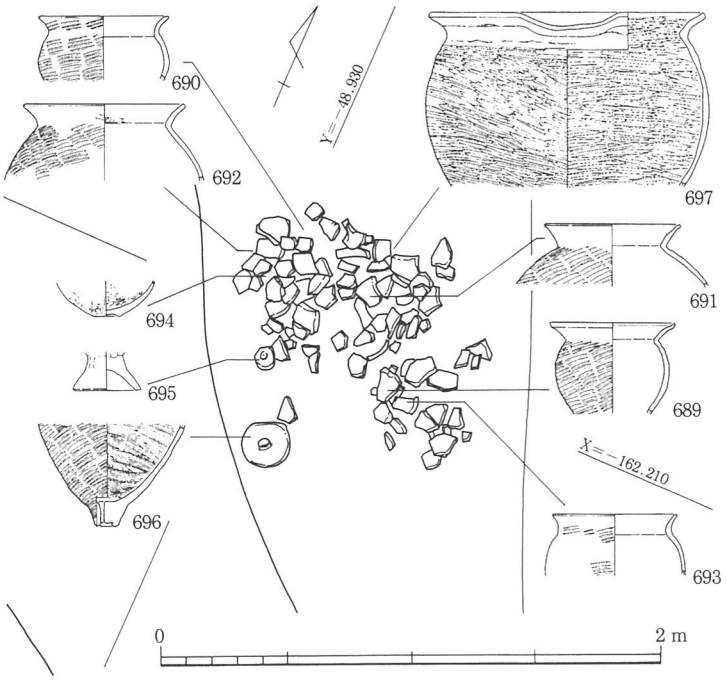


Fig.106　ＳＷ1366遺物出土状況図

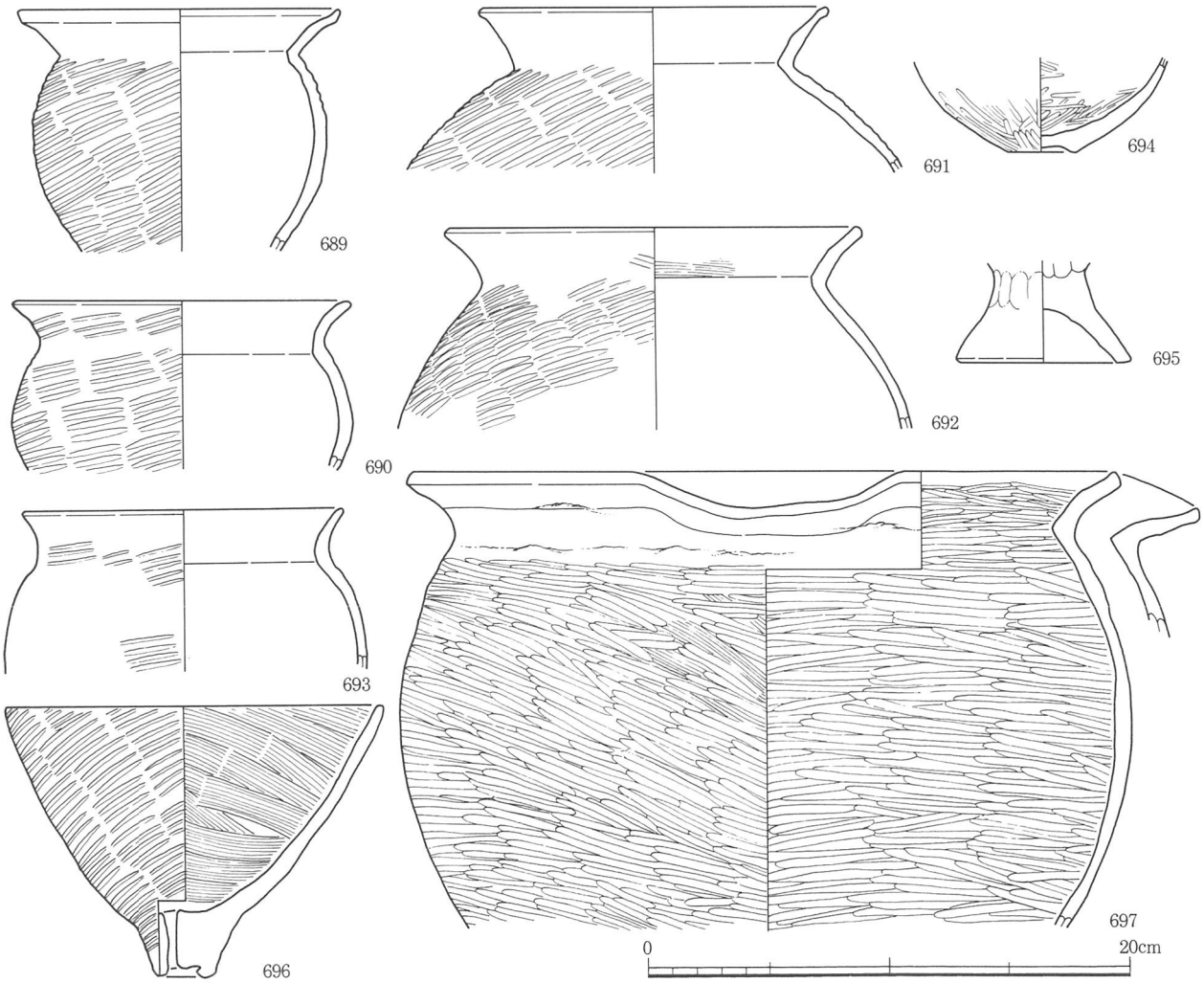


Fig.107　ＳＷ1366出土遺物実測図

ＳＤ2206

１．遺構(Fig.108～110，PL.10)

Ｂ－２区の北西端部，Ｃ12ＯＲ周辺で検出された大溝である。緩やかに蛇行しながら南から北へ延びる部分が検出されており，それぞれ調査区外に及んでいる。これが大溝の本流にあたり，またその西側では小規模な浅い溝を合する。検出長は33.8m，幅6.8～10.6m，深さ2.2mである。流水方向は南から北へ向かうと考えられる。大溝の東側に接するように竪穴住居ＳＡ2216～2219が連続して構築され，また西側にはＳＡ2224が営まれている。溝の西側は攪乱によって大きく損壊を受けている。

溝内部の堆積土は３層に大別され，上層から下層へ１～３層とする。３層から中期弥生土器，２層から後期弥生土器，１層から後期弥生土器・古式土師器が出土した。

堆積土に包含された土器について，出土層位ごとに述べる。なお，１層中には夥しい量の土器片が包含されていた。その一部については平面的に検出したが(Fig.108)，これは隣接した住居からの投棄行為に由来する堆積と思われ，これら弥生土器・古式土師器はＳＤ1305・４層以上から出土した遺物と質的，量的に匹敵する内容をもつものであった。しかし遺存状態が著しく不良であり，また一括性の検討に時間を割くことができなかったので，ここではその一部を掲載するに留めたい。

２-ａ．３層遺物(Fig.111，PL.103)

下層に相当する層位で，中期弥生土器の若干量の出土をみている。器種には壷(698～703)，器台(704)，高杯(705)，鉢(706)，甕(707～709)，底部(710・711)などがある。

698・699は広口壷である。698は頸部に接点がない。体部下半に最大径をもち，緩やかに絞られた頸部から外反して広がる口縁に至る。口縁端部を僅かに垂下させ，外面に簾状紋を飾る。また頸部から体部上半にかけて簾状紋を配し，最大径部には波状紋を巡らせる。699は口縁部が外反して水平に延び，上下を拡張した端面をもつ。端面に波状紋，口縁部内面に扇形紋を飾る。700は細頸壷と思われ，垂下した口縁端面に簾状紋を施す。701～703は広口短頸壷である。702はタタキ成形痕を残している。703は口縁端部を上方に強く拡張する。

704は器台の体部で，外面には凹線紋を連続的に施している。

705は皿状の杯部をもつ高杯で，杯部は内外面ともミガキＡが施され，口縁外面に列点紋を配する。脚部は筒状の脚柱部から脚裾部へ緩やかに広がる。

706は緩やかに内湾して広がる体部をもつ鉢で，口縁端部は僅かに内折される。

707は小形，708・709は大形の甕である。707は体部から強く屈曲した口縁をもち，端面に１条の凹線をもつ。708・709は共に口縁端部を上下に拡張して端面を作り，３条の凹線を巡らせる。

710・711は壷の底部と思われる。710は底面中央に穿孔がある。

２-ｂ．２層遺物(Fig.112～114，PL.104・105)

中層に相当する層位で，後期弥生土器が比較的まとまって出土した。壷(712～717)，甕(718～723)，高杯(724～734)，大形器台(735)，鉢(736～745・748)，手焙(746・747)などの器種がある。

712～714は長頸壷である。いずれも口縁部が外反し，714は口径が口縁部高を凌駕する。715は無頸壷で，口縁端部を外面に肥厚させて段を形成する。中期の無頸壷より小形である。716は広口壷Ｂ，717は広口壷Ｄである。

甕は小形の718や大形の723などがある。718は口縁端部を丸くおさめる口縁ｈであるが，719～721・723は口縁部外面に緩い段を設け，また明瞭な端面を作る口縁ｃである。また722は頸部内面に明瞭な稜

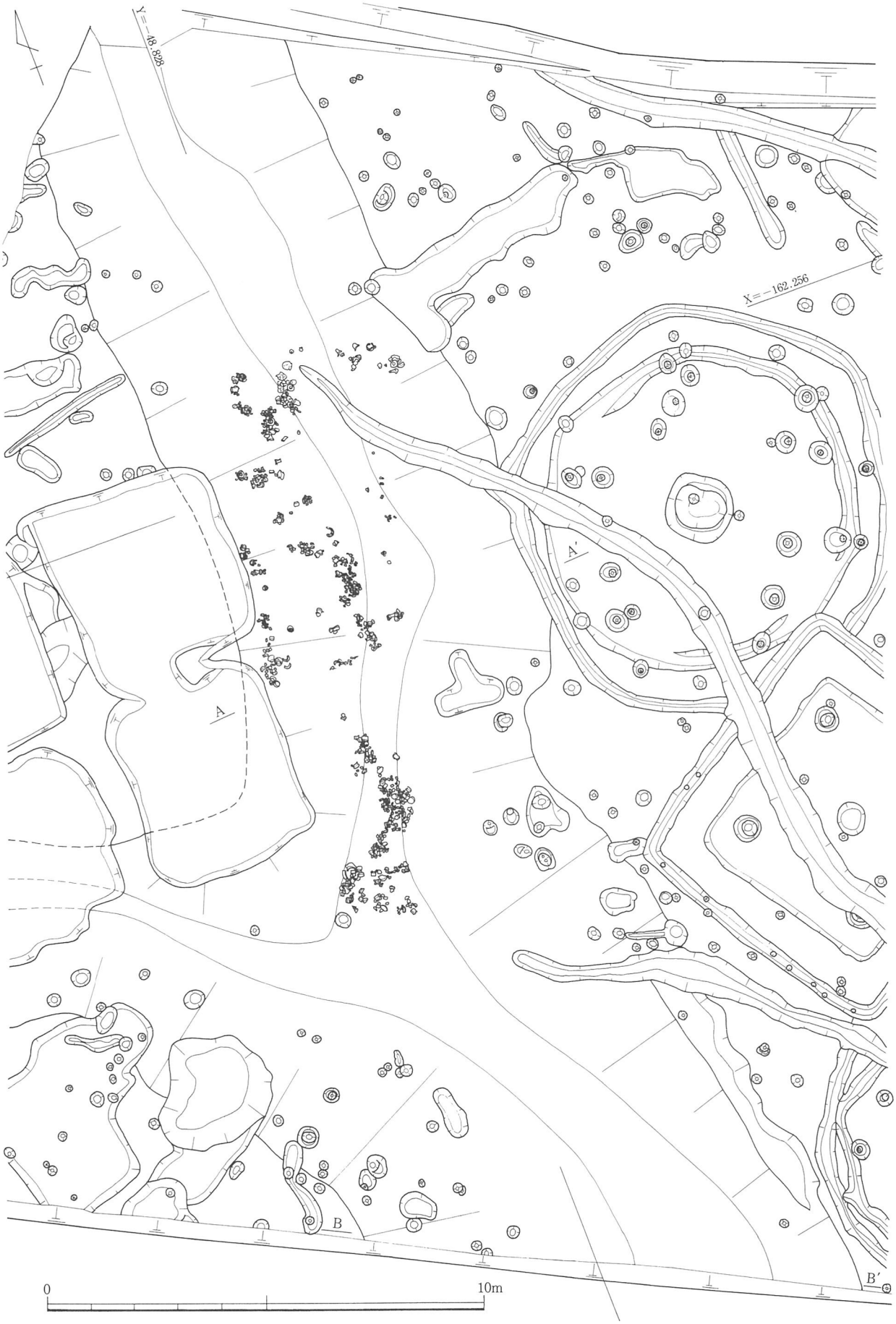


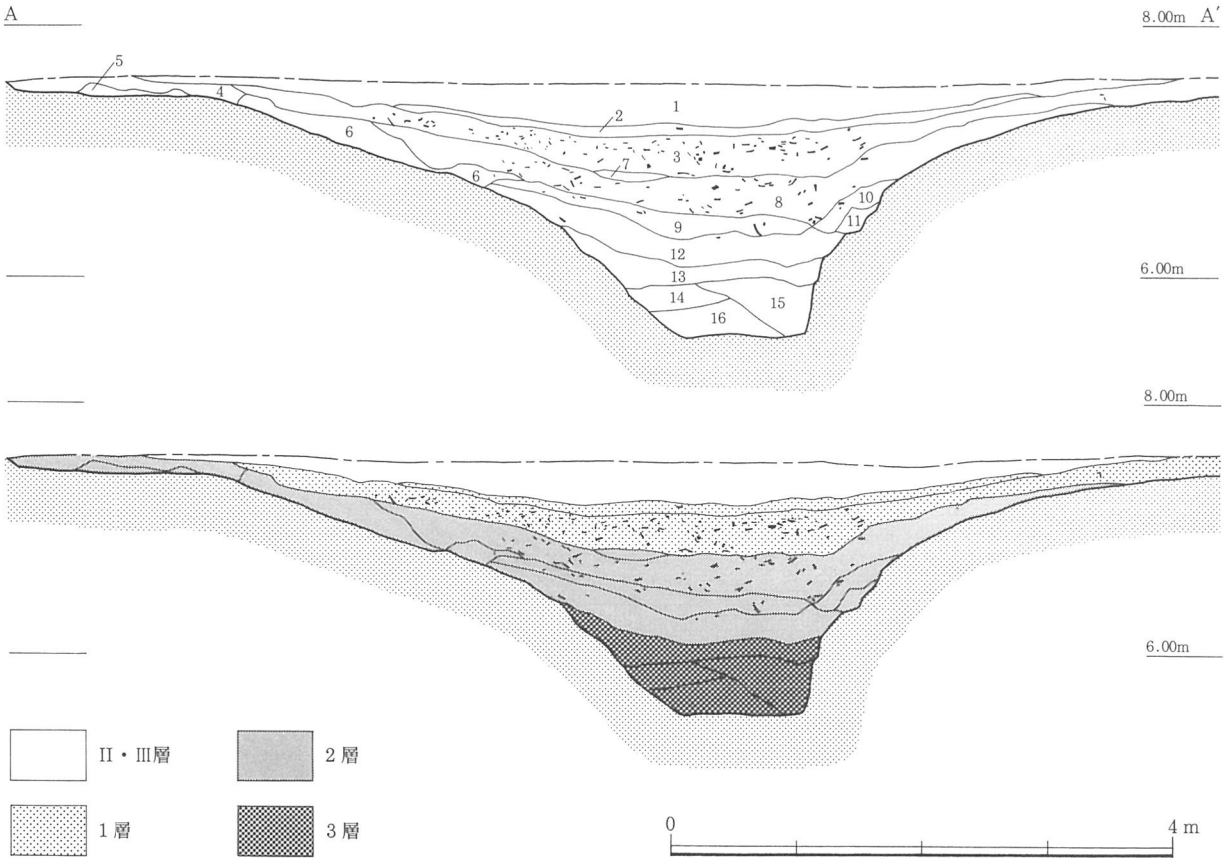
Fig. 108　ＳＤ2206平面図

を有し，直線的に強く屈曲して明瞭な端面をもつ口縁ａ形態を示す。すべてタタキ成形によるが，721は体部下半の分割成形接合部に横方向ケズリ，723の体部下半には縦方向ケズリが加えられている。

高杯には724～730の有稜高杯，733・734の椀形高杯，731・732の脚部がある。有稜高杯のうち口縁部の立ち上がりの角度が緩く，口縁部外面に横方向ナデを加えたのち波状，あるいは鋸歯状のミガキを施した726～729を有稜高杯Ａ，また口縁部が急角度で立ち上がる724・725をＢ，小形の730をＸとして捉えた。いずれもミガキＡを主体とした調整がなされている。725は脚柱部上半が中実，728は緩やかにラッパ状に広がる中空の脚部をもつ。732はミニチュアの高杯脚部で，後者には脚裾部内面に粘土小塊の貼付が数カ所にみられる。733・734は椀形高杯Ａで，共に口縁部が緩やかに内湾して広がる形態である。733は内外面ハケ，734はミガキＡで調整され，口縁端部直下に擬凹線を巡らせる。

大形器台735は脚裾より口縁が大きく広がるＢと思われ，体部に３方２段の透孔を穿つ。

鉢には異形の小形鉢Ｘ736・737，小形の738～742，中形の743～745，大形の748がある。736はタタキ成形した小形の鉢に，しっかりした脚台を備える。737は浅い盃状の体部に小さい脚部をもつ。この両者は製塩土器の可能性も考えられる。小形鉢にはＡ(739・740)，Ｂ(742)，Ｃ(738)，Ｄ(741)が認められ，



1　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土質微砂
2　黒褐色（10YR3/1）粘土質微砂（土器片含む）
3　黒色（10YR2/1）粘土質微砂（土器片含む）
4　オリーブ黒色（5Y3/1）粘土質微砂（土器片含む）
5　灰色（7.5Y4/1）粘土質微砂
6　黄灰色（2.5Y4/1）粘土質微砂
7　褐灰色（10YR4/1）粘土質微砂（炭化物含む）
8　褐灰色（10YR4/1）粘土質微砂（土器片含む）
9　灰色（5Y4/1）粘土質微砂（土器片含む）
10　オリーブ黒色（5Y3/1）粘土質微砂（土器片・炭化物含む）
11　暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘土質微砂
12　灰色（7.5Y4/1）粘土（炭化物含む）
13　灰色（10Y4/1）粘土
14　灰色（10Y4/1）粘土
15　暗緑灰色（7.5GY4/1）粘土
16　暗緑灰色（10GY4/1）粘土

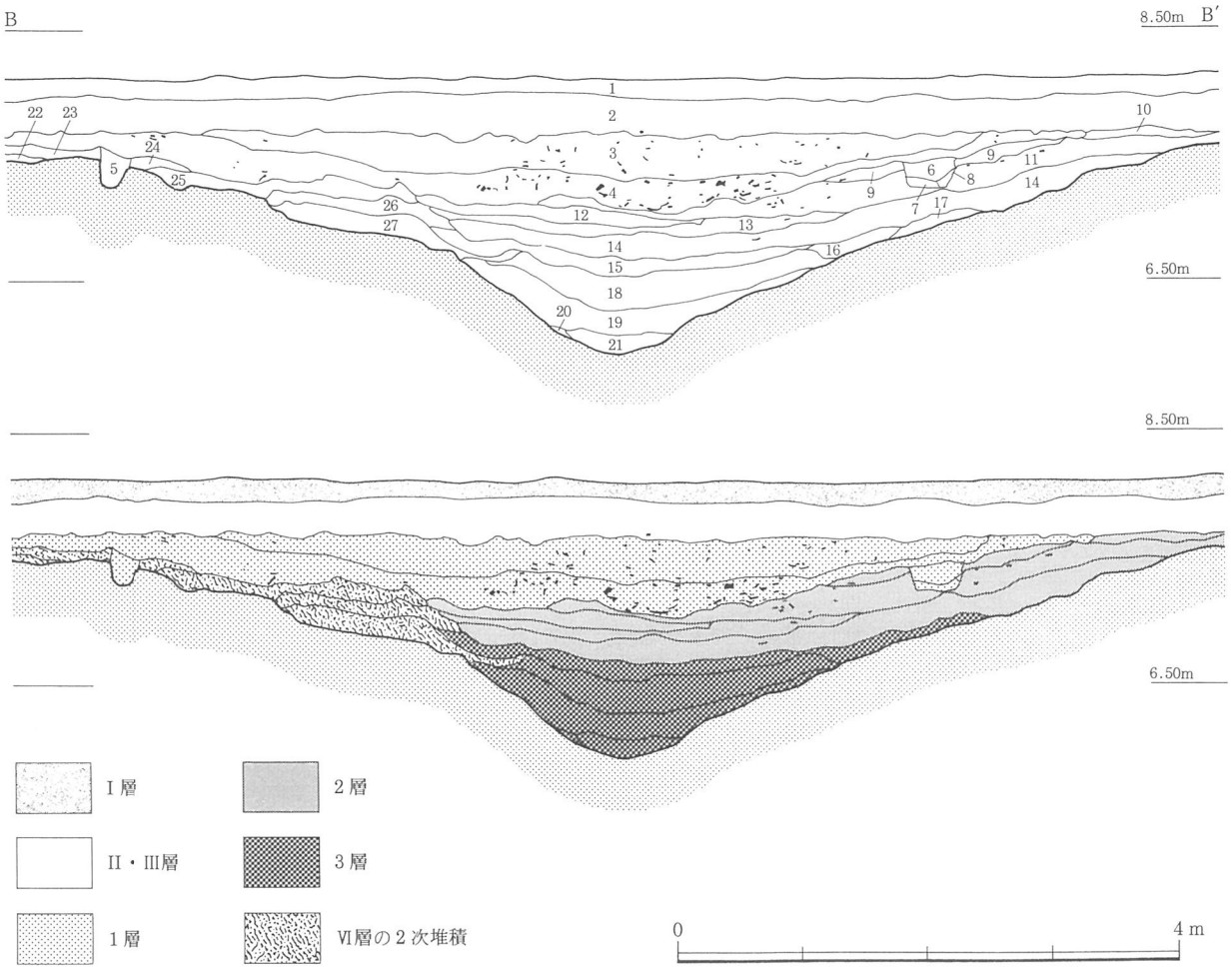
Fig.109　ＳＤ2206断面図（１）

また中形鉢では口縁部を上方に拡張した743，口縁部を内湾させて外面に段を設けた744・745がある。大形鉢748も口縁部は外面に段を設けて屈曲させており，中形鉢744・745とほぼ同工である。いずれの内外面も密なミガキＡで最終器面調整されている。

746・747の手焙は遺物取上げ時の記録によって中層に入れて報告したが，その形態から他の土器様相が示す本来の組成に含まれない可能性もあり，共伴関係は微妙である。746は体部の一部のみで覆部を欠損する。体部最大径部位に突帯を貼付け，刻目を施す。747は平底をもち，鈍い稜線によって体部の上半と下半が分けられている。覆部の頂はやや尖る。747とほぼ同様の破片が他に１点出土している。

2-c.　１層遺物(Fig.115，PL.106)

上層に相当する層位で，後期弥生土器・古式土師器が多量に出土した。壷(749～752)，甕(753～756・759)，小形丸底土器(757)，小形器台(758)，鉢(760)，高杯(761～763)，製塩土器(764～768)などを掲



1　褐灰色（5YR4/1）微砂
2　にぶい黄色（2.5Y6/4）微砂
3　黒色（10YR2/1）粘土質微砂・中礫（土器片含む）
4　黒褐色（10YR3/1）粘土質微砂・中礫（土器片・炭化物含む）
5　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土質微砂
6　褐灰色（5YR4/1）粘土質微砂（土器片含む）
7　オリーブ黒色（5Y3/1）粘土質微砂
8　黄灰色（2.5Y4/1）粘土質微砂
9　褐灰色（10YR4/1）粘土質微砂
10　黄灰色（2.5Y4/1）粘土質微砂
11　黄灰色（2.5Y4/1）粘土質微砂（土器片・炭化物含む）
12　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土質微砂
13　黄灰色（2.5Y4/1）粘土質微砂（炭化物含む）
14　褐灰色（10YR4/1）粘土質微砂（土器片含む）
15　灰色（7.5Y4/1）粘土質微砂
16　灰色（5Y4/1）粘土質微砂
17　黄灰色（2.5Y4/1）粘土質微砂
18　灰色（10Y5/1）粘土質微砂
19　灰色（10Y4/1）粘土質微砂
20　明緑灰色（10GY7/1）粘土質微砂
21　暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）細砂
22　黄灰色（2.5Y4/1）粘土質微砂
23　浅黄色（5Y7/3）粘土質微砂
24　浅黄色（5Y7/3）粘土質微砂
25　黄橙色（10YR8/6）粘土質微砂（土器片含む）
26　黄灰色（2.5Y5/1）粘土質微砂
27　浅黄色（5Y7/3）粘土質微砂

Fig.110　ＳＤ2206断面図（２）

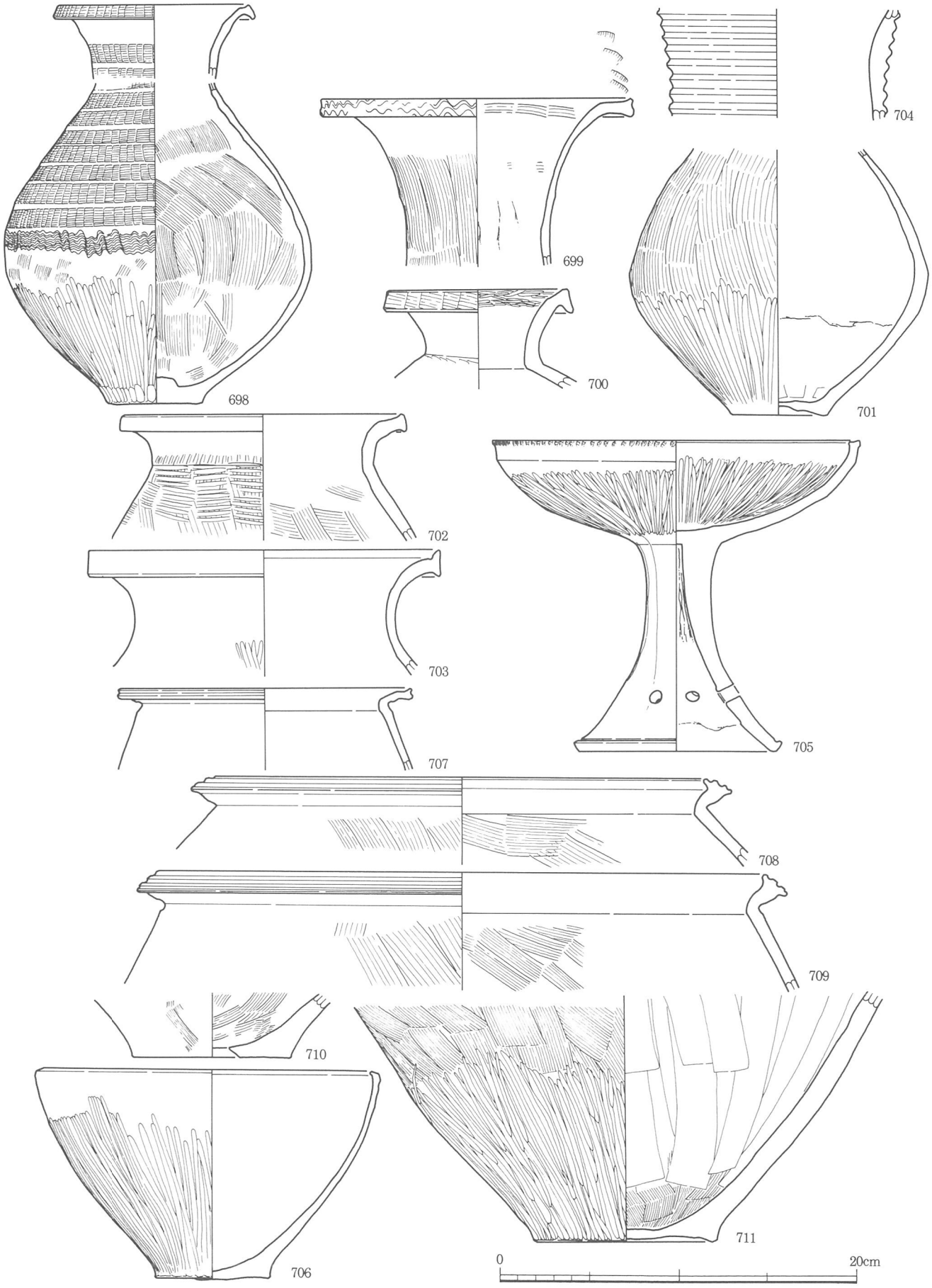


Fig. 111　ＳＤ2206出土遺物実測図（１）

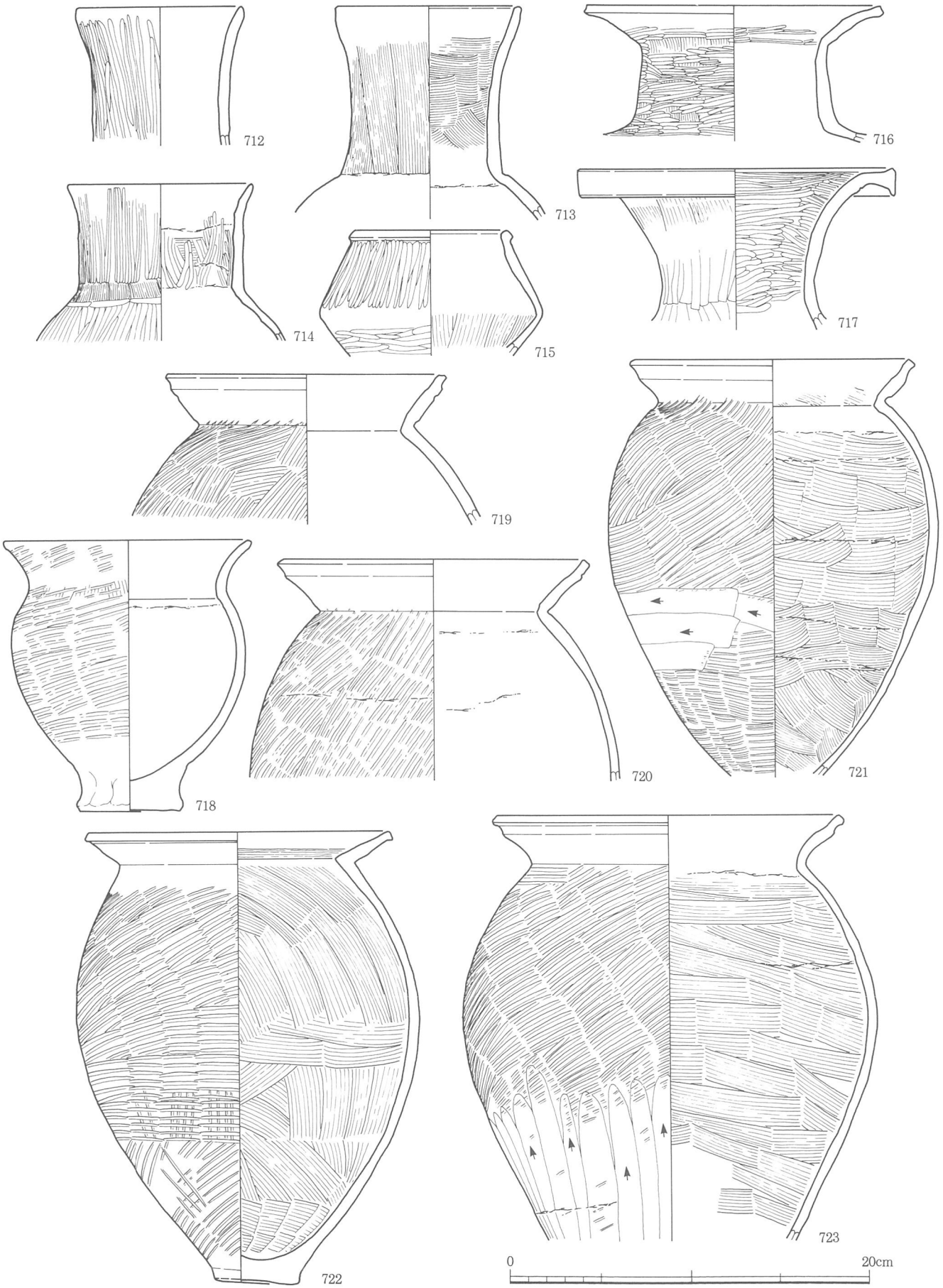


Fig. 112　ＳＤ2206出土遺物実測図（２）

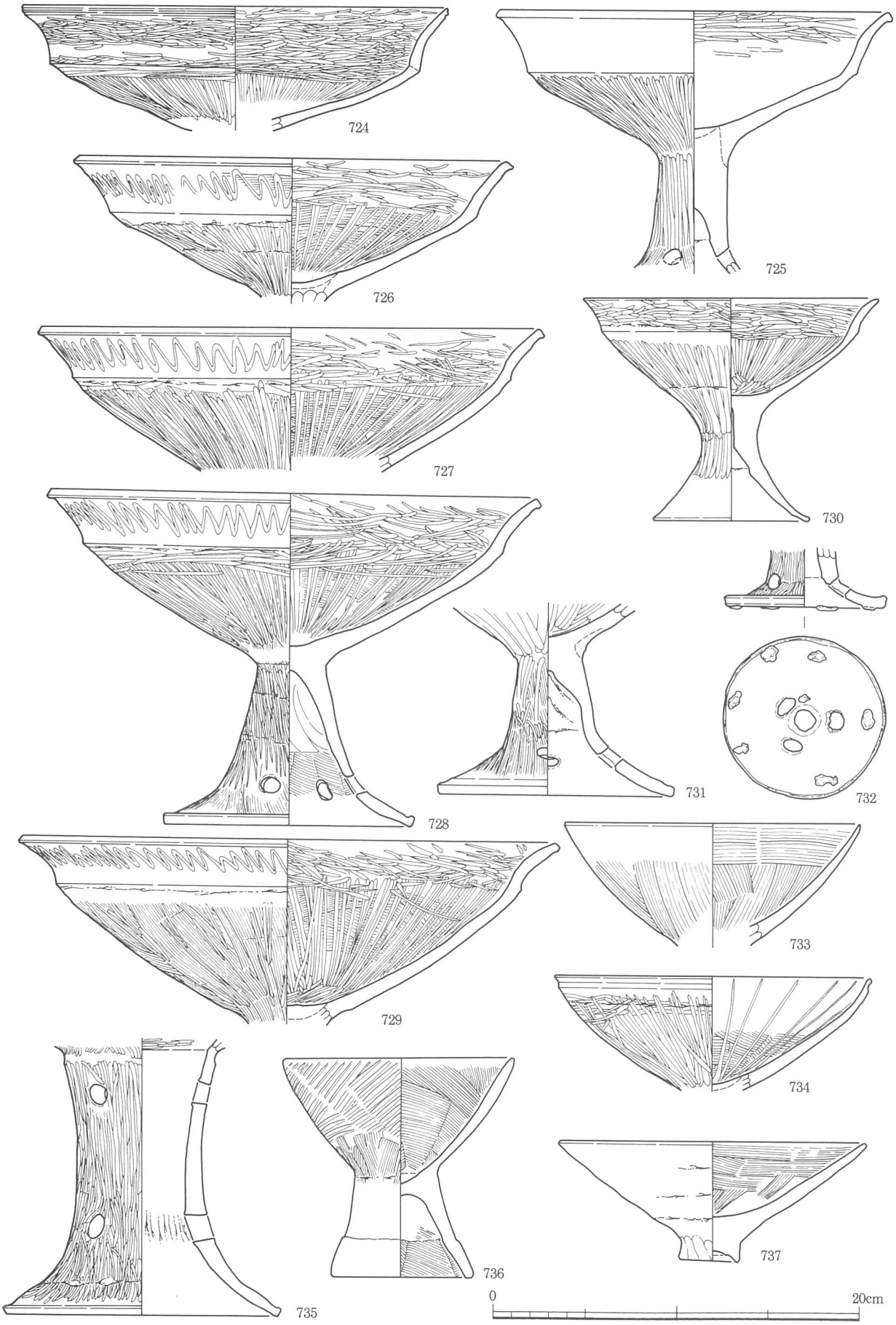


Fig. 113　ＳＤ2206出土遺物実測図（３）

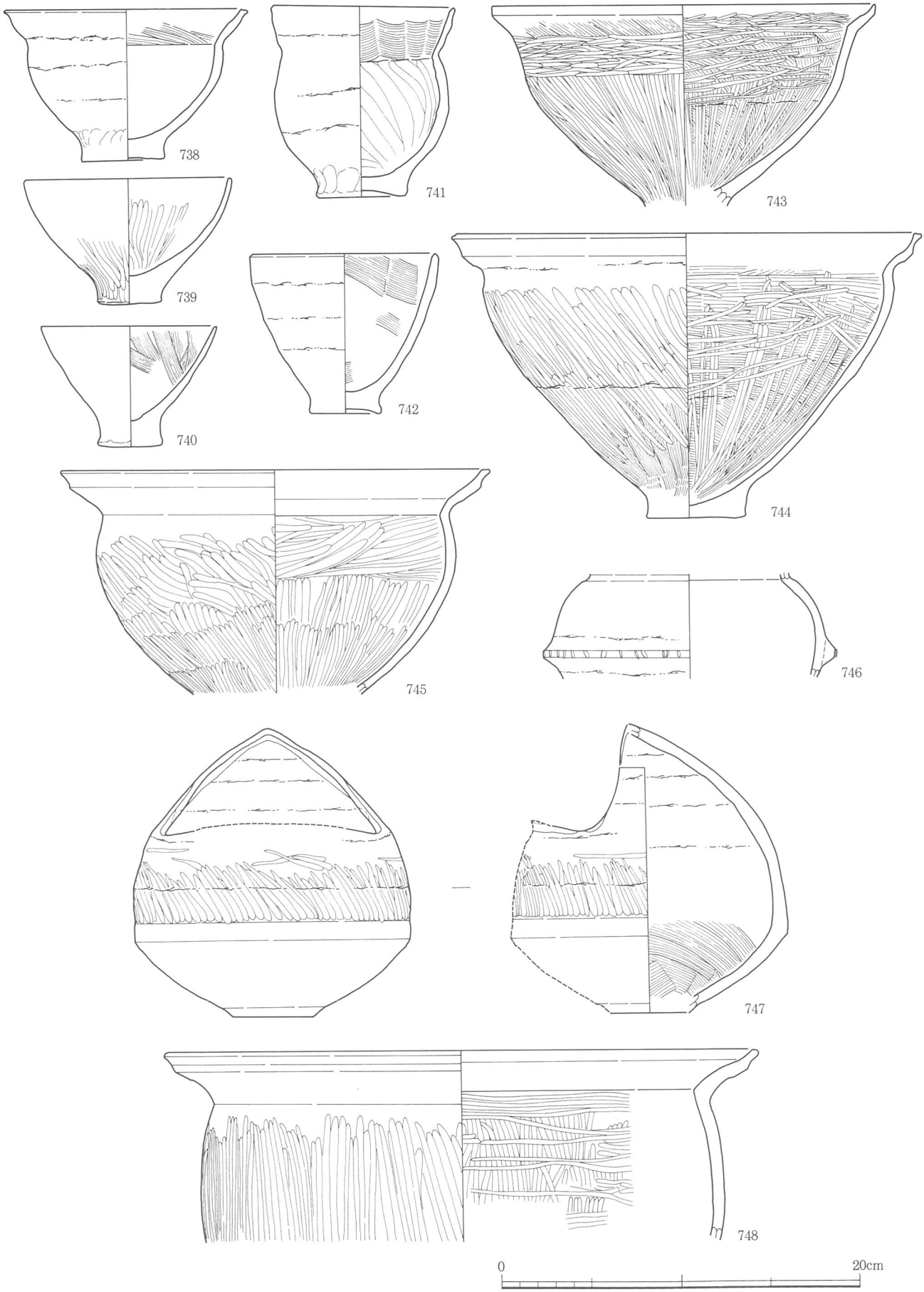


Fig. 114　ＳＤ2206出土遺物実測図（４）

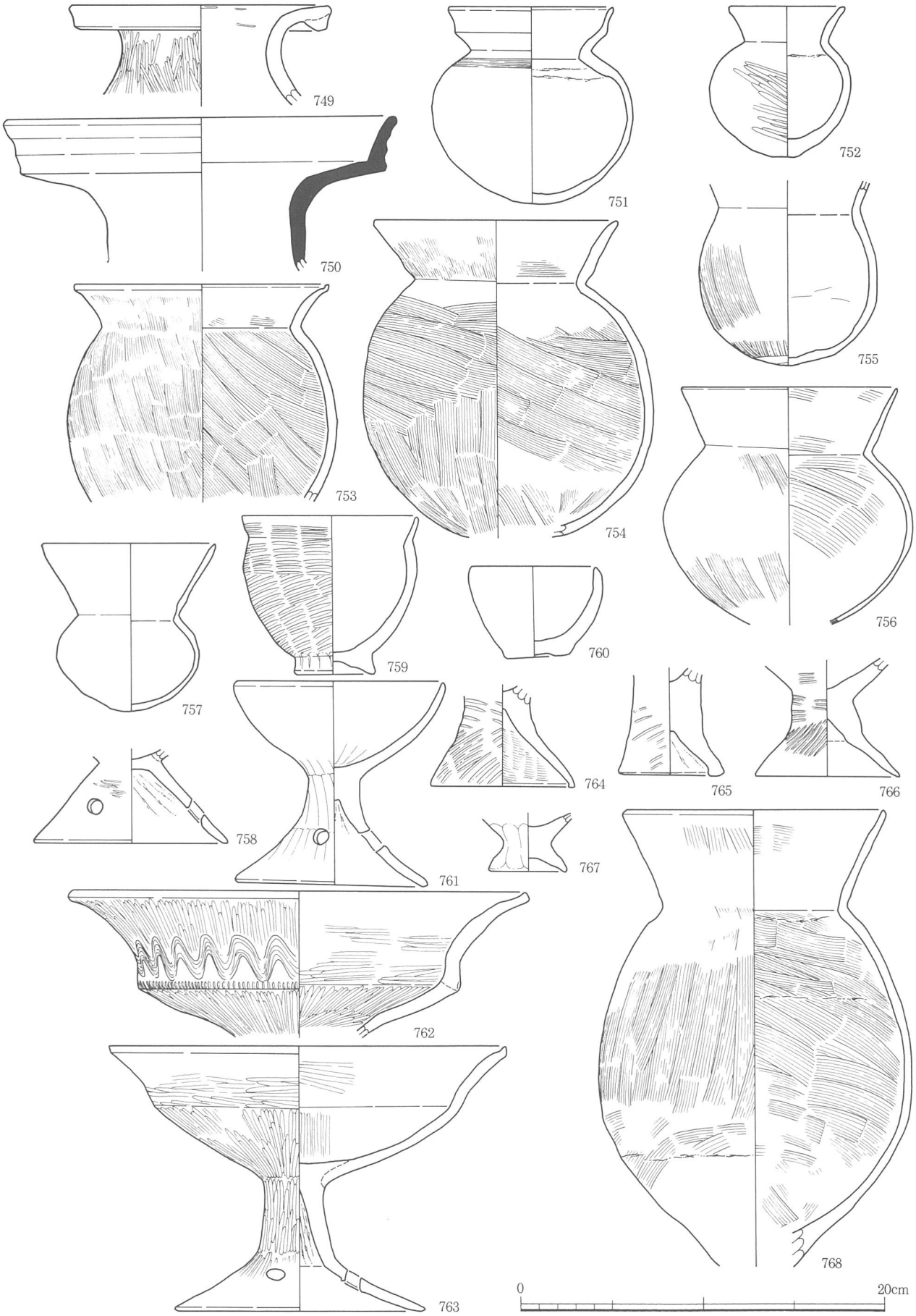


Fig.115　ＳＤ2206出土遺物実測図（５）

載する。土器量は膨大で，弥生時代後期後半から古墳時代前期までの時期幅を認める。前述の如く遺物自体の遺存状況が著しく不良で，また一括性に欠ける資料が多いことなどから，大半を割愛する。

749は口縁端部下面に粘土帯を貼付けて肥厚させ，口縁端面を作り出した広口壷Ｄである。750は頸部から受部が大きく張り出し，口縁が強い屈曲をみせる阿波系の複合口縁壷で，胎土に結晶片岩を含む。751は小形の複合口縁壷で，遺存状態が不良であるが肩部に横方向の弱いハケが認められ，全周させているようである。752は球形の体部をもつ小形壷である。壷には他に長頸壷・広口壷などがある。

753～756は体部ハケ調整の甕で，753・754は「く」の字に屈曲する口縁，球形の体部に斜方向ハケを施した布留式祖形甕である。小形の甕Ｘ755・756はいずれも丸底で，755はやや長めの体部をもつ。759は小形の弥生形甕である。甕では他に庄内式甕Ａが出土している。

757は口縁部がかなり発達した小形丸底土器で，この器種は個体数が少ない。758は小形器台Ｂである。他に小形器台Ｃの破片も出土したが，いずれも遺存状態が極めて不良である。

760は底部形態Ｂにやや内湾して広がる体部をもつ小形鉢Ａで，全面をナデで仕上げている。鉢ではこの他に有段口縁鉢の破片などが出土している。

761は椀形高杯Ａ，762・763は有稜高杯Ａである。763はミガキＡによる通常の調整であるが，762は口縁部外面に波状紋，杯部稜線直上に刻目を飾っている。

764～768は製塩土器で，764～766は内湾気味にふんばった形状のタタキ成形のＢ，767は椀形体部をもつナデ仕上げのＣである。768は全面ハケ調整の製塩土器Ｄ。

ＳＤ1108

１．遺構（Fig.116～119，PL.11～16）

Ａ－１区で検出された大溝である。弥生時代中期に存在していた自然流路ＮＲ1104は，やがて堆積作用によって大部分の範囲が土砂で埋没する。しかし古墳時代前期には，その北岸に沿って幅を狭めた流路痕跡が残存し，これを大溝ＳＤ1108とする。この大溝はＮＲ1104内の堆積土を検出した時点で，帯状に蛇行する痕跡が確認された。当然ながらＮＲ1104の堆積土を基盤としており，検出面の標高は6.7m前後である。検出長は48.5m，幅６～10m，深さ１～1.5mで，ＮＲ1104と同様に北東から南西方向に蛇行し，調査区外に及んでいる。この段階ではもはや河道としての機能はほぼ失われており，主流路の移動によって三日月湖の如き閉鎖水域に変貌していたようである。埋土は溝底の形に規制された成層堆積をみせ，３層に大別できる層位を，上層から１～３層，および４層と呼称する。１層はオリーブ黒色微砂を主体とした最大厚56㎝の層位である。２層は灰色微砂を主体とした薄い層位が，複数堆積したものをまとめている。最大厚は72㎝である。１・２層からは，ほとんど遺物が検出されなかった。３層はオリーブ黒色，灰オリーブ色などの暗色系微砂から構成された層位で，溝底を覆うように堆積している。最大厚は80㎝で，特にその下半部には古式土師器や木器など，夥しい量の遺物が包含され，遺物のほぼ全量がこの層準に由来する。視覚的には有機質に富んだ泥土状を呈しており，遺物の他に貝殻・昆虫・動物骨片・動物歯牙・自然木・木葉・種子・植物繊維など，動植物遺体の包含も認められた。４層はＳＤ1108の両岸に最大厚40㎝で堆積した灰色系微砂からなる層位である。これは溝底には全く存在せず，その両岸の斜面を覆うのみである。層位的には３層の下位にあり，３層は４層の形成後に堆積している。溝は４層が形成した斜面下方から急角度で落ち込んでおり，底は平坦に近い断面形状を呈する。こうした堆積状況から３層形成以前の段階において，溝底が浚渫された形跡を窺うことができる。

出土遺物には古式土師器・土製品・木器・焼石などがある。これらの遺物は溝底を中心にほぼ全域か

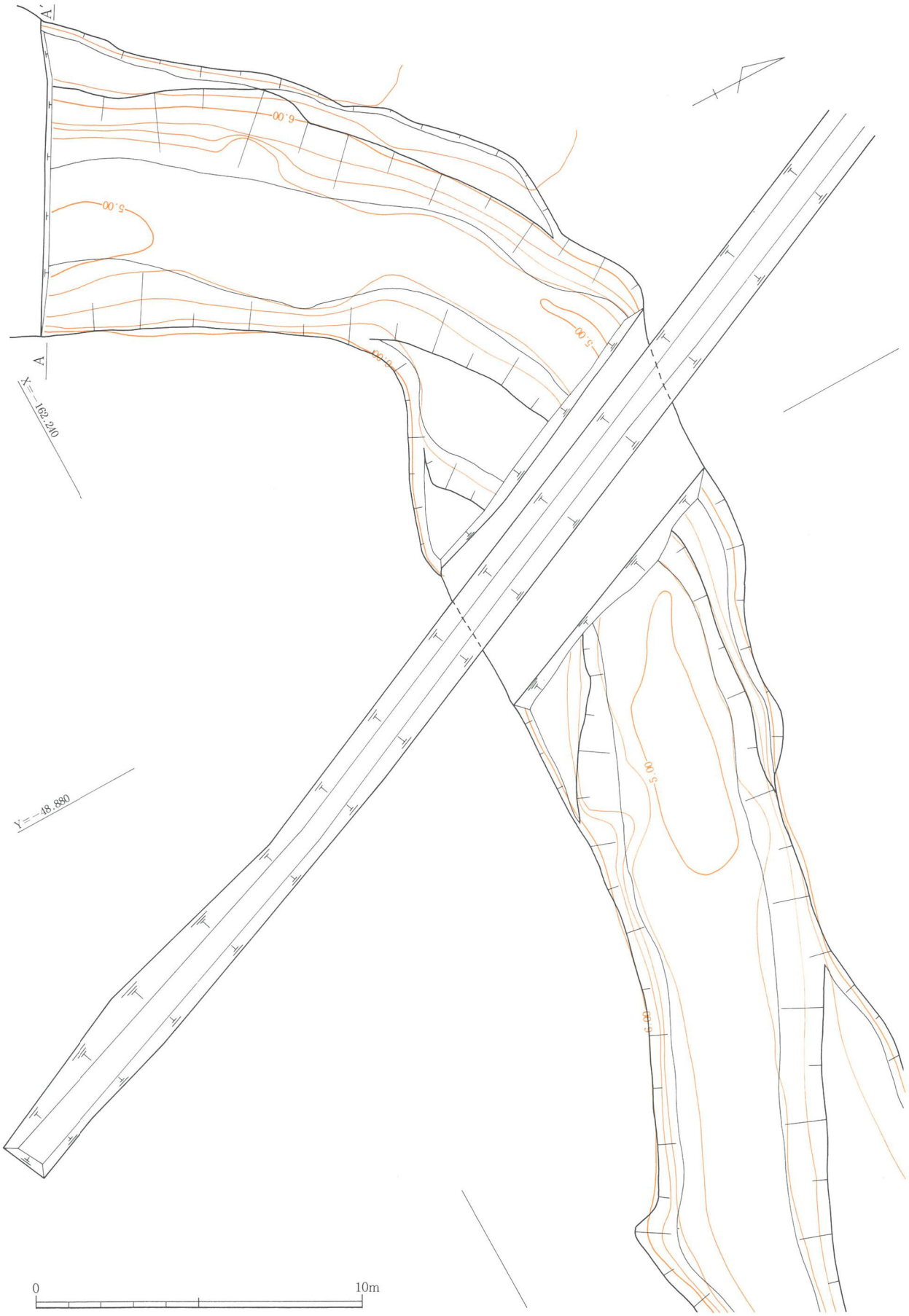


Fig. 116　ＳＤ1108平面図

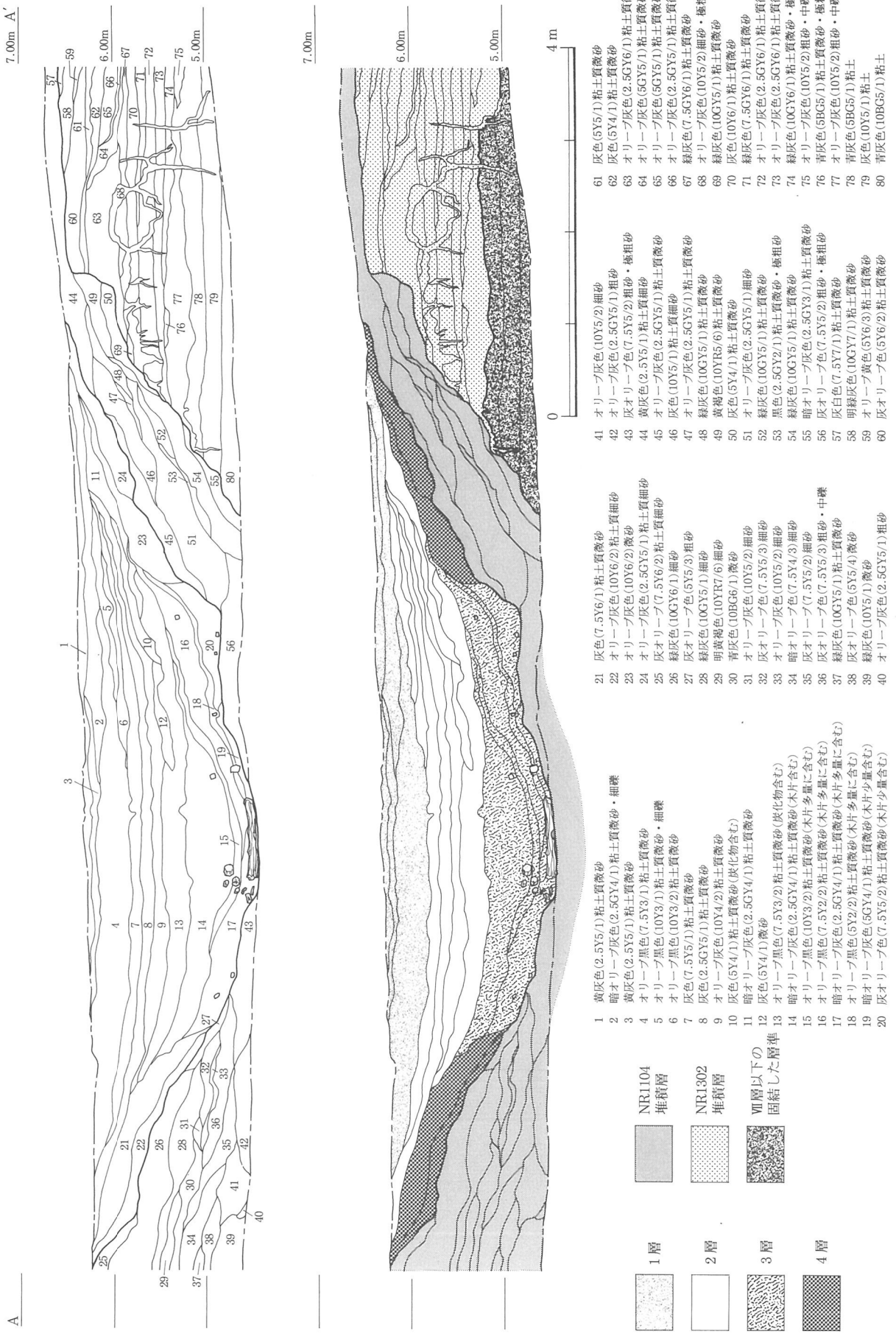


Fig. 117　ＳＤ1108断面図

ら出土した(Fig.118・119)。古式土師器は大溝の肩口から溝底にかけて検出され，ほぼ全点が３層に帰属する。記録できた範囲内で器種ごとの分布をみると，壷・甕はほぼ全域に分布し，その他の器種では南西半部に集中する傾向が窺える(Fig.120・121)。壷831は7.8m離れた破片同士が接合しており，溝内での土器破片の移動を示すことから，ある程度の流水のあった時期が存在したのであろう。

木器はすべて３層中から検出された(Fig.122)。木器の長軸は概ね溝の方向と一致をみせ，溝底に漂着したような状況であった。検出状況からは環形付木製品Ｗ１，刀剣把装具Ｗ２，短甲Ｗ３，琴Ｗ７などの目立った木器は，調査区の西端付近に集中する傾向があり，鍬などの農具や建築部材は全域的に分布するようである。未製品などの存在から，これらが水漬け状態で貯蔵されていた可能性も皆無ではないが，大半の木器は出土状況から概ね廃棄状況を示すものと思われ，いずれにせよ水漬けの状態で埋没したに相違ない。このことから木質遺物に関しては溝内で漂流することによって，原位置を留めない可能性を認めなければならない。従って大半の木器について，出土位置の関係に積極的な評価は土器以上に見出すことはできない。しかしその中で，比較的集中して検出された木器もある。四方転びの箱ではＷ８～11・14・15・20が，Ｃ12ＩＫ付近の3.0mの範囲で帯状に，またW16・17・19・21はＣ12ＨＩ付近の6.9mの範囲で散漫な分布をみせる。いずれも調査区の北東半部に主たる分布域を持つ。またその西側のＣ12ＨＧ付近では木錘W83・85・93・95・98が4.8m，およびW91・92・94・96がＣ12ＧＤの1.7mの範囲でそれぞれまとまって出土している。四方転びの箱では，Ｗ８～11の組み合わせがほぼ確実で，このように１個体の製品が分解破損した結果，分布域が接近したと思われる。また使用時に複数が組み合わされる木錘は，相互に縄などで緊縛されていたか，一括投棄された地点から大きな移動がなかったと考えられる。なお木器の移動距離の長短は，遺物が溝内に位置してから埋没するまでの時間幅にも左右されるであろう。

２-ａ．遺物：土器・土製品(Fig.123～156，PL.126～147)

混入とみられる微量の中・後期弥生土器などを除き，すべて古式土師器で占められ，また須恵器は１・２層を含め１片も出土していない。器種は壷(769～870・1081)，甕(871～958)，高杯(959～993)，器台(994～1018・1197)，小形丸底土器(1019～1080・1184)，鉢(1082～1183・1185～1196)，製塩土器(1198～1219)，蛸壷(1220～1226)，土製品(1227)で構成される。1228は弥生時代中期の回転台である。

壷には直口壷，広口壷，複合口縁壷，小形壷その他がある。769～811・813～819・821～825・830は直口壷である。直口壷では769～780などが小形の一群である。口縁部の形態は直線的に立ち上がるものや，やや外反するものがある。また口縁部の長さにも長短がある。口縁端部は丸く仕上げた個体が多いが，端面をもつ806～808や，端面に刻目をもつ810，また口縁端部をやや内側に屈曲させた802・821などがある。底部を残すものでは丸底が多数を占める。829・831は短い口縁部，やや強い外反の特徴などから広口壷とした。いずれも平底をもつ。直口壷830では同じく平底を備えている。他に底部を残す壷には827・828・832がある。直口壷の外面調整には，ハケ・ナデなど平滑技法を多用するもの，ミガキＡ，ミガキＢを用いたもの，あるいはその両者を折衷したものなどがある。826・833～846は中形～大形の複合口縁壷である。826は搬入土器と思われ，口縁部が直立する。また体部に外反する頸部が直接取り付く。837～839・844は口縁部外面に数条の波状紋を飾る。847～870・1081は小形～中形の壷で，搬入土器が多いようである。個体数が少なく，類型化は困難である。

甕には庄内式甕，布留式祖形甕，布留式甕，弥生形甕その他がある。庄内式甕には庄内式甕Ａ(871・872)，庄内式甕Ｂ(873～879)がある。いずれも体部上半には右上がりの極細タタキがみられ，肩部以下

Fig.118　ＳＤ1108遺物出土状況図（１）

Fig. 119　ＳＤ1108遺物出土状況図（２）

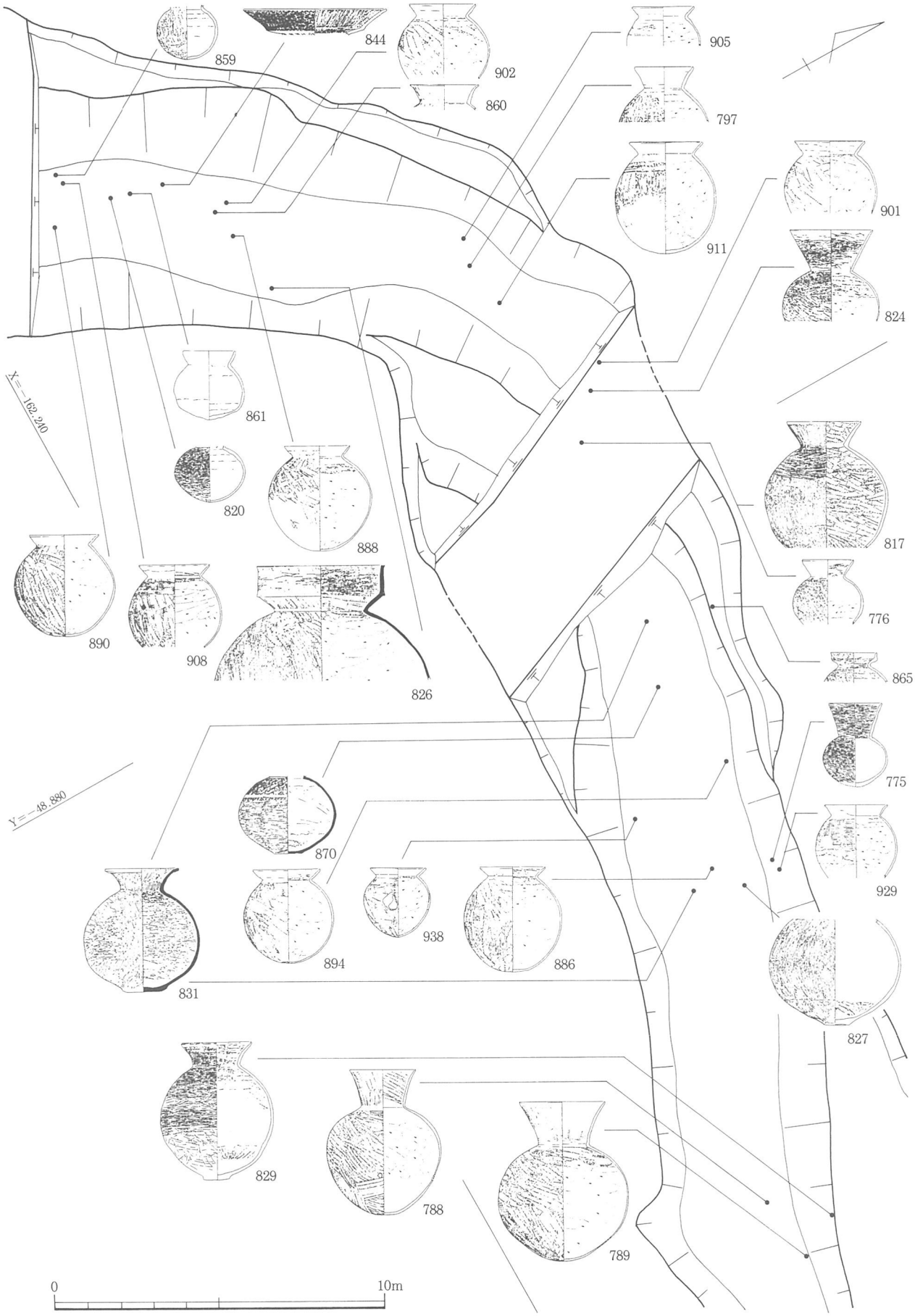


Fig.120　ＳＤ1108土器平面分布図（１）

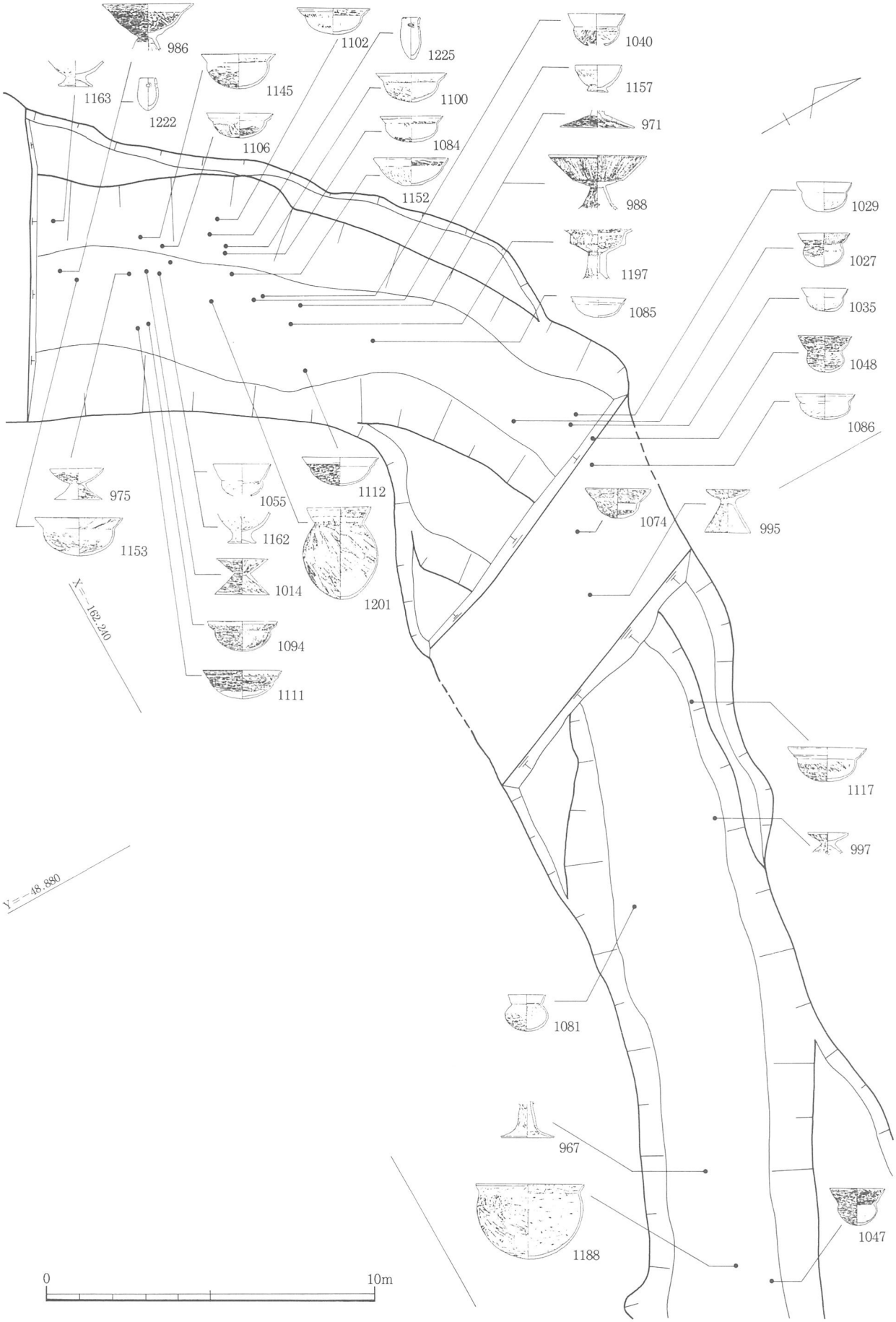


Fig. 121　ＳＤ1108土器平面分布図（２）

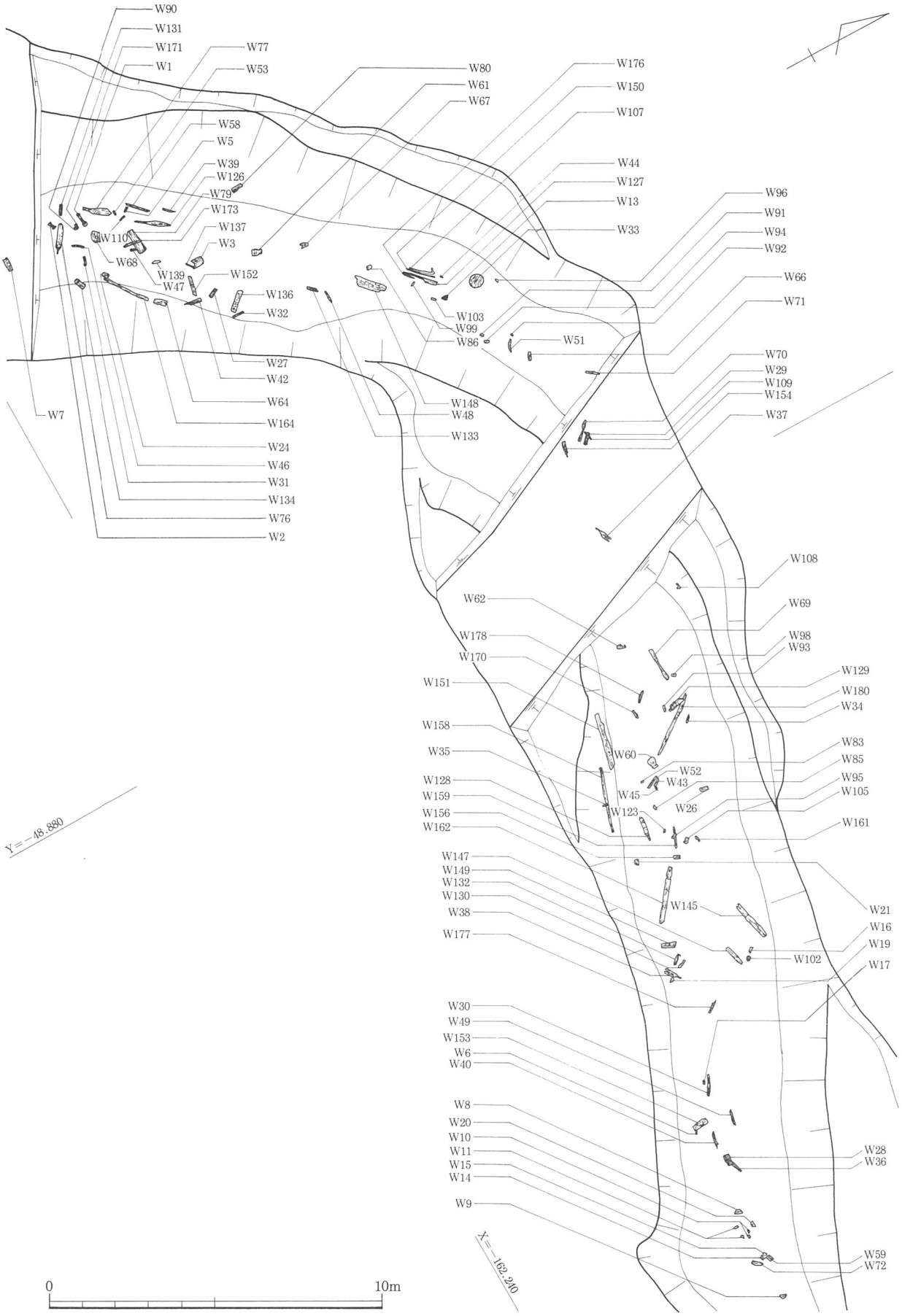


Fig. 122　ＳＤ1108木器平面分布図

をハケ調整する。880～904などは布留式祖形甕である。これらの中には庄内式甕の型式組列の延長として捉え得る可能性をもつものも便宜的に含める。いずれも外面は右下がり斜方向・縦方向のハケ調整が基本で，内面にケズリを加えた個体が圧倒的に多いが，884などケズリを行わない個体も少数ながら存在する。905～918などは布留式甕で，斜・縦方向ハケのち肩部に横方向ハケを１周させ，内面にはいずれもケズリが加えられている。口縁端部はやや上方に拡張したものや，端面をもつものなど多様である。919～933は弥生形甕である。大半は弥生形甕Ａであるが，929・930・932・933は内面を削っており，弥生形甕Ｂに分類される。Ａでも形態上は庄内式甕を模した個体もある。934～955は中形以下の布留式祖形甕その他の甕で，類型化の困難な個体も多い。956～958は東海系のＳ字状口縁台付甕である。

高杯には有稜高杯Ａ・Ｃ，布留系高杯，有段高杯，椀形高杯Ｂ，低脚などその他の高杯Ｘがある。959～965は有稜高杯Ｃで，ミガキＢで最終調整されている。966は布留系高杯で平滑技法仕上げである。脚部に透孔をもたない。968は有段高杯で，杯部がミガキＢで調整されている。969は有稜高杯Ａで，杯部稜線は下方に位置している。他に脚部のみであるが，992・993も有稜高杯Ａであろう。970～972は完形品に恵まれないが，椀形高杯Ｂである。ハケ，ミガキＡ，ミガキＢなど各種の調整がある。973～979・981～985は低脚の高杯で，脚部に透孔をもつ976・977・984と，透孔をもたない973～975・978・979・981～983・985がある。底部を欠く980も低脚高杯に含まれるであろう。調整にはハケ・ナデなど平滑技法の他，ミガキＡ，ミガキＢがある。986～991はその他の高杯で，986～988は搬入土器と思われる。988は杯部内外面に黒漆が塗布されている。

器台には小形器台Ｂ・Ｃ・Ｘ，有段器台がある。996～1011は小形器台Ｂで，口縁端部はやや上方に拡張された個体が目立つ。調整はナデ，ハケ，ミガキＡ，ミガキＢなど各種が認められるが，999はミガキＡ・Ｂが共に用いられている。1012～1018は小形器台Ｃで，いずれも精良な胎土を用いたシャープな作りで，ミガキＢで仕上げられている。994・995は小形器台Ｂを模倣した小形器台Ｘである。

小形丸底土器は，口縁部の発達に各段階のものが認められる。1019は扁球状の体部に短く立ち上がる口縁部を備えた小形丸底土器である。表面の調整にはナデ，ハケ，ミガキＡ・ミガキＢなど各種が認められ，また胎土も個体によって精粗の相違がある。1070は最も口縁部が発達した個体で，外面に赤色顔料が塗布されていた形跡がある。1073・1074は搬入土器と思われる。1075～1080はやや扁球状の体部に，立ち上がりの強い内湾する口縁部を備えている。いずれも胎土は精良で，外面調整に密なミガキＢを加え，口縁部内面にミガキＣを施す個体もある。

有段口縁鉢に分類した1082～1128は，浅い丸底の体部に一旦屈曲する短い口縁部を備える。口縁部の屈曲には個体によって強弱がある。口径は12～18㎝前後までの幅がある。表面の最終調整にはハケ，ナデ，ミガキＡ，ミガキＢ，ミガキＣがあるが，平滑技法とミガキＢが折半するようである。1118は体部外面底部付近に鋸歯状のヘラ描きを施している。

鉢には小形鉢Ａ～Ｄ，小形鉢Ｈ，有孔鉢，中形鉢，大形鉢，超大形鉢，その他がある。1132・1134～1153は小形鉢Ｃで，完全な丸底の個体が多いが，1149・1152のように退化した平底を有する個体もある。1154～1161は小形鉢Ｂで，基本的に上げ底状で裾広がりの底部形態Ｃであるが，1160のように裾広がりで下面が平底を呈した個体もある。1162・1163はＢに形態が類似するが，口縁部を欠くので詳細は不明である。1133・1164～1171は小形鉢Ａで，平底を残す1164・1165，退化した平底の1166・1167，ほぼ丸底化した1168・1169がある。1172～1177は小形鉢Ｈで，いずれも平滑技法で調整されている。1178の有孔鉢は極めて粗製である。小形鉢Ｄには平底の1185，丸底の1179～1182がある。丸底の小形鉢Ｄは，小